

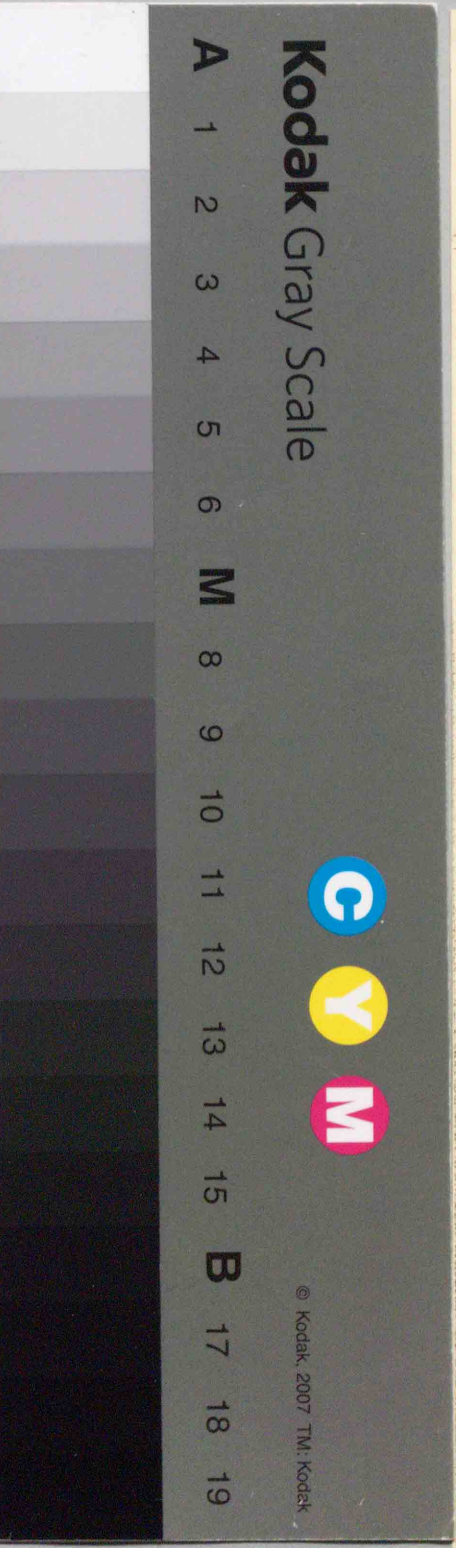
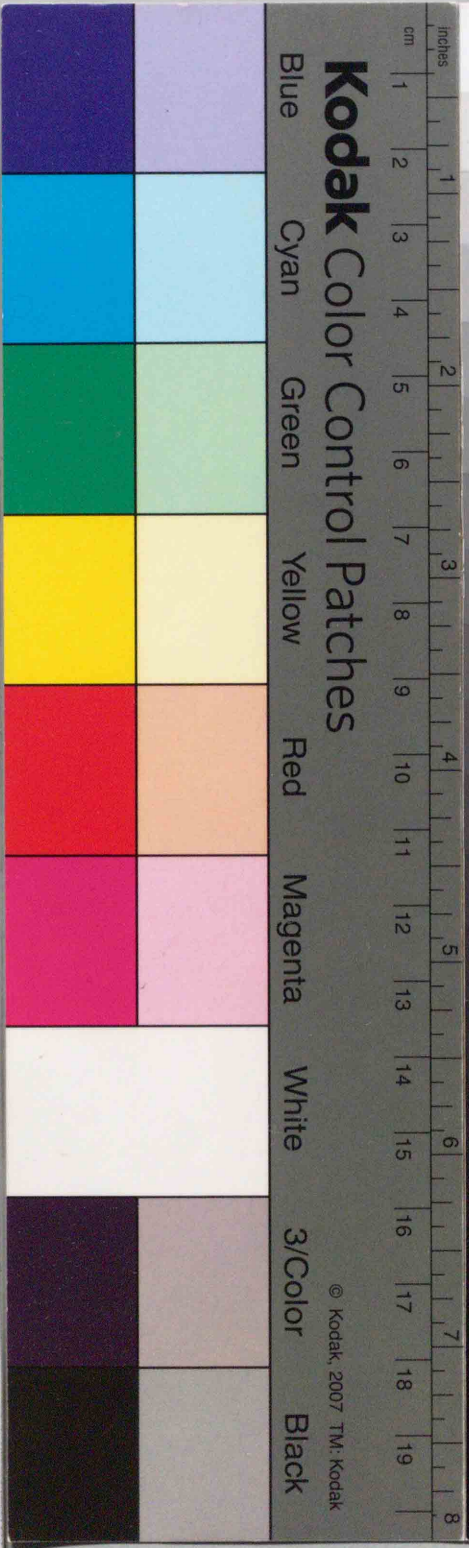


4a
810
昭3

新
日
本
讀
本

九

修
正
版



41509

教科書文庫

4
810
41-1928
20000 85182



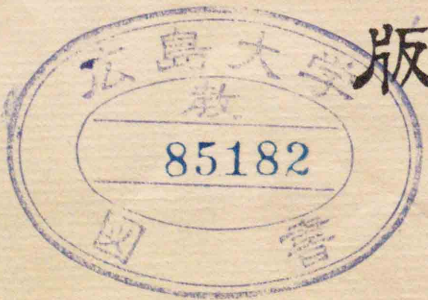
資料室

4a
810
昭3

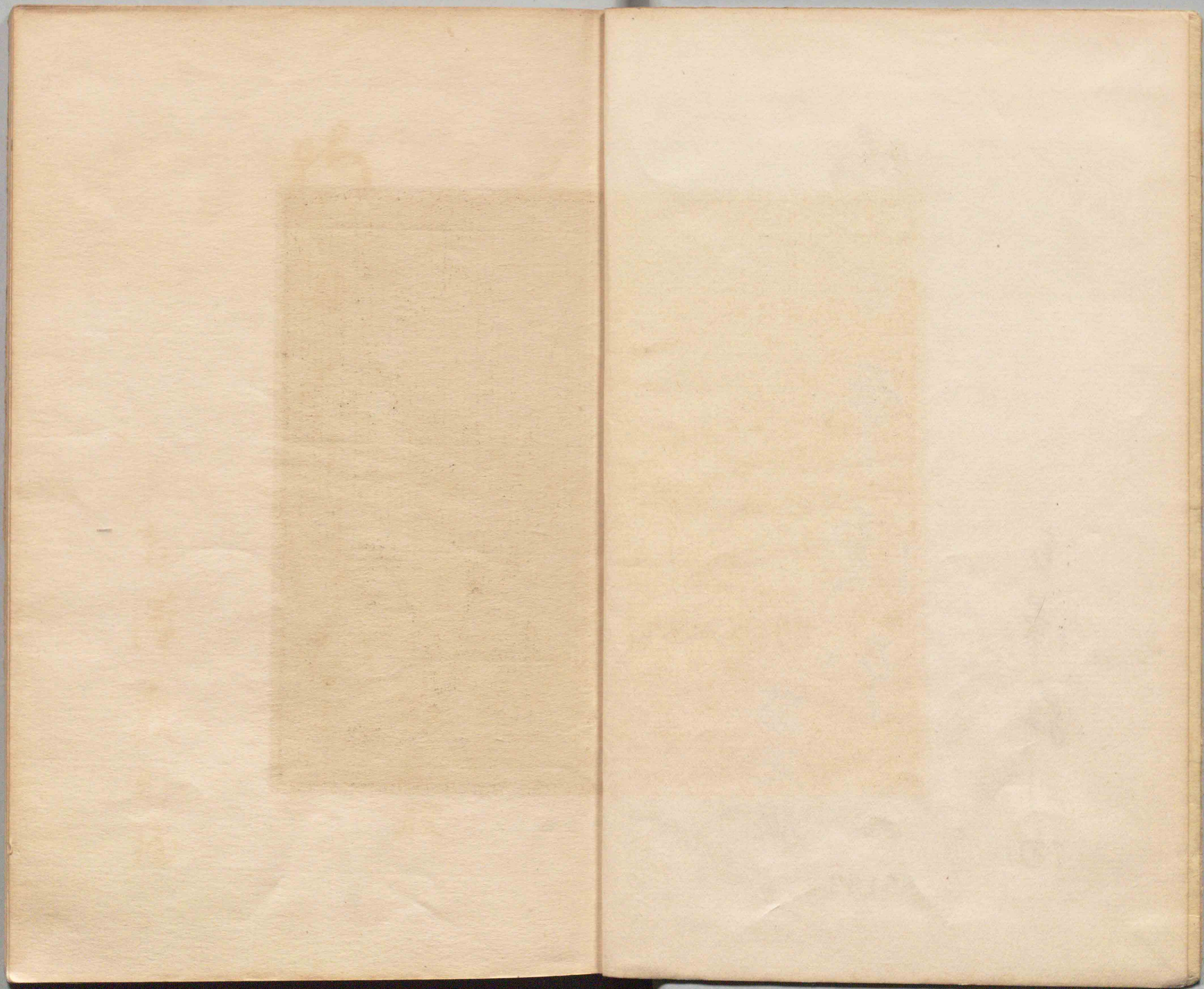
新
日
年
讀
本

修正版

吉澤義則編



昭和三年十二月三日
中學校國語科用
文部省檢定濟





(筆琳光) 圖の樹梅邊水

新日本讀本 修正版 卷九

目次

一	建國の大精神	永田秀次郎	一
二	民ぐさのほぎうた	蒲原有明	九
三	○ 月花のあはれ	(琴後集)	三
四	○ 東路の旅	(東關紀行)	六

五 能 狂 言

芳賀 矢一 三

六 萩 大 名

(狂言記) 七

七 元祿の三文豪

藤井紫影 四

八 孝と不孝の中に立つ武士

井原西鶴 六

九 小山田太郎高家

近松門左衛門 四

一〇 美術に現れたる日本國民性

藤懸 靜也 五

二 暮 鐘

土井 晩翠 七

三 芳宜園大人の靈を祭る

(琴後集) 六

三 和 歌 二 集

古今和歌集より

(諸家) 六

新古今和歌集より

(諸家) 六

四 世界 の 四 聖

高山樗牛 六

五 能 狂 言

芳賀 矢一 三

六 萩 大 名

(狂言記) 七

七 元祿の三文豪

藤井紫影 四

八 孝と不孝の中に立つ武士

井原西鶴 六

九 小山田太郎高家

近松門左衛門 四

一〇 美術に現れたる日本國民性

藤懸 靜也 五

二 暮 鐘

土井 晩翠 七

三 芳宜園大人の靈を祭る

(琴後集) 六

三 和 歌 二 集

古今和歌集より

(諸家) 六

新古今和歌集より

(諸家) 六

四 世界 の 四 聖

高山樗牛 六

五	世界の四聖	高山樗牛	九
六	歴史と自然と人	大類 伸	一七
七	歴史と自然と人	大類 伸	二四
八	讀書の意義	阿部次郎	三三
九	知と愛	西田幾多郎	四三
一〇	社會と感激	中澤臨川	五九

二	國民精神の統一	高山樗牛	一四
三	明治文學	佐々醒雪	二六

附 録			
十	訓抄抄		一七
	年々隨筆抄		二五
	樞園文集抄		二六

目次終

新日本讀本 修正版 卷九

一 建國の大精神

永田秀次郎

永田秀次郎
兵庫縣の人、
明治九年生、
貴族院議員。

永田秀次郎

吾が建國の歴史は、天孫降臨に始まるのであつて、神武天皇に始まるのではない。吾が建國の精神は、神代史に於ける神話に於て認めることが出来る。吾々は建國の精神に對して如何なる理解を持つかといふに、先づ第一に、吾が國民は平和を愛し、大義名分を重んずるといふことである。外國人は動もすれば吾が國民を目して好戰國民だといひ、或は第二のドイツだと中傷するが、それは全く誤解である。日清日露兩戰役の如きは、吾が國が徳川時代三百年の間、全く鎖國主義を取つてゐたので、國民

一 建國の大精神

多田寛一

が長夜の夢から醒めた時には、吾が國は土地が狭く、資源が貧弱で、而も歐米の勢力が潮のやうに迫つて來てゐたため、この間に處して、獨立自尊を確保するため、眞に已むを得ず開いた戦争であつたのである。

吾が日本國民は、自然を愛し、春は櫻狩、秋は紅葉狩と稱して遊び楽しむ極めて樂天的な國民性を有してゐる。一旦緩急のある場合には燃えるやうな愛國心の發露を見るけれども、平常は最も平和を好愛する國民である。

吾が國は天照大御神を天祖と仰いでゐる。この大御神はいふまでもなく女神であらせられる。即ち平和を愛し、争を好まらず、光明を徳とし給ふ神である。神話にあるやうに、素戔嗚命が亂暴をなされた時には、これと争はれないで、天の岩戸に避けられたほどに平和を愛し給ふ神である。そして、吾々の祖先であ

る八百萬の神々は、この大御神を慕ひ奉つたのである。若しも吾々の祖先が戦争を好み、武勇を主としてゐたならば、必ずや素戔嗚命を天祖と仰ぐべきはずである。所が、武勇に優れ給ふ素戔嗚命に従はないで、平和を愛する女神を天祖と仰いだのは、即ち吾が國民性が平和を愛するからであるといはなければならぬ。

また三種の神器は、八咫鏡と八坂瓊曲玉と叢雲の劍とであるが、その中でも、天照大御神が之を天孫瓊々杵命に下し賜はつた時、特に寶鏡に重きを置かせられて、この鏡を見ること、猶吾を見るが如くせよ」とまで仰せられた。三種の神器の意味は、北畠親房が説いたやうに、支那風にいへば智仁勇であつて、鏡を以て是非、善惡を照らす正直の本源であるとし、曲玉を以て柔和慈悲の本源であるとし、劍を以て決斷の本源であるとされてゐる。

北畠親房
源氏、吉野朝
の忠臣、大納言、正平九年
(三〇四)歿、年
六十三。

そして、鏡を第一位に置き、鏡は明なことを形としてゐるから、心の中が明であれば、慈悲も決斷もその中に含まれるとし、これが即ち國を治める道であるとして、天孫に下し賜うたのである。

これに就いて、吾々はまた考へて見るに、鏡を第一位に置くことには深遠な意義が含まれてゐる。若しも吾々の祖先が戦争を好み、武勇を主としたならば、かやうな神話は恐らく生れなかつたであらう。明德を現す鏡を第一位に置いて、勇武を現す劍を第二位にも第三位にも置いたことは、取りも直さず吾が國民性が本來平和を愛することを一層證據立てるものである。

更に天孫降臨に先立つて、出雲國の大國主命が一族を率ゐて歸順されたことは、これまた平和を愛し、大義名分を重んずる精神の發露である。さうでなければ、かやうな場合に戦争せず、歸順することは想像することが出来ない。かやうな事柄を通

じて、吾々は吾が建國の高明な精神を窺ひ知ることが出来る。

次に吾が建國の精神として、天祖の直系に屬する以外の者はすべて平等であつて、同一の權利を有してゐたと考へられる。即ち神話に於ては、謂はゆる八百萬の神と稱して、天祖以外の者もまたすべて神として取扱はれてゐたのである。そして、何か事のある度毎に、天の安の河原に神集ひに集ひ、神謀りに謀り給うたことは、これを現代的にいへば、萬機公論に決する精神である。即ち八百萬の神を同一視して、その輿論を聞かれたのである。例へば、武甕槌命、經津主命を出雲國へ遣はされた時なども、八百萬の神の合議の結果である。また天照大御神が天の岩戸に籠られた時にも、八百萬の神が合議して事を決したのである。この心は神武天皇以後の政治上にも現れてゐる。即ち吾々の祖先はすべて四民平等であつた。同じく皇室を中心とし幹と

して、その枝となり葉となつて榮えたのであるから、すべてが同じ血液を受けて生れたのである。勿論その司る所によつて役目は違つてゐた。例へば中臣氏は神を祭る儀式を司り、神と人との中間に立つてゐたから中臣といひ、物部氏は物の部即ち武器を司つてゐたから物部といひ、大伴氏は天皇のお伴をしたから大伴といふやうに、役目によつてその姓を異にしてゐたけれども、すべて上下の階級は存在してゐなかつたのである。

かやうに、皇室以外のものは平等であるといふ觀念は建國以來一貫してゐる。即ち天に二つの日はなく、土に二人の王はないと考へて、皇室を吾々の君主と仰ぎ、普天の下、率土の濱、王の民でない者はなく、王の土でない處はないといふ觀念が、三千年を通じて吾々の頭を支配してゐる。

この根本的の觀念があるために、大化の新政に於て、班田收授

晋天の下、
 普天之下、莫
 非王土、率土
 之濱、莫非
 王臣。(詩經)

の法が容易に行はれたのである。即ち中大兄皇子を始め、あらゆる豪族が所有してゐた私民私田を全部皇室に献上させ、その土地を男一人につき二段づつ、女一人につきその三分の二づつ平等に分配し、六年目毎に更にこれを一度取上げた上、新しい人口に應じて分配したのである。

また明治維新に於て、諸侯が版籍を奉還したのも、全く土地も人民もすべて天皇の所有であるといふ觀念の發露である。即ち皇室以外の者はすべて平等であつて、皇室に版籍を返上することになれば、何人もこれを拒むことが出来ないとの觀念を有してゐたのである。故に吾々は神話を通じて、吾々の祖先は萬機の公論に決すべきである、また四民は平等であつて何等の階級もないといふ觀念を有してゐたことを明に認めることが出来る。

それなら、吾々は、どうして建國の大精神を現代に適用するべきであるか。神代と現代とは、勿論時勢が違つてゐるから、同じ方法でこれを適用することが出来ないのは、いふまでもない。併し、この平和を愛する精神、萬機公論に決する精神、四民平等の精神、大義名分を重んずる精神などは、これを古今に通じて謬らず、これを中外に施して悖らない大精神である。

この故に、吾々はこの建國の大精神に立返つて、吾々の考へ方を高尚にし、潔白にし、そして、三種の神器の鏡を第一位のものとする精神に則り、心の鏡に照しても、何等恥ぢる所のない、公正大なる心持に立返らなければならぬ。

神代の大精神
 神代の大精神

二 民ぐさのほぎうた

蒲原 有明

よろこび

なれがゆらめく高むね

大海原にゆきめぐれる

潮なれやさこそ

光にみてもあふるゝなれ

よろこび

なれがゑまへる唇

かの曉に燃え淨まる
焰なれやさこそ
かゞよふ調の音にたつなれ

東方

こゝに國するよろこび

高日めぐる黄金御座

あゝ誰かはこゝに

御座のにほひを仰がざらむ

民ぐさ

われらさゝぐる賀歌
呼息のかぎりは言あげせむ
せめてはその聲ね
羽ぶき照り映えて天がけるまで

よろこび

なれがねがひはくまなく
かゞやく幸やそのもろごゑ
さればさればこそ
いとく高きをたゝふるなれ

三月花のあはれ

花をめぐらしみ月をあはれむならはしなむながれての世は
さらなる。其のみなもとを考ふるに、いとしも上つ代よりぞ起

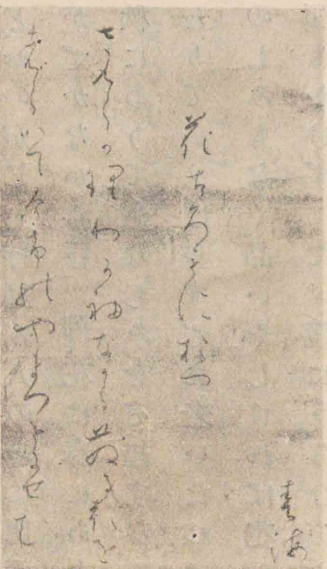


村田春海

りにける。花に心を慰めませし
はわかざくらの宮に始まり、月を
言の葉にかけ給へるは朝倉の宮
よりなむ聞えたる。しかありて
後、藤原奈良の御世にいたりては、
歌人おほくいで来て、かたみにみ
やびをかはし、心々に思をのぶること、皆月花をもて心の種とぞ
なしたりける。かくて世のうつるにしたがひて、此のすさみい
よ／＼盛になりもてゆきて、あるは物おもひなき春を花による

ながれての世
わかざくらの宮
履仲天皇を申す。
朝倉の宮
雄略天皇を申す。
藤原の世
持統・文武二帝の御代。
奈良の世
元明天皇から
光仁天皇まで
七代をいふ。

こび、加はる老を月に嘆き、あるは賢きも愚なるも、たよりなき所
に花をたづね、しるべなき闇に月をたどり、あるは花の命を神に
祈り、月の行方を佛に契り、又下の下なる薪木こる山がつ、いぶせ



村田春海筆

も、月と花とに心をよせ
ざるなむあらざりけら
し。さるは、かけまくも
畏き大御遊のきはこと
なるが中にも、月と花と
の爲には、時にのぞみて殊更にうたげの筵を設け給ふ事おきて
たがはず、のどかなる御世の例にさへなり來にけり。かくさま
ざまなる代々のあとを見るに、古も今も高きもみじかきも、月と
花とをなつかしみおもへること等しくて、何れを餘れりとし、何

三月花のあはれ

山がつ
村田春海筆
花ころもにお
さくらがらわ
る花を、はら
はでけふのや
まつとにせむ
かけまくも
うたげの筵
知人も
見れば
三
月花のあはれ
行
三
月花のあはれ
行

三
月花のあはれ
行

三
月花のあはれ
行

れをたらずとして、一かたに心よせたる人誰かはあらむ。しか
るを、今にありて其のよしあしをことわりいはむは、人わらへに
もなりぬべし。

しかはあれど之をことわるに故あり。その劣り優りはもと
よりかれにはあらざめれど、おのがじし打見る人の身に比べ思
はむには、其のよるかたいかでかなからむ。抑、花は春にありて
にぎははしきにより、月は秋にありてかなしみをぞ起すなる。

今このくちおきなが心にとりていはば、身すでに老いたれば蕾
める花の盛まちいでむたのしみもなく、品いやしければ花々し
き世をへて時にかをらむ願もかけず。たゞ鏡にうちむかふ折
しも、頭の霜を見ては月の影かと驚き、かたぶく齢をおもひては
入りかたの月ぞ身によそへつべき。かゝれば花にはおのづか
らにうとく、月にぞ心のひかれける。さはいへこはわが身ひと

つのすさみなり。おほよそ人の爲にはいかでかまねびもいで
む。

(琴後集)

柿本人麿

春霞立ちまふ山と見えつるは

此のも彼のもの櫻なりけり

西行法師

鹿の音を垣ねにこめて聞くのみか

月もすみけり秋の山里

月もすみけり秋の山里

一四 陽春の代へて

死別と云ふ

死別と云ふ

死別と云ふ

おほよそ人

おのがじし

おのがじし

おほよそ人
村田春海の著、
十五卷。
村田春海、江
戸の人、國學
者、文化八年
(西暦一八七
六年)歿
六十六。

おほよそ人

おほよそ人

おほよそ人

おほよそ人

おほよそ人

おほよそ人

おほよそ人

卷末地圖參照

逢坂の關

今の大津市の南、文徳天皇の天安元年ここに關所を建てられ、桓武天皇の延暦十四年に廢せられた。

函谷

遊子猶行に於て、今やひく水にかけ見え、逢坂の關の清

蟬丸

盲人、或はいふ延喜帝の第一皇子、和歌及琵琶に巧みであつた。

關山

關所のある山で、こゝは逢坂山を指す。

粟屋

世の中はとてもかくても過してん、宮も、粟屋もはてしなれば(今昔物語)

打出濱

今の大津市松本石場邊の古名。

粟津原

大津市の東南、膳所町の内。

飛鳥の岡本宮

高市郡岡村にあつた。舒明天皇の二年から六年間の皇居。後齊明天皇の二年に都を遷し、天智天皇の六年迄十二年間の皇居。

洲崎

洲崎は、大津市の南、水の流れのつらなつて、南から北に流れる。

四東路の旅

四東路の旅

東山の邊なるすみかを出でて、逢坂の關打過ぐる程に、駒ひきわたる望月の頃もやうく、近き空なれば、秋霧たちわたりて、深き夜の月影ほのかなり。木綿付鳥かすかに音づれて、遊子なほ残月に行きけん函谷の有様思ひ出でらる。昔蟬丸といひける世捨人、この關のあたりに、粟屋の床を結びて、常は琵琶を弾きて心をすまし、和歌を詠じて懷を述べけり。嵐の風の烈しきを侘びつゝ、ぞ過しける。

古の粟屋の床のあたりまで

心をとむるあふさかの關

關山を過ぎぬれば、打出濱粟津原など聞けども、未だ夜の中なれば、さだかにも見え分かず。昔天智天皇の御代、大和の國飛鳥

の岡本宮より、近江の志賀の郡に都遷ありて、大津宮を造られけりと聞くにも、このほどは古き皇居の跡ぞかすと覺えてあはれなり。

さゞ波や大津の宮のあれしより

名のみ残れる志賀のふるさと

この程をも行きすぎて、野路といふ處に到りぬ。草の原露繁くして、旅衣いつしか袖の雫とこころせし。篠原といふ處を見れば、西東へ遙に長き堤あり。北には里人住家を占め、南には池の面遠く見え渡る。向ひの汀、緑深き松のむらだち、波の色も一つになり、南山の影を浸さねども、青くして混濛たり。洲崎處々に入りちがひて、葦かつみなどおひ渡れる中に、鴛鴦鴨の打群れて飛びちがふさま、葦手を書けるやうなり。昔都を立つ旅人この宿に泊りけるが、今は打過ぐるたぐひのみ多くして、家居もまば

四東路の旅

あふさかの關、打出濱、粟津原、飛鳥の岡本宮、洲崎、大津市、膳所町、高市郡岡村、松本石場邊、大津市の東南、膳所町の内、飛鳥の岡本宮、高市郡岡村、あつた。舒明天皇の二年から六年間の皇居。後齊明天皇の二年に都を遷し、天智天皇の六年迄十二年間の皇居。

木綿付鳥(トトリ)の音、秋霧、残月、遊子、世捨人、粟屋、琵琶、嵐、飛鳥、大和、國、飛鳥、御代、天智天皇、打出濱、粟津原、關山、逢坂、關、大津宮、志賀、野路、篠原、堤、池、汀、松、葦、鴨、鴛鴦、都、旅人、宿、家居、まばら

行々人旅人
 近江國栗太郡
 篠原
 近江國野洲郡
 南山の影
 昆明春。昆明
 春。春池岸古
 春流新。影浸
 南山。青泥漢。
 波沈西山。紅
 淵淪。白氏文
 集。

四東路の旅

らになりゆくなど聞くこそ、變りゆく世の習、飛鳥の川の淵瀬に
 は限らざりけめと覺ゆ。

行く人もとまらぬ里となりしより

荒れのみまさる野路の篠原

ゆき暮れぬれば武佐寺といふ山寺のあたりに泊りぬ。まば
 らなるとこの秋風夜更くるまゝに身にしみて、都にはいつしか



野路の玉川

引きかへたるこゝちす。
 枕に近き鐘の聲曉の空
 に音づれて、かの遺愛寺
 の邊の草の庵の寢覺も、
 かくやありけんとは
 れなり。行末遠き旅の
 空、思ひ續けられていと

遺愛寺
 日高睡足猶慵
 起、小閣重
 衾不怕寒。
 遺愛寺鐘歇
 枕聽、香爐峰
 雪撥、簾看。
 (白氏文集)

いたう物悲し
 都出でていくかも
 あらぬ今宵だに
 かたしきわびぬ
 とこの秋風
 音に聞きし醒井を見
 れば、蔭暗き木の岩根よ



東海道の名所圖會

り流れ出づる清水、あまり涼しきまですみ渡りて、實に身にしむ
 ばかりなり。餘熱未だ盡きざる程なれば、往還の旅人多く立ち
 よりて涼み合へり。かの西行が、
 道のべに清水流るゝ柳かげ
 しばしとてこそ立ちとまりつれ
 と、詠めるもかやうの處にや。

四東路の旅

あつふり年ハスルそのあ

四東路の旅

柏原

近江國阪田郡
不破の關屋

美濃國不破郡
關が原村大字

松尾に其の遺
跡がある。

後京極攝政
兼實の第二子

藤原良經(三
九一六六)

荒れにし後
人すまぬ不破

の關屋の板び
し後はたゞ秋

の風(新古今
集)

株瀬川

今杭瀬川と書
く、美濃國安

八、不破二郡
の境を流れる。

照る月なみ
水の面に照る

月なみながぞ
ふれば、こよ

ひぞ秋の最中
つこまゝなりける。源

順(拾遺集)
二千里の外

三五夜中新月
色、二千里外

故人心(白氏
文集)

東關紀行

源親行又は其
父光行の著と

もいふ。東海
道の行程を記

せるもの。

か、る旅

寝の月を見んとは

か、る旅

寝の月を見んとは

か、る旅

寝の月を見んとは

か、る旅

寝の月を見んとは

か、る旅

寝の月を見んとは

道のべの木蔭の清水むすぶとて

しばしすまぬ旅人ぞなき

柏原といふ處を立ちて、美濃國關山にもかゝりぬ。谷川霧の

底にもおとづれ、山風松の梢にしぐれわたりて、日影も見えぬ木

の下道、あはれに心ぼそし。越えはてぬれば不破の關屋なり。

萱屋の板庇年經にけりと見ゆるにも、後京極攝政殿の「荒れにし

後はたゞ秋の風」とよませたまへる歌おもひ出でられて、この

上は風情もめぐらし難ければ、鄙しき言の葉をのこさんもなか

なかに覺えて、此處をば空しく打過ぎぬ。

株瀬川といふ處にとまりて、夜ふくるほどに川端に立出でて

見れば、秋の最中の晴天清き川瀬にうつろひて、照る月なみも數

みゆるばかりに澄みわたれり。「二千里の外の人心の心」思ひ

やられて、旅の思いと抑へ難く覺ゆれば、月の影に筆を染めつ

つ、花洛を出でて三日株瀬川に宿して一宵、しばし幽吟を中秋

三五夜の月に傷ましめ、かつと遠情を前途一千里の雲に送る。

など、ある家の障子に書きつくるついでに、

知らざりき秋のなかばの今宵しも

かゝる旅寝の月を見んとは

かゝる旅寝の月を見んとは

(東關紀行)

柿本人麿

あづま野のけぶりのたてるところ見て

かへりみすれば月かたぶきぬ

四東路の旅

芳賀矢一
 福井市の人、
 慶應三年生、
 國學者、文學
 博士、元國學
 院大學々長、
 昭和二年歿、
 年六十一。

狂言(滑稽)
 能(滑稽)

能 狂 言
 神樂
 神樂

五能 狂 言

芳賀 矢一

二三

天照大神(天岩)
 舞

神樂
 能(滑稽)
 狂言(滑稽)
 里神樂
 組樂(宮平)

のは、能の狂言なり。
 に中古の物語に見え、
 者となりし歴史より
 さものにして、後に發
 のなり。しかも能樂
 し、今日に至るまで能

樂興行の際には、必ずその中間に狂言を演ず。一方能樂の悲劇
 的なるに對して、喜劇的性質を帯びたる狂言が、その中間に挿ま
 れ、相錯綜して一日の歡を悉さしむるは面白き對照といはざる
 べからず。然れども狂言のあくまで能樂の附屬物の如き位置
 に落ちたるは、その性質上及び事實上より、しかあるべき勢あれ

神樂
 神樂
 神樂

神明(神)
 いやちこ

破戒(滑稽)
 破戒(滑稽)
 破戒(滑稽)
 破戒(滑稽)
 破戒(滑稽)
 破戒(滑稽)
 破戒(滑稽)
 破戒(滑稽)
 破戒(滑稽)
 破戒(滑稽)
 破戒(滑稽)
 破戒(滑稽)

音樂的リズム

ばなり。蓋し能樂に於ては、古英雄古美人を材料として懐古の
 情を起さしめ、神明佛陀の功驗を示して、神々しさいやちこさを
 感ぜしむるに反し、狂言に於ては、無學なる大名破戒の僧似而非
 修驗者等を主人公として、一方は眞摯に、一方は滑稽に、一方は尊
 嚴の念を起さしむべく、一方は輕蔑の念を起さしむるに足れば
 なり。又謠曲は古來の秀歌名句を引用し、佛典の教義を説き、章
 曲に於ても頗る學者的なるに反し、狂言は當時の平話を以てこ
 れを綴り、章句の上にも學識を要せず。又その章曲を歌ふにも、
 謠曲は音樂的リズムを諳んじて、曲節に合せざるべからず。狂
 言はもとよりこのことなし。舞容に於ても、能樂は希臘の古劇
 の如く、舞方の上手は即ち役者にして、役者としての技術には專
 門の技術を要すること甚だ大なるに、狂言は比較的單純なり。
 又狂言は能の數番の中間に挿入せらるゝが爲に、その時間は役

五能 狂 言

二三

猿樂
能狂言
滑稽
能狂言
滑稽
能狂言
滑稽

五能 狂言

芳賀 矢一

猿樂の能と離るべからざる關係あるものは、能の狂言なり。
猿樂の名は滑稽の所作といふ意味にて、既に中古の物語に見え、
神社に奉仕せし猿樂の人が、猿樂の能の役者となりし歴史より
察すれば、猿樂の名はむしろ狂言に屬すべきものにして、後に發
達せる能樂の爲に、その名を奪はれたるものなり。しかも能樂
發達の後と雖も、尙これと密接の關係を有し、今日に至るまで、能
樂興行の際には、必ずその中間に狂言を演ず。一方能樂の悲劇
的なるに對して、喜劇的性質を帯びたる狂言が、その中間に挿ま
れ、相錯綜して一日の歡を悉さしむるは、面白い對照といはざる
べからず。然れども狂言のあくまで能樂の附屬物の如き位置
に落ちたるは、その性質上及び事實上より、しかあるべき勢あれ

神々しいやちこ
破戒の僧似而非
似而非修驗者
修驗者等
平話の如き位置
音樂的リズム

ばなり。蓋し能樂に於ては、古英雄古美人を材料として、懷古の
情を起さしめ、神明佛陀の功驗を示して、神々しいやちこさを
感ぜしむるに反し、狂言に於ては、無學なる大名、破戒の僧、似而非
修驗者等を主人公として、一方は眞摯に、一方は滑稽に、一方は尊
嚴の念を起さしむべく、一方は輕蔑の念を起さしむるに足れば
なり。又謠曲は古來の秀歌名句を引用し、佛典の教義を説き、章
曲に於ても頗る學者的なるに反し、狂言は當時の平話を以てこ
れを綴り、章句の上にも學識を要せず。又その章曲を歌ふにも、
謠曲は音樂的リズムを諳んじて、曲節に合せざるべからず。狂
言はもとよりこのことなし。舞容に於ても、能樂は希臘の古劇
の如く、舞方の上手は即ち役者にして、役者としての技術には專
門の技術を要すること甚だ大なるに、狂言は比較的單純なり。
又狂言は能の數番の中間に挿入せらるゝが爲に、その時間は役

扮装

シテマ役
附庸

方面

神

劇詩的

地の文

劇詩
抄持詩(白科)
抄持詩(劇屋休)

五能 狂言

二四

者の休息の爲、又は扮装を直す爲に用ひられ、ことに間の狂言の如きは、前シテが樂屋に入りて、後シテの装束に改むる間に用ひらるゝが、如き情態なるを以て、勢能樂に對しては附庸の地位に立たざるべからず。希臘の古劇を察するにも、喜劇悲劇の根本は相同じきが如く、我が能樂狂言も亦神事に起因して、兩面に相似たりと雖も、喜劇的方面を代表せる狂言となり、文安田樂能記、糺河原勸進能記等に於て間々に演ぜられたるを見る。唯その當時の全文悉く對話より成り、毫も地の文を挿まざるは、謠曲に比して一層純劇詩的性質を有せりといふべく、後世の脚本の根源をなせりといふべし。

狂言の作者及び製作の年代等の不明なるは、なほ謠曲の如し。千篇一律にして大抵同一模型の踏襲なること、一時の製作に非

千篇一律
踏襲
流布

ザーゲ
獨逸語、傳説
の意。
メルヘン
獨逸語、童話
の意。

修羅能

順

一 助能(神定係)
二 修羅能(戦)

るなり。皆一種のパロディなり。「このわたり」告らせ、貝をも持たぬ山伏の、道々嘘を吹かう

よ。」と云ふ如き謠曲の摹倣に非ざるはなし。舞容も科白も、謠曲に於ては尊嚴莊重の感を惹起すを主眼とし、狂言に於ては輕

五能 狂言

二五

科白
四番目物(糸)
五切能(美理人提)
摹倣(日まぬ)

三 助能(神定係)
四 四番目物(糸)
五 修羅能(戦)

あり。狂言已に能樂の附庸たるを甘んずるや、稽を仕組みたるものも、尠からず、通圓の如き、老の如き、その適例といはんか。通圓は宇治の茶

曲に於ては尊嚴莊重の感を惹起すを主眼とし、狂言に於ては輕

扮装

シテトモ役

附庸

神

附庸

地の文

劇詩
持事
進行

五能 狂言

二四

者の休息の爲、又は扮装を直す爲に用ひられ、ことに間の狂言の如きは、前シテが樂屋に入りて、後シテの装束に改むる間に用ひらるゝが如き情態なるを以て、勢能樂に對しては附庸の地位に立たざるべからず。希臘の古劇を察するにも、喜劇悲劇の根本は同じきが如く、我が能樂狂言も亦神事に起因して、兩面に發達せしこと甚だ相似たりと雖も、喜劇的方面を代表せる狂言は、永く能樂の附庸となり、文安田樂能記、糺河原勸進能記等に於て、早く已に能樂の間々に演ぜられたるを見る。唯その當時の言語を以て記して、全文悉く對話より成り、毫も地の文を挿まざるは、謠曲に比して一層純劇詩的性質を有せりといふべく、後世の脚本の根源をなせりといふべし。

狂言の作者及び製作の年代等の不明なるは、なほ謠曲の如し。千篇一律にして大抵同一模型の踏襲なること、一時の製作に非

千篇一律

多し

踏襲

擬

修羅

修羅

修羅

五能

能(美理人)

摹倣

五能 狂言

二五

ずして、時代を逐うて漸次に増加せしならむと想像し得べき事亦相同じ。而してその國民間に流布せる傳説を本にせるに於ても、亦兩者相似たり。但し謠曲は英雄高僧等の偉人傳説に基づけるもの多く、狂言は單純なる童話を資料とせること、その相違の點とす。即ち謠曲はザゲを根本とし、狂言はメルヘンを基礎とせる觀もあり。狂言已に能樂の附庸たるを甘んずるや、謠曲に擬して滑稽を仕組みたるものも尠からず、通圓の如き、老武者の如き、若市の如き、その適例といはんか。通圓は宇治の茶坊主なれば、賴政に似せて作りたるなり。老武者も若市も、修羅能に擬して作れるなり。皆一種のパロディなり。「このわたり」の愚僧なり」と、名告らせ、貝をも持たぬ山伏の、道々嘘を吹かうよ。」と、云ふ如き、謠曲の摹倣に非ざるはなし。舞容も科白も、謠曲に於ては尊嚴莊重の感を惹起すを主眼とし、狂言に於ては輕

快飄逸を目的とす。この對照ありて能樂の全美をなすなり。謠曲に通ぜざる特性は説教なり、教訓なり、佛陀神明に關し、歌道故實に關し、その一草一木の由來縁起をも敍べて、術學的に且説明的なり。狂言は寧ろ之を知らざるを以て滑稽とし、煩瑣なる歌學故實、一切の祕事、祕傳は皆嘲笑の材料に取られたり。この見方よりすれば、狂言は正しく一種の諷刺的文學の性質を帯びたりといふべし。滑稽と諷刺とはもとより甚だ相近きものなればなり。

(國文學歷代選)

野口米次郎

能樂堂こそ靈の堂宇である。こゝへは五官のみを盲信する人間は踏込む權利がない。「不完全」を禮讚する沈黙の信者が禮讚の力を注いで、神聖の特殊な藝術を祭る靈域である。

飄逸 狂言の特色
 故實 狂言の特色
 術學的
 煩瑣 (はつらん)
 諷刺 (ふうし)

六萩 大名

大名罷り出でたるは隠れもない大名。此の中御前に詰めてあれば、心が何とやら屈して御ざる。太郎冠者を喚出し、何方へぞ遊山に參らうと存ずる。在るかやい。冠者御前に。大名汝をよび出すは別儀ではない。何方へぞ遊山に行かうと思ふが、何とあらう。冠者は、内々は御意無うても申し上げうと存ずる所に、一段で御座りませう。大名好からうな。冠者は。大名何と、西山東山はいつもの事、様子の違つた所へ行きたいが、何處もとが好からうな。冠者誠に御意の通り、西山東山はいつもの事、御ざる。されば、何處もとが好う御座りませうぞ。は、思ひ付けて御座る。これよりも下京邊に、心やさがたな御方が御ざる。殊の外の庭好で御座る。これへの御遊山が好う御ざりませう。

六萩 大名

二七

大名の無知 諷刺
 隠れ 大名の無知
 此の中御前に詰めて
 太郎冠者を喚出し
 何方へぞ遊山に參らうと存ずる
 在るかやい
 冠者御前に
 大名汝をよび出すは別儀ではない
 何方へぞ遊山に行かうと思ふが
 何とあらう
 冠者は、内々は御意無うても申し上げうと存ずる所に
 一段で御座りませう
 大名何と、西山東山はいつもの事、様子の違つた所へ行きたいが、何處もとが好からうな
 冠者誠に御意の通り、西山東山はいつもの事、御ざる
 されば、何處もとが好う御座りませうぞ
 は、思ひ付けて御座る
 これよりも下京邊に、心やさがたな御方が御ざる
 殊の外の庭好で御座る
 これへの御遊山が好う御ざりませう

下京邊に、心やさがたな御方が御ざる
 殊の外の庭好で御座る
 これへの御遊山が好う御ざりませう

Handwritten notes in the top right margin of the right page.

大名おう、これが一段好かる。それへ向けて行かうぞ。冠者は、さりながらこれへ御座ればお歌をなされねばなりません。大名それは如何様な事を讀むぞ。冠者三十一文字の言の葉で御座る。大名あゝこりやなるまいに。



大萩大名狂言圖

冠者は、申し上げます。大名何とした。冠者某上京邊を通つて御ざれば、若い衆の見物に御座らうとあつて萩の花について、匂づくろひをなされたを聞いて参りまして御座る。御前に教へませう。大名やい、冠者。其の庭にも萩の花が有らうかな。冠者殊に亭主好きまするのが萩でござりまする。大名ふん、其の儀ならば急いで教へい。冠者畏つて御座る『七重八重九

Handwritten note at the top of the left page.

重とこそ思ひしにとへ咲出づる萩の花かな。』と申す事で御座る。大名ふん、してそればかりか。冠者はア。大名いや、是程の事ならば讀まう程に急いで來い。冠者畏つて御座る。大名來い。やい冠者。して今の歌のいひ出しは何であつたぞ。冠者忘れさつしやれて御座るか『七重八重』で御座りまする。大名おう、それぢや。して其の後は。冠者申し殿様これではなりますまい。大名おう、なるまいか。急いで戻れ。冠者申し殿様。大名なんぢや。冠者さりながら、物によそへたら覚えさつしやれませうか。大名よそへ物によつて、覚えうず。冠者即ち扇の骨によそへませう、『七重八重』と申す時に、七本、八本、廣げませう、『九重』と申す時に九本廣げませう、『とへ咲き』と申す時に、皆廣げませう。大名おゝ、これは好いよそへ物ぢやわい。して又其の後が有るぞよ。冠者はア、これは尙よそへ物が御座る。

大名それは何によそへるぞ。冠者即ち身共をば、脇脛ばかり伸び
をつてと、厚く折檻なされます。其の脛をば思ひだつしやれ
ませ。大名おうこれが一段ぢや。来い。冠者疾と御座り
ました。即ちこれで御座ります。それに待たしやれませ。
大名やい冠者。亭主に、大名ぢや程にこれへ迎ひに出よといへ。
冠者畏つて御座る。

冠者御亭内に御座るか。亭主いえ冠者殿。何として御座つた
ぞ。冠者その事で御座る。たのうだ人が此方の庭をき、及う
で、見物にて御座る程に、表へ迎ひにでさつしやれい。亭主心得
まして御座る。はつ、これは又見苦しい所へ、御腰掛けられうと
御座ります。忝うこそ御座ります。大名やい冠者、ありや
亭主か。冠者はア。大名御亭、無案内におぢやる。かう通しま
する。亭主はつ。大名やい、太郎冠者床几々々。冠者はつ。

折檻
脇脛
疾と御座り
来い
冠者疾と御座り
冠者畏つて御座る

たのうだ人

御亭内
御座るか
御亭無案内
おぢやる

大名やい亭主にこれへでられいといへ。冠者はつ。御亭これへ
でさつしやれい。亭主畏つて御座る。大名御亭々々。聞及う
だよりも、甚う庭が見事でおぢやる。亭主はつ、この中は手入も
致さぬによつて、甚うむさうに御座ります。大名否々、さうも
おぢやらぬいの。なう御亭。あの向うな松は女松でおぢやる
か、男松でおぢやるか。亭主いや、あれは男松で御座ります。
大名ふん、甚う見事でおぢやる。やい冠者。見事なな。冠者はつ。
大名あの左の方へすつと出た枝を見たか。冠者中々、見まして御
座る。大名鋸おくせい引切つてしんに立てうに。冠者は、
大名は、御亭不案内におぢやる。

亭主これ。冠者何でか御座るぞ。亭主いや、あの殿様にお
つしやれませうには『孰れもの御腰掛けられては、あの萩の花に
つけて短冊を掛けさつしやる。殿様にも遊ばしませい。』とお

御亭内
御座るか
御亭無案内
おぢやる
御亭これへ
でられいといへ
御亭々々
聞及う
手入も
致さぬによつて
甚うむさうに
御座ります
女松でおぢやる
男松で御座ります
見事なな
見まして御座る
御亭不案内におぢやる

つしやれい。冠者心得まして御座る、申しまする。大名何と
 した。冠者亭主申しまするのには『孰れもが短冊をなされま
 する程に、花につけてお歌をば詠まつしやれい。』と申しまする。
 大名亭主にこれへ出よといへ。冠者はつ。大名御亭、只今は歌を
 詠めとおつしやる。久しう詠まぬが、何とおぢやる。一つ詠ま
 うか。亭主遊ばしませう。大名かうもおぢやるか、『七重八重九
 重とこそ思ひしにとへさき出づる萩の花かな。』亭主あ、これ
 はいかうでけさつしやれて御座りまする。大名亭主、身は歌よ
 みで居りやるいの。亭主あ、いかうでけさつしやれて御座る。
 大名やい冠者。亭主がでけたてて、いかう喜ぶは。汝は何方へぞ
 行け。暇を出す程に、緩りといて、寛いで来い。冠者畏つて御座
 りまする。亭主只今短冊に書きまするも、一度吟じさつしやれ
 ませう。大名おう心得ておぢやる。『七重八重九重とこそ思ひ

やうも
あしや
り
か
も
あ
り
や
り
り
か
う
り
ま
ぬ
が
何
と
お
ぢ
や
る
か
一
つ
詠
ま
う
か
七
重
八
重
九
重
と
こ
そ
思
ひ
し
に
と
へ
さ
き
出
づ
る
萩
の
花
か
な
亭
主
あ
、
こ
れ
は
い
か
う
で
け
さ
つ
し
や
れ
て
御
座
り
ま
す
る
大
名
亭
主
身
は
歌
よ
み
で
居
り
や
る
いの
亭
主
あ
、
い
か
う
で
け
さ
つ
し
や
れ
て
御
座
る
大
名
や
い
冠
者
亭
主
が
で
け
た
て
て
い
か
う
喜
ぶ
は
汝
は
何
方
へ
ぞ
行
け
暇
を
出
す
程
に
緩
り
と
い
て
寛
い
で
来
い
冠
者
畏
つ
て
御
座
り
ま
す
る
亭
主
只
今
短
冊
に
書
き
ま
す
る
も
一
度
吟
じ
さ
つ
し
や
れ
ま
せ
う
大
名
お
う
心
得
て
お
ぢ
や
る
七
重
八
重
九
重
と
こ
そ
思
ひ

狂言記
五卷。作者不詳。室町時代に
行はれた狂言
五十種を集
めたもの。

しにとへ咲き出づる、出づる。』いや、冠者奴は、どこもとに居るで
 ぢやまでい。亭主申し殿様。御歌に冠者はいりますまい。急
 いで後を詠まつしやれませい。大名して、短うおぢやるか。
 亭主なか。字が足りませぬ。大名したらば、出づるを幾個も
 書いて置きやれ。亭主いや、それではなりません。大名はて、冠
 者奴が早う戻り居らいで。亭主申し殿様。急いで詠まつしや
 れませい。大名こゝな奴は、諸士に手を掛けをつて、憎い奴の。
 亭主ても、字が足りませぬ。大名あ、思ひつけたわ。亭主何と。
 大名ものと。亭主何と。大名太郎冠者が向臈に、某が鼻の先。
 亭主何でも無い事。とつとと言はしませ。

(狂言記)

元禄元年 徳川家康
 元禄二年 徳川家康
 元禄三年 徳川家康
 元禄四年 徳川家康
 元禄五年 徳川家康
 元禄六年 徳川家康
 元禄七年 徳川家康
 元禄八年 徳川家康
 元禄九年 徳川家康
 元禄十年 徳川家康
 元禄十一年 徳川家康
 元禄十二年 徳川家康
 元禄十三年 徳川家康
 元禄十四年 徳川家康
 元禄十五年 徳川家康
 元禄十六年 徳川家康
 元禄十七年 徳川家康
 元禄十八年 徳川家康
 元禄十九年 徳川家康
 元禄二十年 徳川家康

藤井紫影
 名は乙男、兵
 庫蘇の人、明
 治元年生、文
 學博士、京都
 帝國大學教授。
 元和偃武

七 元祿の三文豪

七 元祿の三文豪

藤井 紫影

三四

江戸時代に於ける文化の興隆を説く者先づ指を元祿に屈す。實にや、元和偃武よりこゝに七十年、世は兵革の響を忘れて、漸く泰平の光に浴し、草創蕪雜の機運は、正に轉回して整理修飾の時代となり、數十年間、人々の智奥に蟄伏鬱積したりし精神的需要は、種々の形態を取りて、今や、春風膏雨の時を得、争うて蓄を破り、千紫萬紅目もあやに咲きいでぬ。

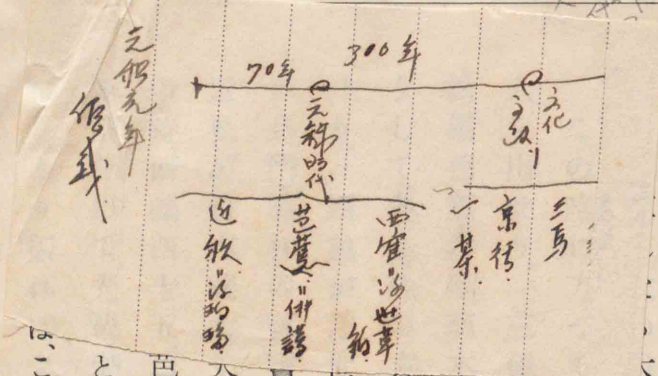
元祿は、文藝復興の時代にして、また、その發生の紀元たり。かくて、その新に起れるものは勿論、再び興りしものも、皆清新の風に富み生氣潑刺たり。元祿文藝の貴ぶべきは、即ちこの點にあり。時代の要求は、文學技藝に、この約束を奉ずべく、諸道の豪傑を指麾驅使したるものの如し。

元禄元年 芭蕉 西行 兼好

下河邊長流

大和の人、國學、貞享三年(三三〇)歿、年六十三。
 契沖阿闍梨 大阪圓珠庵の住僧、國學者、元祿十四年、六十二。
 戸田茂睡 江戸の人、歌人、寛永三年(二六六)歿、年七十八。
 伊藤仁齋父子 京都の人、共に儒者、仁齋は寛永二年(二七五)歿、年七十九。
 子東涯は元文元年(三三〇)歿、年六十七。
 荻生徂徠 江戸の儒者、享保十三年、(二六〇)歿、年六十三。

國學の下河邊長流、契沖阿闍梨、戸田茂睡、儒學の伊藤仁齋父子、荻生徂徠、繪畫の菱川師宣、英一蝶、尾形光琳など、孰れも皆この特



七 元祿の三文豪

家鉅匠ならざるなし。中流以下の社會を相手とする俗文壇に三偉人とは誰ぞや。浮世草紙の井原西鶴、俳諧の近松門左衛門是なり。この三人、時を同じに旗幟を翻し、名聲籍々として天下を風靡面に安んぜずして、古池の一句に正法眼を開き、芭蕉四十三、近松三十四、年齢事業兩つながらとすべきも、爾來、彼の筆を武家物、町人物に轉じ、この三人が、期せずして轉化の時期を同じくせ

三五

芭蕉 西行 兼好

草創

元禄元年 芭蕉 西行 兼好
 偃武
 元禄元年 芭蕉 西行 兼好
 偃武
 元禄元年 芭蕉 西行 兼好
 偃武

元禄元年 後川口彦人
元禄二年 藤井紫影
元禄三年 西鶴

藤井紫影
名は乙男、兵庫縣の人、明治元年生、文學博士、京都帝國大學教授。

文化
馬琴
三馬
一茶

元禄元年
西鶴
芭蕉
一茶

七 元禄の三文豪

七 元禄の三文豪

藤井 紫影

江戸時代に於ける文化の興隆を説く者先づ指を元禄に屈す。實にや、元和偃武よりこゝに七十年、世は兵革の響を忘れて、漸く泰平の光に浴し、草創蕪雜の機運は、正に轉回して整理修飾の時代となり、數十年間、人々の智奥に蟄伏鬱積したりし精神的需要は、種々の形態を取りて、今や、春風膏雨の時を得争うて蕾を破り、千紫萬紅目もあやに咲きいでぬ。

元禄は文藝復興の時代にして、また、その發生の紀元たり。かくて、その新に起れるものは勿論、再び興りしものも、皆、清新の風に富み生氣潑刺たり。元禄文藝の貴ぶべきは、即ちこの點にあり。時代の要求は、文學技藝に、この約束を奉ずべく、諸道の豪傑を指麾驅使したるもの如し。

下河邊長流

大和の人、國學者、貞享三年(三三〇)歿、年六十三。

契沖阿闍梨 大坂圓珠庵の住僧、國學者、元禄十四年(三六六)歿、年六十二。

戸田茂睡 江戸の人、歌人、寛永三年(三二六)歿、年七十八。

伊藤仁齋父子 京都の人、共に儒者、仁齋は寛永二年(三二五)歿、年七十九。

東涯は元文

國學の下河邊長流、契沖阿闍梨、戸田茂睡、儒學の伊藤仁齋父子、荻生徂徠、繪畫の菱川師宣、英一、蝶尾形光琳など、孰れも皆この特色を發揮したる大家、鉅匠ならざるなし。

この時に方つて、中流以下の社會を相手とする俗文壇に三偉人を出せり。三偉人とは誰ぞや。浮世草紙の井原西鶴、俳諧の松尾芭蕉、淨瑠璃本の近松門左衛門是なり。この三人、時を同じうして、各、特殊の方面に旗幟を翻し、名聲籍々として天下を風靡せり。西鶴が浮世草紙に得意の諸作を出しし貞享三年は、芭蕉が貞門談林の舊寶に安んぜずして、古池の一句に正法眼を開き、近松が竹本義太夫の爲に始めて出世景清を作りし時なり。この時、西鶴四十五、芭蕉四十三、近松三十四。年齢事業兩つながら

西鶴を以て先輩とすべきも、爾來、彼の筆を武家物、町人物に轉じたるより觀れば、この三人が、期せずして轉化の時期を同じくせ

録の三文豪

三五

草創 西鶴

三四

草創

西鶴

機運

智奥

鬱積

蕾を破り

千紫萬紅

春風膏雨

元禄

貞享

寛永

元文

天明

天保

文政

享和

弘化

貞和

安和

問答 蕉風俳諧の趣味は幽寂間適を旨とす。浮世の利慾に眼を光らし、俗界の歡樂に足を空なる京阪の町人いかでかこれに満足すべし。芭蕉が江戸を中心として、風化を四方に及ぼしたるも、その門徒は、多く士林桑門の騷客より成れり。されば彼をして、蕎麥と俳諧とは上方の風土に適せずと放言せしめたるも、亦故なきに非ず。談林風は、談諧を旨とし、新奇を競ひ、俗耳を喜ばしむること、遙に蕉風の上により。京阪は、西山宗因起りてより、久しくその根據地たりしも、流行時移りて、漸く世人の厭倦を招けり。西鶴談林の驍將を以て、浪華の重鎮たり。好んで人事を詠じ、小説的著想の佳句、往々誦すべきものあれども、西鶴の西鶴たる本領は浮世草紙にあり、近松も亦俳諧を西鶴に問ふと稱せらる。されど、その句殆ど傳はらず。この二人は固より芭蕉と俳諧を比すべきに非ず。唯、二人者の著作中、その趣味文法に於て、多少俳諧の影響あるを注目すべしと爲す。西鶴、宇治加賀掾のために『曆』の作あれど、淨瑠璃に於て、近松の敵に非ざるや言ふを俟たず。

菱川師宣 安房の人、淨世畫家、正徳四年(三三)歿、年七十七。
英一蝶 本姓多賀、大阪の人、畫家、享保九年(三六)歿、年七十。
尾形光琳 京都の人、畫家、漆工の名手、享保元年(二五)歿、年五十六。
竹本筑後少孫 攝津の人、義太夫節の元祖、正徳四年(三三)歿、年六十。
桑門 肥後の人、檀林派俳諧の祖、西山宗因、
騷客 西鶴、
驍將 宇治加賀掾、淨瑠璃節の名手、寛永八年(三七)歿、年七十七。

この三子者各、獨特の長技を揮うて、こゝに、絢爛たる元祿文藝の花は、東西の野に咲きみちぬ。芭蕉の清淡、西鶴の放縱、近松の溫雅、その人となりを異にするに隨うて、文もまた高雅・輕雋・秀潤の差あれども、俱に一代の粹たるを失はず。元祿の文壇國學に儒學に、豪傑の士乏しからざりしも、この三人微りせば、その落莫想ひ見るべきなり。

天和二年(三三)三歿、年七十八。
宇治加賀掾、淨瑠璃節の名手、寛永八年(三七)歿、年七十七。
輕雋、
秀潤、
高雅、
放縱、
溫雅、
淨瑠璃節の名手、寛永八年(三七)歿、年七十七。
天和二年(三三)三歿、年七十八。
宇治加賀掾、淨瑠璃節の名手、寛永八年(三七)歿、年七十七。
輕雋、
秀潤、
高雅、
放縱、
溫雅、
淨瑠璃節の名手、寛永八年(三七)歿、年七十七。

清貧は恒に樂しむ濁富は恒に愁ふと、光明皇后の御殿の屏風に書き置かせ給ひしとや。いづれ世の人心ほど種々なるものはなし。駿河の富士さへ煙は變り、雪となり、風となり、雨の時は眺め絶えて、折節五月間道中姿の合羽も物佗しく、袖の湊の故郷思ふ筑前の侍東武の勤務に下られしが、日數定まつての旅急ぎ、安部川の夜渡り、瀬に變り行く石道の難儀やう／＼宿にさし懸り、供廻にも言葉をかけ、聞いたか今の蜀魂昔おもふ草の庵に、灯火見ゆる所にて消えたる提灯を點せと、小家がちなる戸ざし、氣をつけて行くに、西側の人家に聲高なる所あり。火を一つと所望すれど、なか／＼聞入れずして、親子爭論うるさし。母の聲言分と聞えて、疊を叩き立て、今此様に錢銀持つて、人も大勢つかふ

八 孝と不孝の中に立つ武士

八 孝と不孝の中に立つ武士

井原 西鶴

井原西鶴

大坂の人、小説家、元禄六年(三十三)歿、年五十二。
光明皇后 御名光明子、聖武帝の皇后、天平寶字四年(二四三)崩、御年六十。
むかし思ふ草の庵のよるの雨に、涙な添へそ山ほと、さす。藤原俊成(新古今集)

清貧は恒に樂しむ濁富は恒に愁ふと、光明皇后の御殿の屏風に書き置かせ給ひしとや。いづれ世の人心ほど種々なるものはなし。駿河の富士さへ煙は變り、雪となり、風となり、雨の時は眺め絶えて、折節五月間道中姿の合羽も物佗しく、袖の湊の故郷思ふ筑前の侍東武の勤務に下られしが、日數定まつての旅急ぎ、安部川の夜渡り、瀬に變り行く石道の難儀やう／＼宿にさし懸り、供廻にも言葉をかけ、聞いたか今の蜀魂昔おもふ草の庵に、灯火見ゆる所にて消えたる提灯を點せと、小家がちなる戸ざし、氣をつけて行くに、西側の人家に聲高なる所あり。火を一つと所望すれど、なか／＼聞入れずして、親子爭論うるさし。母の聲言分と聞えて、疊を叩き立て、今此様に錢銀持つて、人も大勢つかふ

は誰が蔭と思ふぞ、御方のわせてから汝が志が變つて、朝茶さへ飲ませぬ不自由を見せける。これ御方、人には應報のあるものぞ。嫁の古いのが此様婆になるものぢや。千年も顔に皺のよらぬものではないぞの、今朝も眼が疎いと思うて、何處の國にかあらうぞ、蓑益足で踏みだして吞めとは、あまり酷い仕方なれども、あゝ、今日も知れぬ老年のことぢやと、思ひ流して堪忍したといふ。嫁は口噪がしく、此方も大方なる邪がよい。これ此の左の手にてさし出したといふ。扱は、あり様の手は、紫の革踏皮穿いて、緋縮緬の脚布召してゐるか。これはよい手が見ゆるわいの。この婆が眼が見えぬと想やるか。針のみ、ずなりとも通して見せむ。尻も結ばぬ絲を謂やるな。それは後へ抜け事といへば、息子は暴けなき聲して、先づあり様の無用なる長命、娑婆塞に一つも益の無い事なり。其の呼吸の通ふ首縊つて死なれ

八 孝と不孝の中に立つ武士

大坂の人、小説家、元禄六年(三十三)歿、年五十二。
光明皇后 御名光明子、聖武帝の皇后、天平寶字四年(二四三)崩、御年六十。
むかし思ふ草の庵のよるの雨に、涙な添へそ山ほと、さす。藤原俊成(新古今集)

雨夜の物語の雨夜の物語
 孝と不幸の中に立つ武士
 四〇

たが浮世の隙があくといふ。これを聞き棄てて行くに、其の並
 びにこれぞ雨夜の物語品々言葉の花を咲かし、酒くみかはず樂
 み、然も廢屋にて内も見え透きける。さし覗けば割松明して八



(載所纂類古好) 鶴西原井

にある人の玉の臺も、我が竹簀も樂み更にかはることなし。汝
 は子なれば恩を知る道理もあり。妻はもと他人なるに連添ふ
 よしみとて、我に孝を盡し、家貧しき渡世を構はず年月の經營、さ

りとは何の世に此の恩をおくるべき。夫婦手業の紙子の揉賃
 骨を僅少の事に碎く、切めては其の手を扶けんと思ふに、足起た
 ざれば是非なしと、涙泄る雨を争ふ。筑前の侍此のあらましを
 立聞きして、同じ所の人心、最前の不孝者と、これ格別の違ひある
 を感じ、提灯の火を借りて、主人は乗掛より下りて、其の宿に入つ

時雨
 孝子
 西原井

筆織西原井

て、われ久しく浪人せしうちに、世を渡る種とて、種々工夫仕出し
 て、式の如く紙細工を得たり。就中紙絹に絞を附くる事、さのみ
 力をも入れずして、物の見事なる縮緬になす秘密、矢の竹にまき
 掛くる仕出し、懇に傳へて通られける。是はと始めて色品變へ
 て見せけるに、此所の名物と成つて諸國に廣まり、次第に分限と

井原西鶴筆
 西鶴
 子の寢覺め時
 雨かな
 孝子
 西原井

隨筆ハナク

腰元ハナク

腰元ハナク

近松門左衛門

孝と不孝の中に立つ武士

なり、財實不足なく、一人の親を心の隨意にもてなし、彼の女房も昔の木綿京小袖に著替へて、數多の婢、腰元、其の身は乗物の窓より、世間の移り變れるを眺め、活計の種は盡きず、人のほめ草となりぬ。

(俗つれど)

藤村作

藝術の創作に於ける西鶴の態度を考へると、彼は可なり現實の經驗に富んで居た人と想像されたのであるが、然ういふ經驗を積んで來る間に、彼はその知的の冷靜な眼光を、其周邊に投げ、て細緻周密時に皮肉な觀察をした。さうして得た印象は強い記憶力に依つて永く隨時隨所に絲を繰出す様に出て來た。然うして彼の特殊な浮世草子の様式を創始したものであらう。

九 小山田太郎高家

近松門左衛門

近松門左衛門
杉森信盛、號
は兼林子、戯
曲作者、享保
九年(三六四)歿、
年七十二。
坊門清忠
藤原清忠。俊
輔の子、延元
三年(一九〇)卒。

卷末地圖参照

卷末地圖参照

近松門左衛門
杉森信盛、號
は兼林子、戯
曲作者、享保
九年(三六四)歿、
年七十二。
坊門清忠
藤原清忠。俊
輔の子、延元
三年(一九〇)卒。

坊門宰相清忠が内通故、湊川の合戦破れ、楠正成討死すといへども、總大將新田左中將義貞、西の宮に御陣を召され、士卒を懐け給ひければ、馳集つて御方の勢四萬餘騎とぞ聞えける。侍所長濱六郎左衛門、松明持たせ陣屋をめぐり、囚人四五人擲めさせ、義貞の御前にひつする。彼奴ばら今夜近邊の田島を荒し、御馬の飼料に残せし青麥を盗み刈取りしを擲め取つて候ふ。見せしめのため首切つて、獄門にかけ候はん。」と言上す。義貞聞し召し、「抑、今度の合戦は朝敵を亡ぼし、民安全になすべしとの勅諭なれば、賣買耕作に妨げず。田島の一粒をも刈取る者は急度刑罰すべきよし諸軍勢に相ふれ、所々に立てたる高札を背きしは、敵方のあふれ者か但し盜賊か。白状させよ。」と、御諭ある。

九 小山田太郎高家

四三

あつり婦一人
 御覽に付け
 御覽に付け
 御覽に付け

九 小山田太郎高家

遙かの後に年の頃二十餘りの女房盗み取つた青麥を背中に縛り付けられて恥かしげにぞ泣き居たる。義貞つくづく御覽じ、彼が體盗すべき者とも見えず。子細ぞ有らん。まつすぐに申すべし。」と有りければ、女ちつとも騒がず「はあ、子細と申して麥を盗みしより外の子細もなし。はや、法に行ひ給へ。」と恐れもなげにぞ答へける。義貞尙もいぶかしく「子細をいはずんば



近松門左衛門

往還にさらし、諸人に恥を知らすべきぞ。」との給へば、女はわつとばかりにて、暫し涙にくれるが、「あ、是非もなや。盗みをするも夫の恥包まんと思ふ爲なるに、諸人に面をさらさんこと、恥

相傳
 近松門左衛門
 自筆

平家女護島草
 の大數かなひ
 畢從三位右近
 衛の中將平の
 重衡是なうつ
 とそ披露ある
 心地よげに入
 道相國手から
 源氏屑入レの
 文覺坊(なら
 かくれすむ由
 ちの給へば
 重衡しさつて
 弓袋より白骨
 一ツ取出し是
 は古左馬の頭
 義朝が體が
 文覺東大寺

九 小山田太郎高家

を招くか情なや。然らば包まず申すべし。わらはが夫は足利尊氏相傳の侍士なるが、聊の事有つて主親の勘當受け、此の國の土民となり、忍びて暮すうき身にも、此の度の合戦、これ屈竟の時節到來、おゆるしなくとも、戰場に馳加はり、分捕り功名を顯し、主の不興、父ごの勘當ゆるされんと、思ひ定めし我が夫の心はやたけにはやれども、鎧一領あるにこそ。手綱ゆりかけのつたりとも、一町もとばぬ野飼の瘦馬、住むもわびしき藁屋の窓より、鯨波の聲矢さけびの音、かすかに聞ゆるその時は、齒ざしみしての無念がり、傍で見るさへ胸せかれ己やれ二世とかはした大事の男、此の儘

近松門左衛門
 平家女護島草
 文覺坊の筆
 手綱ゆりかけのつたりとも、一町もとばぬ野飼の瘦馬、住むもわびしき藁屋の窓より、鯨波の聲矢さけびの音、かすかに聞ゆるその時は、齒ざしみしての無念がり、傍で見るさへ胸せかれ己やれ二世とかはした大事の男、此の儘

近松門左衛門筆

果させし
あふさび
しそり
物
風情
つ
あ

にては果させじと、さまざまに思案し、麥を盗んで兵糧の、びんよ
くば陣所に忍び、寝入つたる軍兵原が太刀物の具、思ふまゝに盗
み取り、我が夫に打著せ、みづからも刀脇ばさみ、夫婦諸共軍して、
名を後代に上ぐべしと思ひしこともいたづらにかゝる繩目に
あふことも、夫の武運の拙き故、子細と云ふも此のあらまし、とて
もながらへ果てぬ身ぞ。憂き物思ひせんより、はや／＼殺して
給はれ。なう御慈悲なるは人々」と、聲も惜しまず、歎きしは、目
を當てられぬ風情なり。

義貞もや、落涙有り、「お、あつばれ武士の妻にて有りけるよ。
命がけの盗みして、夫の武勇を勵ます心、感じて、猶餘り有り。
罪をゆるし、義貞が著捨の鎧、太刀をもそへて取らすべし。それ
それ」との給へば、御召替の錦の直垂、金作の一こし、女が膝にぞ
置かれける。「さあ、歸つて物の具きせ、明日の合戦には、義貞

ま
お
つ
あ
お
あ
あ
あ

義貞

が陣に向つて打つてか、れ。敵ながらも見物せん。はやとく
とく」との給ひて、いましめの繩を解かせらる。女はあつと頭
をさげ、情有る御大將、有りがたや御恩の程、何と報じ奉らん。さ
りながら、我が夫はまさしく尊氏公の御家人、すは合戦に及ばん
とき、今賜はりたる鎧を著し、太刀持つて義貞公に向はるべきか。
用捨てしては尊氏への不忠、一矢仕らば恩を知らぬ弓取と、末代迄
の笑ひ草、御恩は却つてあだとなる。只御慈悲にはみづからを
盗み一べんの科に落とし、はや／＼殺して給はれ」と、首さしのべ
て泣き居たる、心の中こそすゞしけれ。義貞尙も感じ給ひ、お、
其の心を察してこそ、わざと最前より夫が假名、實名をも尋ねず、
互に知れず知らぬ相手、名乗つて勝負を遂ぐる時、いづれに用捨
の有るべきぞ。さ程のことを汝等に教へらる、義貞ならず。
いらざる詮義に時遷れり。はや／＼歸れ」と、太刀鎧、手づから

きりぎりす
きりぎりす

千鳥
千鳥
千鳥
千鳥

西の宮
攝津國西宮市。

生田の森
今神戸市の東部
生田神社の南。

求塚
三ヶ所ある。
一は東明、一は住吉村御田、一は味泥にあか、各十数間を距ててゐる。

取つてたびければ、おし戴きわきばさみ、お情はこれ迄、明日の合戦には、夫婦諸共心をあはせ、恐れながら御運によつて御首を賜はることも候ふべし。おゆるしあれ御免あれ。」と、御前を罷り立つか弓、ひきはかへさじ武士の、妹背の義理ぞ頼もしき。
既に其の夜も明け行けば、勝に乗つたる尊氏の軍勢、雲霞のごとく、湊川より打つてかゝる。義貞も西の宮より取つてかへし、生田の森を後にあて、入り亂れ攻戦ふ。太刀のつば音とききの聲、いかなる修羅のたうじやうも、これには過ぎじとおびたゞし。
小山田太郎高家は心ばかりは春の花、身は埋木の力なき野飼の馬の繩手綱、ちぎれ具足もあらばこそ。あまつさへ女房の夕べに出でて歸らぬは、心もとなき氣遣ひさ。足にまかせてこゝかしこ、所在を尋ね求塚、小松原より振返れば、こはいかに遙か向うの山々に、中黒の旗二つ引兩、巴の旗も輪違ひに、東へなびき西へ

お塚
お塚

千鳥
千鳥
千鳥
千鳥

なびき、磯山風に翻して、馬煙矢さけば、天に響き地に満ちて、新田足利の國争ひ、今を限りと見えたりける。「あゝ、うらやましき殿原が合戦や。せめて古具足の一領もあれかし。取つて投げかけ、何百萬騎が中なりとも、只一揉に駈破り、兩陣の目を驚かさん物を。何をいうても浪人の、紙子頭巾に鋤一丁思ふに甲斐のあらばこそ。貧は諸道の妨と、世のことわざも我が身の上、ふゝ無念くち惜しや。」と、こぶしを握り牙を噛み、男泣にぞ泣居たる。
かゝる所へ女房は、危き命をまぬがれ、ふつてわいたる太刀鐙、夫に著せて悦ばせんと足早に歸りしが、「やあこちの人爰にか。此のなりは何ぞいの。さぞ待兼ねてで有らうと思ひ、いきせきして戻つた。これわしぢや、女房ぢやが、なぜに物いはんせぬ。氣合が悪いか高家殿。」と、抱き起せば涙を押へ、「おゝ、氣合もどうでようはない。やれ女房、あの向うの山々に、入り違ふ小旗を見

矢留り金物
鎧の胸板の上の金具。
押著板
鎧の後の肩にあたる所。
發傳
弓手の草摺の異名、但し近世の稱。
高紐
鎧の胸の釣紐、肩にある。
卷付
鎧の後游板に在る。
鳥首
太刀の柄頭の金具を鳥の頭に造つたもの。
兵庫ぐさり
太刀の足金の緒を鎖にした物。

よ。今ぞ合戦の眞最中、あの軍中には主君尊氏公、父前司殿もおはすらん。正しき主君、老いたる父が天下分目の晴軍と、命ををしまず戦ふを、子の身として安閑と見物して日を送る、これが無念に有るまいか。」といはせも果てず、「これ〜泣事はもういらぬ。これ見さんせ。」と、太刀鎧投出せば、高家横手をちやうと打ち、鎧引きよせつく〜見て、矢留り金物押著板、發傳、高紐、上卷付、太刀は鳥首、兵庫ぐさり、む、これは大將の拂物、大抵では賣るまじきが、但し損料でばしかつたか。」といへば、女房くつ〜と吹出し、「あ、つがもない。日がな一日たま綿くつて、錢廿取るや取らぬもの、八百年の手間賃でも中々買はる、物かいの。馬の草もなき故に、夕べ義貞の領内の青麥盗み刈りたるを、番の者に搦められ、殺さる、咎なるを、さすが義貞は憐を知つた大將、夫の身の上聞届け、命を助け、其の上に此の太刀具足、さあ早う出立

わたがみ
鎧の肩にあたる所。
義貞
義貞、禮、知、信
よし、こゝろ、新、存、心、

つて、手柄してござんせ。」と、わたがみ取つてきせんとす。高家つきののけ、む、誠に義貞は五常を守る名將、物の憐を知ること、敵味方の隔なき人と聞く。義貞に貰うた鎧を著し、直に義貞に打つてかゝらんこと、心よからぬ軍なれば、思ひ切つたる功名も成るべからず。え、よしない情を受けたり。」と、くやみ顔にぞ見えにける。え、こなたとも覺えぬ。義貞程の大將が、さもしい返報受けようとして、何の情をかけられう。それ故、こなたの名も問はず、用捨なくわれを打て、詞に念を入れ給ふ。義貞の目の前、此の具足著て働き、あは能くば義貞をしてやらうと思ふ氣はないか。え、おくれた人や。」と、せきければ、む、分別した合點有り。一度著して見せずんば、其方をかたりなど、さみせられんは男の恥、さあ小山田太郎高家が出陣。」と、鎧取つてなげかけ、上帶高ひも小をどりして、引きしめ〜太刀わきばさみ、立ちあ

後夜
しほあき

がれば「お、あつばれ、武者振よい男、わしも馬に草かうて追付け
そこへ。」と立歸れば、これ討死は軍の習、いきて歸れば仕合、先づ
今生の暇乞ひ、必ず泣くな。「これ武士の妻に成るからは、そこは
合點、死出の山路の一二のかけ、おくればせまい。」と、わかれしは、
はや修羅道の先陣と、後にぞ思ひしられける。

傾く日陰西の宮、大手の合戦入り亂れ、人馬四方に馳せちがひ、
喚きさけぶ其の聲は、山を崩すが如くにて、官軍既に戦ひ破れ、堪
へつべうは見えざりけり。大將義貞只一騎、返し合せ、十六
度迄驅散らし、御身をきつと見給へば、數か所の矢疵、馬鞍に立ち
し矢は、枯野の薄に異ならず、え、軍の勝負今日に限るべからず
と、追ひくる敵をきり拂ひ、求塚の小松原に心靜にうち給ふ。
高家それぞと見るより大音上げ、大將軍と見奉る。正なう後を
見せ給ふ。引返して勝負あれ。」と、追つかくれば振返り、日本一

堪へつべうは

堪へつべうは

堪へつべうは

堪へつべうは

堪へつべうは

堪へつべうは

堪へつべうは

堪へつべうは

堪へつべうは

堪へつべうは

堪へつべうは

堪へつべうは

堪へつべうは

堪へつべうは

堪へつべうは

堪へつべうは

堪へつべうは

の義貞に聲をかくるは、こざかしと、鎧にかけてはつたと蹴散ら
した、よふ所をひらりと飛下り、片手をのべ一突つけば、木枯に
かゞせのたふる、如くにて、横なげにどうとふす。義貞すかさ
ず弦走にのつか、り、首をか、んとし給ひしが、鎧出立ちつくづ
く御覽じ、「む、う天晴、おのれはしれ者哉、義貞にやすくと組み
しかれん力とは覺えず。何として組みしかぬ。定めて子細あ
るべし。さりながら汝が主の尊氏を組伏せたらんはしらず、汝
ごときの侍士を五十首、百首取つても、さのみ義貞が手柄本望と
も思はず、さあ子細を語つて名のれ名のれ。」との給へば、「こは御
錠とも覺えず、いかに大將なればとて、わざと敵に組みしかる、
者や候ふべき。足利尊氏の家の子、小山田前司高春が一子、小山
田太郎高家、不足の敵と思しめさば、只首打ちすてさせたまへ。」
と、兩手をゆるめて働かず。「いや、此の物の具は夜前女に與

しほらうの珠勝

天下はくわいふる
天下を治るる者
義貞の命
とてぬりてさるる
いかに
せよかし
何れか
力せよ
所を
義貞の命

九 小山田太郎高家

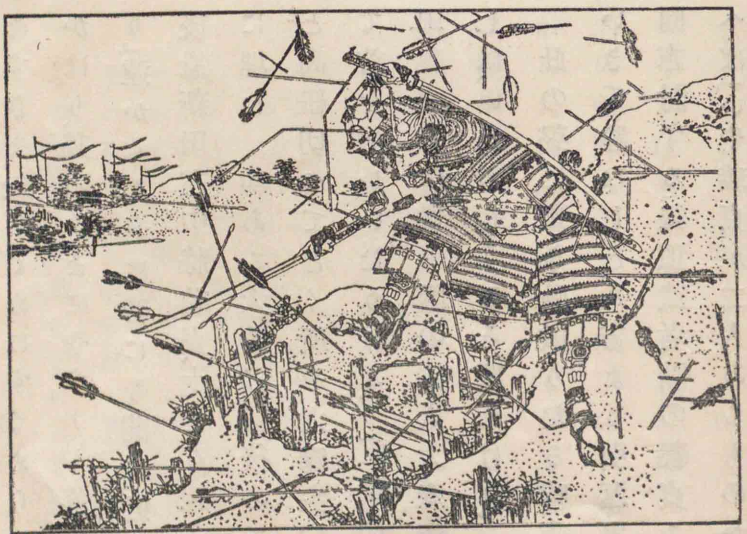
へし義貞が著捨の鎧扱はその夫よな。恩を報ぜん志しほらし
さやさしさを。さりながら天下にくらぶる義貞が命、僅の鎧一
領にて助からんとてはとらせぬぞ。主親の勘當につき望有る
者とさく、目を驚かす功名して本望を達せよ。只今にても跳返
し、義貞と今一勝負致せよかし。」との給へども、小山田は涙にく
れ、重々の御情、冥加の程も恐しく、申上る詞もなし。いふに甲斐
なき此の高家がかせくび、義貞公の御手にかゝり申すこと、いか
なる先陣さきがけにも勝つて、身に過ぎたる譽、勸氣の父が聞く
ならば、さぞ悦び申すべし。此の上は御芳志にはや首打つて捨
てさせ給へ。」と申し切つたる兩眼に涙を流すぞ道理なる。「え
え、義理ばつたるをのこや。」と、取つて引つ立て塵打拂ひ、義貞に
助けられしと人に語るな。われも人には語らぬぞ。」と、手負せ
し馬を引立てて靜に打つて過ぎ給ふ。武將の氣質備つて、古今

五四

今昔の物語
七十一の巻

葛飾北齋

通稱中島秀一、
江戸の人徳川
末期の畫家、
嘉永二年(一五五
〇)歿、年九十。



(筆齋北飾葛) るす死討てり上駈に塚求家高郎太田山小

に語るもことわりなり。
小山田は呆然と、義貞の
仁心こゝろにしみて立つ
たる所に、大森彦七盛長、手
の者五十騎ばかり、どつと
驅寄せ、大音上げ、赤地の錦
の直垂、中黒の鎧は敵の大
將義貞、遠目にも見ちがへ
ず、射取れや〜と矢先を
揃へ、よこぎる雨と射かく
る矢先、さしつたりと、小太
刀をぬいて、はらり〜と
切落す、されども鎧のすき

九 小山田太郎高家

五五

ますきま、矢づくめにすくめられ、今はこれまで、われ義貞の命にかはり、其のひまにやすく、落し情の恩を報せんと、求塚に驅上り、遠からん者は音にも聞け、近き者は目にも見よ。清和天皇の後胤新田左中將義貞、十ぜん天子に頼まれ、屍を戦場の土に埋む。功ある大將の最後のてい、よつく見おいて手本にせよ。と、高紐切つてとく所を、大森主從おり重り、きりふせく、おさへて首をぞかいたりける。直垂切つておし包み、官軍の總大將、新田義貞を伊豫の國の住人大森彦七盛長討取つたり。」と、名乗りしは、いかめしうこそ聞えけれ。

此の聲に驚き馳散りたる味方の勢、大將を打たせては一人もいきて詮なしと、八方より引返す。義貞も取つて返し、やあゝ同志討する狼狽武者、誠の義貞これにあり。」と、切つてかゝり給へば、「いや、義貞が二人あるものか、新銀、古銀同じ通用、これで堪忍

子善
十中
天の皇子
佐藤、邦、望、を、お、語
悪口、跡、を、初、名
會、故、特、重、持
殺、生、備、美
十、思、不
り、あ、め、し、う、こ、そ、聞、え、け、れ
あ、か、め、し、う、こ、そ、聞、え、け、れ
依、入、り、ゆ、り、ゆ、り
あ、か、め、し、う、こ、そ、聞、え、け、れ
知、録、の、ゆ、り、ゆ、り
ま、と、入、り、ゆ、り、ゆ、り

仕る。」と、一散に逃げて行く。味方の大勢追驅くるを、大將おさへて「しばらくかくかれは聞ゆる、倭人、愚痴、愚蒙の狼狽者かゝる者の敵陣にあるは、味方の利運ぞ。」と、諸卒を示す謀、智謀は居ながら天に入り、波をもくぐる尼が崎、山崎過ぎて名將の譽は雲井の桂川、うち越えく、渡りこえ世に立ちこえてならびなき、我が立つ杣や都のふじ、西坂本にぞ入りたまふ。

尼が崎
攝津國尼ヶ崎
市
山城國乙訓郡
山崎
桂川
上流を大井川
といふ。京都
市の西を流れ
て淀川に入る。
西坂本
比叡山の西麓、
修學院村附近
をいふ。

藤村作

近松に依つて大成された新淨瑠璃時代物の内容は、殆ど彼以來固定した有様であるが、その中心たるものは武士道精神に他ならぬ。時代の選み方は王朝時代であらうと、武家時代であらうと、また場所が我國であらうと、外國であらうと、説話の根幹となつてゐる精神は常に近世武士道精神である。

が面白いといふことになる。して見れば、それ等の人々が各自自分の主張をいひ張つてゐても、それは何のとりとめもないものになつて終ふのである。が、それを過去の時代に溯つて、その時々々の文化の變遷を見、藝術の變化を見、而して更に現代の渾沌たる社會に對し、又藝術界に就いて考へて見ると、その間に或る一筋の光明を見ることが出来る。美術に現れたる日本國民性の如何なるものであるかといふことも、大凡は考察することが出来る。故に、吾人は我が日本の古い時代からの變遷に就いて一瞥して見ようと思ふのである。

さて日本は誰しも美術國だといふことを口にし、實際さう思つてゐるやうであるが、實は我が國に固有の藝術として、我が日本民族が誇り得るものは一つも持たなかつたのである。我が

渾沌
混沌

大陸文明

影響

著海

國は常に大陸の影響を受けてゐる。寧ろ大陸文明のお蔭で日本は開けて行き、藝術も亦隆興の氣運に這入つたのである。我が國に藝術が開けてから此の方千三百餘年の長日月、その間幾多の變遷があり、幾多の名家を出し、少からざる優秀なる藝術品を持つてゐるが、それらのものは、實は一つとして我が日本人の獨創ではなく、孰れも大陸文明の影響により、それを我が國の趣味・風俗に適するやうに全部を改めてゐる。換言すれば彼から受けた文化を更に日本化したものであり、この外國文化が消化されて始めて我が國の特色は發揮されたのである。

さて、我が國の最古の藝術品として考ふべきものは、推古朝の藝術である。これは韓半島を經由して、所謂六朝式を入れたのであるが、これはいふまでもなく、聖徳太子の偉大なるお力によ

○ 美術に現れたる日本國民性

推古朝、推古天皇、韓半島、新羅、六朝式、南化時代、支那、印度

Handwritten notes in the left margin, including the characters '支那' and '印度'.

此寺の大陸文明の吸收は明治維新の西洋文明の如く、その形を無条件に受け取つたものではない。其の形を無条件に受け取つたものではない。其の形を無条件に受け取つたものではない。

一〇 美術に現れたる日本國民性

六二

法隆寺 大和國生駒郡法隆寺村に在る。推古天皇十五年聖德太子の創建で法相宗、本邦最古の寺院である。



が、その當時を偲ぶものは建築に於ても、彫刻に於ても驚くべき

るので、その當時出來得る限り大陸の文明を吸収して、我が國文化に盡されたといふことは、我が國の今日ある基を開かれたといふべきである。この時に於ける我が國文明の變化は、明治維新の時に歐米文明の影響を享けて變化したのとは違つて、全然大陸文明化したものである。今日その當時の遺物として考ふべきものは、大和の法隆寺及びその寶物で當時の盛觀が偲ばれるのである。

發達をしてゐたことを認めるであらう。これ等は唐朝の文明で、支那から直接日本に這入つたもので、益、我が國の基礎は確立されたのである。従つて文明は總て支那かぶれて、その服裝から總ての建築調度類から、日常生活の様子迄ことごとく支那的である。是に於て支那思想が充分我が國を支配したのである。然しこれは、その當時に於ける宮廷の一部のことであつて、我が國民全體が斯様の立派な文明を持つたのではなく、都會を一步離るれば、無智蒙昧の國民であつたのである。が、この一部の者の文化が後代の發達の根柢をなして居る。次の平安期には遂に日本國民の自覺により、始めて我が國特有の文化を生じたのは、實に我が國文化の尊き所以で、大陸文明の精神を消化し得たのである。

一〇 美術に現れたる日本國民性

六三

日記物 書 藤原時代に成りたる
お説物

一〇 美術に現れたる日本國民性

縉紳 身なり

定朝 康尙の子、佛彫刻の名匠、大佛師の初祖、一條より後一條天皇頃の人。
運慶 康慶の子、有名なる佛師、鎌倉佛師の祖、後鳥羽より順徳帝頃の人。
湛慶 運慶の子、佛師、又佛畫を善くした、後堀河天皇の頃の人。

藤原時代に至つて、日本特有の文學が起り、藝術に於ても、舊來我が國に見ることの出来なかつたものが起つたが、更に鎌倉時代にこれを完成した。してみると、我が日本文化の基礎は推古奈良にあるとしても、それを純日本化して、我が國獨特の精華を發揮したのは、平安及び鎌倉時代である。即ち平安時代は、宮廷及び縉紳達の文化であつたが、鎌倉時代にはもつと擴まつて普遍的の性質を帯び、そして國民的藝術の發達を遂げてゐる。彫刻について云へば、天平時代はその粹を極め、能を盡してゐるが、これ實に唐朝彫刻の模倣である。然るに平安朝の終に定朝出で、鎌倉時代には運慶湛慶が出て、寫實的な作風を以て純日本の彫刻が出現したのである。又これを繪畫の方で考ふれば、早く佛畫の一體が、可なり精妙な域に達してゐたけれど、平安朝時代に國文學の獨立を見るやうになり、純鑑賞的な宗教的ならざ



如拙

もと明人、畫僧、洋畫派の妙手、正平、建徳頃の人

周文

近江の人、如拙の門人、應永頃の畫僧

雪舟

本氏は小田等揚、備中の人、畫僧、永正三年三六、寂年八十七

狩野氏

狩野正信が創めた繪畫の一派

雲谷

雲谷等顔、肥前の人、雲谷派の祖、正平年中の畫家

曾我

曾我蛇足、越前朝倉氏の臣、畫の妙手、曾我の一手を創む、文明十五年(三四)歿

縁起

中後

るものが發達して、我が國特種な繪畫が現れてゐる。しかしてこの流は、平安の末から鎌倉に至つて益々榮え、遂に大和繪を大成するに至つたのである。その描くところは、神社佛寺等の縁起、或は高僧の繪傳等が少くないが、それ等の繪は、當時の實社會を率直に現してゐて、その題材はことごとく我が國のことであり、我が國の風俗人情を描き現して、純粹の日本畫の大成を遂げたのである。

然るに、その後鎌倉の末から足利にかけて、藝術界に特殊な一派を生じて來た。即ち當時の新派で、支那から這入つて來た宋元墨畫の一體で、禪宗趣味と關聯して我が國藝術に一新様を劃したのである。この派には如拙・周文・雪舟等の大家が出て、その根本をつくり、狩野氏が榮え、雲谷・曾我の力によつて舊來の大和

水墨減筆、水や墨の粗末な描き方

一〇 美術に現れたる日本國民性

六六

繪をうち壞して終つた。東山時代はこの流派の尤も盛な時で、水墨減筆の一體が旺盛を極めてゐた。而して、これ亦當時の貴族一部の趣味から出たものであつて、大和繪が日本藝術の源流

育王山

雲舟が五十三歳の時、明の育王山（寧波から東四十四清里の所にある宋代五山の一）の風景を畫いたのが此水墨である。



育王山 (筆舟雪)

をなした如くに大 きなものではなかつた。然るに世は戰國時代となり、舊來の貴族が下々の者から亡され、所謂

下剋上で、此處に日本の社會に大變革を生じた。即ち、尾張の國の百姓が關白太政大臣となつて、人臣の榮位を極めることになつたのである。かやうな時代では、英雄豪傑は徒手空拳を以て一國一城の主となつたので、これ等の人は天真爛漫の趣味を發

下剋上
育王山
雲舟が五十三歳の時、明の育王山（寧波から東四十四清里の所にある宋代五山の一）の風景を畫いたのが此水墨である。

極彩色を濃くも

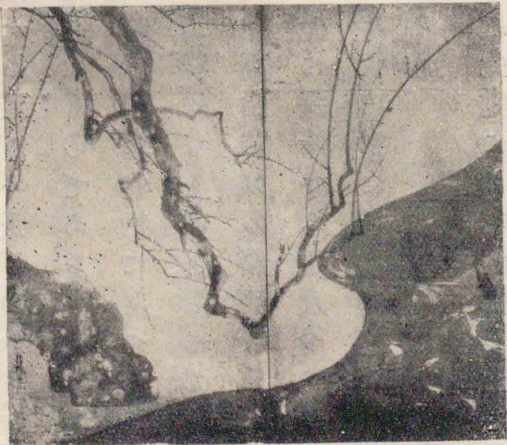
奥りつゝの作中

光琳筆

これは水邊梅樹の圖、縦五尺八寸横六尺三寸五分の二枚折で、紅白二色の梅樹に流水を現したもので、その色彩と云ひ、構圖と云ひ、正に光琳の代表作である。

揮して、舊來の如き禪味を帯びた藝術では満足すべきでない。而もそれ等の人々には學問がなく、支那趣味を解さないから、俗眼を奪ふやうな華麗を極めたものでなければならぬ。此處に於てか、極彩色の花鳥動物などが描かれ、又當時の社會状態を描いた新しい風俗が起つたのである。

されば桃山時代から江戸時代の初期は即ち日本の文藝復興の時期で、その後は更に日本趣味の發達した時代である。徳川三百年の間は、僅に長崎の一角から外を見てゐたに過ぎないので、内地は益々日本趣味に榮えた。而



光琳筆

一〇 美術に現れたる日本國民性

六七

して色々の流派が生じ、藝術の燦爛たる花の時期となり、我が日本藝術の盛な時代を現出したのである。

光悦に始まり、宗達、光琳を経て抱一に至る一派の如きは、その範を大和繪にとり、更にこれを醇化したものである。又近世風俗畫の一體の如きは、矢張範を鎌倉時代の繪卷物にとつて起つたもので、更にそれが江戸趣味といふ特殊なものとなつて、浮世繪版畫に繁盛したのである。その他圓山四條の諸派も、徳川時代に於ける特殊な産物であつた。僅に長崎から這入つて來た西洋畫、南宗畫の一體もあるが、徳川時代は實に日本藝術の燦爛華麗の花の開いた時である。

明治となり、西洋藝術の影響を受け、此處に日本藝術の上に一 大變革を來したが、日本藝術は過去數百年の歴史を持つてゐるので、一時は外來のものに傾いたが、また遂に日本的の趣味にか

光悦

本阿彌光悦、
畫家・刀劍鑑
定家・書を善
くし陶器製作

光琳

尾形光琳、京
都の人、畫家、
漆工の名手、
光琳派の祖、
享保元年(一七二
六)歿、年五十
六。

宗達

俵屋宗達、能
登の人、畫家、
寛永年中の人、
八十一。

抱一

酒井抱一、姫
路の人、畫家、
文政十一年(一
二二八)歿、年
六十八。

圓山派

畫家應舉から
出た寫生を主

とした畫風。

四條派

寛政の頃、應
舉の門人松村
月濠(吳春)が
創めた繪畫の
一派。

へり、更に歐米の特長をとつて、これを加味したものが出來た。現代は各個人の考に依つて思ひ々の藝術をなしてゐる。舊來の日本畫も新來の油繪も共に榮えてゐるが、然し、この油繪の一體も日本に於て描かれる以上は、日本の特色を發揮すべきで、外國のものとは違はねばならぬ。實に現代に於て、既に油繪が日本的趣味に傾いたものが少くない。また日本畫も舊來のものとは違つて面目を一新した。之を要するに、國民性はその國民の住する國土に深く根ざして居るのであつて、總ての美術、總ての文化は、皆その國土と特殊な關係を結んで居る。美術殊に繪畫は、自然の模倣を離れ難いので、益、其の國土と密接な關係を持つのである。これまでの傾向をみると、何時でも外來のものが加はつて、こゝに新しい生命を加へられたが、現代のやうに外來の刺戟の多い時には、何れを

何うと定めることは頗るむつかしいが、やがてこの刺戟から新しいものが生れるのである。さうしてこれが、また國民性を代表することになるのである。

されば國民性の如何なるものを簡単に説明することは、容易でないとしても、美術にあらはれた本流、例へば大きな畫派の變遷の上には、よく國民性の移り變りを窺ふことが出来る。即ち美術の上に形として表されて居るから、國民性についての考察に多大の便利を與ふることとなるのである。

(日本國民性の研究)

一一 暮 鐘

土 井 晚 翠

森のねぐらに夕鳥を
静けき墓に亡骸を
送りてひゞく暮の鐘

麓の里に旅人を
夢路の暗に天地を

春千山の花ふゞき
誘うて世々の夕まぐれ

秋落葉の雨のおと
劫風ともに鳴止まず

天の反響地のさけび
過ぐるを傷む悲みか
無常をさとす戒めか

恨の聲か慰めか
來るを招く喜びか
望をつぐる法音か

友高樓のおぼしまに
露荒涼の城跡に
聖者静けき窓の戸に
大空高く聲揚げて
人住む處行く處
歌と樂とのある處
わらひ喜び樂みと
都大路の花のかげ
白波寄する荒磯邊
無聲の塚の床かにしも
雲飄揚の身はひとり

別の袂重き時
懐古の思ひしげき時
無象の空を思ふ時
今はとさけぶ暮の鐘
嘆きと死とのある處
涙かなしみ憂き惱み
互に移り行くところ
白雲ふかき鄙のさと
無心の稚兒の耳にしも
ひとしくひゞく暮の鐘
五城樓下の春遠く

都の空にさすらへつ
我も夕の鐘を聞く
鐘のひゞきに夕がらす
彼方の森にゐるがごと
そゞろに起る我が思ひ
しづまりかへる大空の
雲より雲にとよみ行く
浮世の耳に絶ゆれども
下界の夢のうはごとを
高き尊き靈ありと

思ひ忍ぶが岡の上
入日なごりの影薄き
群り立ちて淀みなく
波を再び揺がして
餘韻かすかに程遠く
知るや無象の天のそと
名残の鐘に聞取らん

天使の群をかきわけて
鐘よひかりの門の戸に
下界の暗は厚うして
浮世の花は脆うして

長く幽けくまた遠く
呼ぶか閻浮の魂の聲
われも浮世の嵐吹く
入江の春は遠くして

恨みなはてそ世の運命さだめ
無限の過去を前に見て
はた今こゝに望みあり

昇りも行くか無限の座
何をかなれの叫ぶらん
聖者の憂へ絶えずとか
詩人の涙涸れずとか

今はた續く一ひゞき
かの永劫の深みより
波間に浮きし一葉舟
舟は半ばに沈みぬと

無限の未來後にひき
われ今こゝに惑ひあり
笑ひ樂み憂きなやみ

暗と光と織りなして
いざ響かせん暮の鐘
かくて思ひをかはしつゝ
泉と海とつなぐごと

吹くや東の夕あらし
かの中空に集りて
ふたつ再び別る時

人生理想はた秘密
我が笑ひしも幾度か
望の星の消ゆるごと
罪か濁世か我知らず

歌ふ浮世のひとふしも
さきだつ魂に來ん魂に
ながれひとすぢ大川の

寄するや西の雲のなみ
暫しはともに言もなし
秘密とかれは叫ぶらん

詩人の夢よ迷よと
眞晝の光かゞやきて
浮世の塵に塗れては

その塵深き人の世の
無限永劫神の世を
源流既に遠くして
無言の教宣りつゝも

祇園精舎の檐朽ちて
セントソヒヤの塔荒れて
聞けやゆふべの鐘のうち
高き尊き法の聲

天地有情の夕まぐれ
鳳樓いつか迹もなく
現は脆き春の世や

夕暮ごとに聲揚げて
警め告ぐる鐘のおと
濁波を揚ぐる末の世に
有情の涙さそへるか

葦酒の香のみ高くとも
福音俗に媚ぶるとも
靈鷲橄欖いにしへの

我が驂鸞の夢覺めて
花もにほひも夕月も
尾の上に霞立ちきりて

縫へる仙女の綾衣
自然の胸をゆるがして
その一音はこゝにあり
天の莊嚴地の美麗
自然のたくみ替らねど
理想の夢の消ゆる間は
地籟天籟身に兼ねる

袖に嵐はつらくとも
ひゞく微妙の樂の聲
花かんばしく星照りて
煩累世々に絶えずして
絶えずもひゞけ長へに
ゆふいりあひの鐘の聲

(天地有情)

芳宜園 長三

一二 芳宜園大人の靈を祭る

七八

芳宜園

橋子隆、江戸の人、國學者、歌人、文化五年(四六)歿、年七十五。

たむけりてな かなねつく

甲子年上りよは

賀茂真淵。

うるはしむ

のふせ

のふせ

のふせ

のふせ

一二 芳宜園大人の靈を祭る

茲に文化の五年九月八日、平春海謹みて芳宜園の大人の奥津城の御前に菊の花一枝をたむけ、香の木一ひらを焚きて、うなねつきて申さく、あはれ悲しきかも、君は我に十といひて一年のこのかみにおはすなるが、今そのかみを思ひ出づるに、君は正に盛り年齢におはして、吾はまだ童にてぞ侍りける。常に縣居の庭に物學びに行きかひたる時、あしたにまゐるとしては君のみはかしのしりへに従ひ、ゆふべに罷るとしては君の御袖のもとに縋りて、相うるはしみまつれること、親子はらからにも何か異ならん書讀むとは君を師とも尊み、歌作るとしては吾をおとゞひの列にぞ教へ給ひける。中頃にして、君は仕への道に暇なくおはし、吾は世のさがか、づらひて、おのづから疎き方にも過ぎつる

あはれむの別

しぞく

花を

花を

花を

花を

花を

花を

花を

花を

花を

花を

花を

一二 芳宜園大人の靈を祭る

を、君仕へをしぞき給ひて後は、吾も同じ巷に移り住めば、花を尋ぬとしては、吾道しるべをなし、月を思ふとは君が舟に相乗り憂き事も共に憂へ、嬉しき節も共に喜びて、世にありふるわざのまめごととも、あだごととも、かたみにへだてなく、心をかはせること、今に二十年、その初を繰返し、數ふれば、相友たる事既に五十とせにぞ餘りける。さるを今後れ奉りて、いつの世にか相見ん、何れの時にかこととはん。常なきは人の身の習ぞと知れど、これをいかで歎かざらん、かゝるを誰かはよく堪へん。

あはれ悲しきかも。文の林世々に衰へ、言の葉の道日々に下りゆけるを、賀茂の翁世に出でて、今をすてて古に復り、青雲の高き心しらひを求め、倭文機の文あるみやびごとを貴みいへれど、尙くひぜを守り、舟にきだつくる輩、かれに泥みこゝにひかれて、尙怪しみとがむる類多く、たまあひてよくうけひく人なん稀なり

七九

たまあふ

たまあふ

たまあふ

教之日のまをり
 古より風之教
 芳宜園大人の靈を祭る
 一二

しを、君獨り心を起して、普く諭し、廣く誘ひしより、近き人は目の
 靡き來て、古ぶりの歌、世
 に盛りになりたるなり。
 その自ら詠みいで給へる歌
 を見るに、古き調新しき姿とり
 どりに備らざるはなし。その
 古を寫せるは、藤原寧樂の御世
 に及び、後のたくみに倣へるは、
 堀河鳥羽の御時に下らず。心
 に思ふ事は口には盡さざること
 なく、目に觸るゝものは言葉に
 載せざることなんあらざりける。
 きも、めでたふとまざる人なし。
 又事好みの人はその名を君に



橋千(像歳三十七) 隆

知られては、身の面おこしと思ひて世にも誇り、君の一歌を得て
 は、價なき實にもかへじといひて
 ぞ深く喜びける。
 然るを今、黄金の聲忽ち止みて、
 玉の響再び聞えずなりぬるは、わ
 がどちの歎のみかは、大方の世の
 人の憂ともいひつべし。これを
 いかでか惜しまざらん、かゝるを
 誰かは慕はざらん。あはれ悲し
 きかも。わがかく言擧するを泉
 の下にもさやかに聞召し、天翔り
 ても遙に見そなはせとなん申す。

面おこし

價なき實

然るを今、黄金の聲忽ち止みて、
 玉の響再び聞えずなりぬるは、わ
 がどちの歎のみかは、大方の世の
 人の憂ともいひつべし。これを
 いかでか惜しまざらん、かゝるを
 誰かは慕はざらん。あはれ悲し
 きかも。わがかく言擧するを泉
 の下にもさやかに聞召し、天翔り
 ても遙に見そなはせとなん申す。

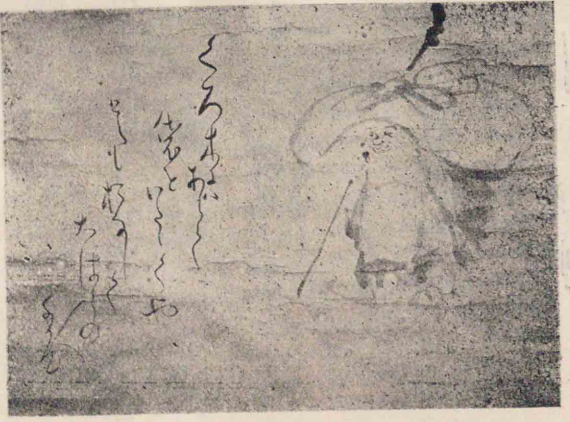
橋千蔭筆

くろ木にはあ
 りて袋をいた
 たくやとしも
 同じく大はら
 の人 千かけ

言擧
 琴後集

十五卷、村田
 春海の歌が集。
 村田春海
 江戸の人、國
 學者、文化八
 年(一四七〇)歿、
 年六十六。

一二 芳宜園大人の靈を祭る



橋千蔭筆

(琴後集)

萬葉

古
古
古
古

歌

三和歌

一 古今和歌集より

袖ひらきむらさき水はくはれを

玉乃うけしれ風をさむ 母之

君がたは柳さくらをさすませ

みわこそまはれけり素性

ひこゑはれきつものかけま玉の日に

志はるるなる花はちさらむ 反則

道業はにこむにしまぬるもて

水にこそ露を玉とあさむ之 遍昭

夏と秋とゆきかしのあはちは

かたからすしし風をあらしむ 躬恒

山里は社こゝろあつたに山を

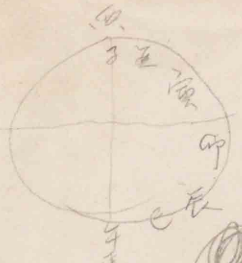
底比風之言に知るをこま〜て忠告

月をれは〜にもあそそかな〜けれ

わろろ一つ社に〜あつたと千里

ちばあゆろ神代もあゆ 龍田川

うたれな井にみけろろとは葉手



あ、げらげ有明此月とらんまてに

吾輩れこゝにあれろ〜は是則

わの、はを都れ翼

よを〜ら山と人を〜ら山とを撰

らふ〜ののふもとや〜の住人〜

二 新古今和歌集より

立看と云ふ

よとよは唐土まきでしゆとをを

都にのみとおもひけしうれ 俊成

夕月 夜志ほみらうらうら 難波江に

うーれわの葉をこゆるーられみ 秀能

うたにせむ来ぬ夜あまた代ほとよし

またしと物うはひらさぬの空家隆

聖京よわはゆれゆのるをさうたねよそ

わつころもてに秋をそあ之後鳥

心明よみにあそれけしうれけし

眺たは海に松れゆくれ 西行

乙亥、岸野
和泉主

侍ひしとはありしと一も水ありげに

橋立つ山に枯れゆくこれ 寂道

月わたるも花も紅葉もなかりけし

うらな 後邊 ともなふに枯れゆくこれ 定家

とこれ葉いみぢも 山梨の 海にうらな 川下 所よ

凍れも 山梨の 葉をゆきあらし 川下 うら良經

石川 河豆 花は 川下 いかは 川下 枯れけ 川下 水

月 川下 くれ 川下 きた 川下 ねて 川下 ね 川下 長明

君を 川下 つの 川下 心 川下 け 川下 り 川下 を 川下 人 川下 せ 川下 り

た 川下 こと 川下 此 川下 空 川下 け 川下 の 川下 玉 川下 ころ 川下 意 川下 園

を 川下 了 川下 山 川下 空 川下 意 川下 園 川下 意 川下 園 川下 意 川下 園

あ 川下 の 川下 玉 川下 の 川下 よ 川下 り 川下 水 川下 澄 川下 の 川下 意 川下 園

高山樗牛

名は林次郎、山形縣の人、文學博士、文藝批評家、明治三十五年歿、年三十四。

一代の宗師 百世の儀表

一四 世界の四聖 一

高山 樗牛

生まれて一代の宗師となり、死して百世の儀表となる。聖人にあらずんば、誰かこれを能くせんや。釋迦孔子ソクラテースキリストの四人、世呼んで世界の四聖とたふるは宜なるかな。釋迦は西曆紀元前凡そ六百年の頃、印度伽毘羅國の王家に生まる。父は淨飯王、母は麻耶夫人、その本名を悉達多といふ。釋迦は伽毘羅王家の族名にして、佛陀はその出家成道後の尊號なり。釋迦、身は一國の太子に生まれけれども、夙に思ひを人生の問題に潜め、二十九の歳、その妻子を捨てて、王城を逃れ、山林に隠れて、道を修むること六年、遂に人生の奧義を究め、無上の正覺に徹底せり。爾來五十餘年の間、中天竺の各地に巡錫して教化を布き、年八十餘歳にして、跋提河の邊に歿しぬ。今の佛教は即ち

無上の正覺

巡錫

百世の儀表
一代の宗師
高山樗牛

人々の内親
あまの

あまの
あまの

中元
巡錫

元々 歸命の大道

木鐸

令聞

釋迦一代の教訓に基づく。蓋し釋迦の當時、印度には幾多の哲學ありき。されど、徒に思索の高遠を欽びて、人生の疑問に適切ならず、偏に幽玄なる談理と慘澹たる苦行とによりて、安心の道を求めたり。その流派を樹てて相争ふところは、畢竟名目の優劣のみ。未だ一世の元々をして、歸命の大道に就かしむるに足らず。釋迦この間に生まれ、その浩大なる慈悲と無邊なる智慧とを以て、一世の木鐸となり、民をしてその歸依するところを知らしめたり。

孔子、名は丘、孔子はその尊稱なり。今を去ること二千四百餘年の昔、支那の魯國に生まる。幼にして學を好み、禮を習ふ。壯年の頃より魯國の官吏となり、傍ら子弟を教へて、夙に令聞あり、學徳愈進む。魯の定公の時に至り、擢てられて大司寇の職に就く。治績大いに舉り、内外その風采を想望す。時に齊王、魯國の

大司寇の職に就く

木鐸
令聞

元々
歸命の大道

日に盛大に赴けるを嫉み、謀を構へ定公をして孔子を用ひざらしむ。孔子時運の非なるを見、五十六歳の老軀を挺し、門下の高足を率ゐて、四方の遊説を試みぬ。

當時の支那はいはゆる春秋戦國の亂世なり。周の王室は名のみにして、君臣の大義は蕩然として地を拂へり。或は臣にしてその君を弑する者あり、或は子にしてその親を害する者あり。強は弱



高 山 樗 牛

を食み、大は小を併せ、權力の外に道義あるなし。教化の陵夷、風俗の頽廢、未だ曾てこの時の如きはあらず。孔子はすでに志を魯に得ず、乃ち慨然として故國を出で、大義名分を天下に唱へて、

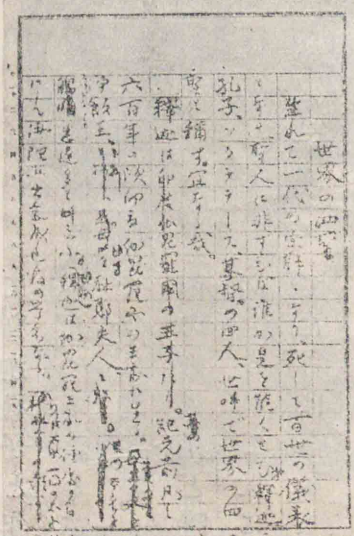
狂瀾を既倒に廻らす

狂瀾を既倒に廻らさんとす。志や高且大なりと謂ふべし。かくの如くにして四方を漂浪すること十三年、時非にして道容れられず、世また耳を名教に傾くる者なし。こゝに於て已むを得ず、老脚蹉跎として再び魯

老脚蹉跎

に歸り、歎じていはく、「嗚呼、吾が道途に窮す。世遂に吾を知るものなきか。」と。

門弟子貢獻めていはく、「何ぞ夫子を知るものなからんや。」孔子答へていはく、「



高 山 樗 牛 筆

「天を怨みず、人を尤めず、下學して而して上達す。我を知るものはそれ天か。君子は歿して名の稱せられざるを病む。吾が道行はれずんば、吾何を以てか後世に見えんや。」と。後幾ばくも

Handwritten notes in the top left margin, including the characters '狂瀾', '老脚蹉跎', and '名教'. There are also some vertical lines and other markings.

Handwritten notes in the top right margin, including the characters '老軀を挺す', '高足', and '蕩然として地を拂ふ'. There are also some vertical lines and other markings.

なくして歿す。時に七十三。

ソクラテースはギリシヤのアゼンス府に住める一彫刻師の子なり。その生まれたるはおよそ紀元前四百七十年の頃にして、釋迦孔子と年を



(筆子道吳) 迦 釋

へだつること二三十年に過ぎず。東西の聖人殆ど時を同じうして世に出でたるは奇なりといふべし。ギリシ

ヤの當時は所謂詭辯學派の跋扈せし時代にして、知識は名目の争に止まり、道徳は空文の上のみに貴ばれたり。その状なほ釋迦當時の印度の如く、學問は人生社會の實際に關して、殆ど裨益

詭辯學派

ソクラテースの死を悼む
ソクラテースの死を悼む
ソクラテースの死を悼む

ソクラテースの死を悼む

諄々

諄々

獨行の道

侃諤

侃諤

狩野探幽筆

本名守信、京都の人、延寶二年(一三三四)歿、年七十三。喬木は風に折らる

喬木は風に折らる
喬木は風に折らる
喬木は風に折らる

するところなかりき。ソクラテースは慨然として時弊の救済を以て自ら任じ、盛に道を講じ、理を談じ、諄々として倦まず。詭辯學者の輩に遇へば、則ちその獨得の論法を以て辯難攻撃して、一步も假借せず。侃諤の正義その稀代の雄辯と相伴ひて一世を風靡せり。

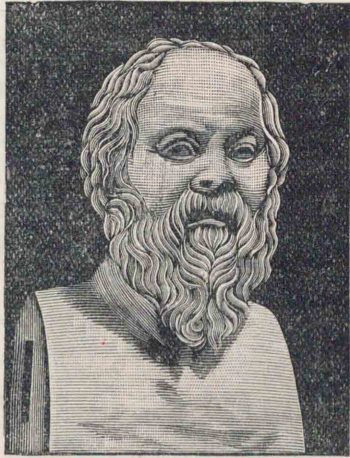


(筆幽探野狩) 子 孔

然るに「喬木は風に折らる。」といふ喩に漏れず、群小のソクラテースに快からざるもの、相計りて國法に背けるものとしてソクラテースを讒訴せり。その訴狀には「ソクラテースは國教を信ぜずして異教を翹め、以て人心を惑亂せり。宜しく國法によりて死刑に處すべし。」と。ソクラ

テースがこの讒訴に對する抗議は實に壯快を極めたるものにして、慨世憂國の至誠を以て國民に訴ふるところ、語々百世の眞理ならざるはなし。然れども判官はソクラテースを以て傲慢

蘇
32
リ
（まろ）



スーテラクソ

へていはく、「予はたゞ正義に導かれんのみ。死又何するものぞ。人生の幸福は靈魂の上に在るを知らずや」と。終に従容として毒を仰いで歿す。將に歿せんとするや、弟子、遺言を求む。ソ

不遜なりとし、死刑を宣告せり。ソクラテース泰然として驚かず、いはく「命のみ」と。ソクラテースの獄中にあるや、常に門弟子を集めて、生死靈魂、未來の事を説き、人の脱獄を勸むるものに對しては、輒ち答

アスケレピア
スの神
ギリシヤの醫
藥の神。

基
督

荆棘の冠を戴
ける基督は
一見よ、吾が
恵みに勝る悲
しみありや
と、憫愛の光
に満ちた瞳を
天の一方に注
いで居る。

キドオーレニ

伊太利の畫家、
西曆一五七四
年ボロニアに
生る。

クラテースいはく「爾一鶏を以てアスケレピアスの神に捧げよ」と。蓋し、嘗て病みし時、平癒を祈りて謝を致すことを忘れしが爲ならん。ギリシヤの聖人ソクラテースはかくの如くにして逝きぬ。年七十。

キリストは本名をヤソといふ。キリストとは「膏灌がれたる者」と、いふ義にして、教徒の奉れる尊稱なり。ユダヤのベツレヘムに生まる。西曆紀元第一年はその生後四年目に當れり。父はヨセフと呼べる賤しき木匠にして、母の名をマリ



馬羅
シルコ
ン
美
術
館
所
藏
基
督
(キ
ド
オー
レ
ニ
筆)

洗禮

ヤといふ。長じて三十歳の頃、豫言者ヨハネの洗禮を受けて、始めて傳道の生涯に入り、爾來三年の間、ユダヤの各地を歴遊し、諸の迫害に屈せずして、その福音を傳へたり。

抑、當時はローマ帝國の榮華、正にその極に達し、禍亂の萌芽その中に胚胎し、災異荐に至りて、天下寧日なし。ことにキリストの故國なるユダヤは、久しく暴君の收斂に疲れ、異邦人の侮慢を被れり。民衆は徒に珍奇なる淫祠を崇拜して、益、放縱の俗に流れ、學者は詭辯を弄し形式に拘泥して、空しく人を惑はすのみ。こゝに於て、一世の人心は悉く偉人の現出して、この暗黒の社會を照破せんことを渴望せり。キリストこの間に生まれ、自ら救世の使命を負へる神の子なりと稱し、昂然としてその偉大なる新教理を宣傳するや、遠近靡然としてこれに赴く。僧侶學者官吏等はこれを喜ばず、以て猥に新法異説を唱へて、民を迷はすも

胚胎
收斂
放縱の俗

救世の使命

ヨハネの洗禮
ユダヤの各地を歴遊し

ローマ帝國の榮華

ヨハネの洗禮
ユダヤの各地を歴遊し

のなりとなしキリストを捕へて磔殺の刑に處す。キリスト豫めこの事あらんを慮り、晏然として騒がず、靜に祈りていはく、「神よ、彼等を宥せ。彼等はその爲すべきところを知らざればなり。」と。その刑場に赴くや、路傍に哀哭する女子を顧みていはく、「エレサレムの女子よ、吾が爲に哭くこと勿れ。たゞ己と己の子との爲に哭け。」とかくの如くしてキリストは三十三年の短命を以て、十字架上の露と消え去りぬ。キリストの死後、その弟子は激烈なる迫害に抵抗して、その教を天下に弘む。キリスト教即ちこれなり。

一五 世界の四聖 二

高山樗牛

以上は四聖の略傳なり。その人物事蹟の高大にして雄偉なる、永く後人の景慕し、崇拜すべきところなり。四聖の中、釋迦を

轆轤不遇 除きては、いづれも轆轤不遇の中にその生を終へたり。孔子は

志を四方に得ず、その經綸を抱いて空しく詠歎の間に歿せり。ソクラテースとキリストとはいづれも讒奸の手に罹り、或は毒を仰ぎ、或は盜賊と並びて十字架上に磔せられたり。慘澹たりと謂ふべし。然れどもこれ等の人々の志すところは天下後世に在り、現世の禍福と一身の安危とは、毫もその顧慮するところにあらず。故にその死に就くや、晏如としてなほ歸するが如し。孔子はその一身の不幸を憂へずして、却つて「吾が道行はれずんば、吾何を以てか後世に見えんや」と、嗟歎せり。釋迦は衆生の爲に、その妻子と王位とを抛ちて、食を路傍に乞へり。ソクラテースは死罪の脅迫に遇うて、揚言して「はく、正義を信ずるものにとりて、死はた何するものぞ。吾をして一日の生あらしめんか、その一日即ち國民の迷をさまさざるべからず」と。モリス

孔子
轆轤不遇

浩大無邊

荒井寛方筆

本名寛十郎、
栃木縣の人、
明治十一年生
日本畫家。

涅槃

涅槃を斷滅
悟得するを斷



涅槃 (筆方寛井荒)

トは己を罪に陥るゝものの爲に神に祈りたり。嗚呼、何ぞその

や。

慈悲の浩大にして無邊なる
四聖はその生まれたる所
と時とを異にす。故にその
教理にも亦多少の差違なき
を得ず。今その要略を擧ぐ
れば左の如し。

釋迦の教理は煩惱を斷滅
して、涅槃に達するを主旨と
す。それ人生は苦に始まり
て苦に終る。生老病死いづ
れか苦に非ざるべき。故に吾人は現世を苦界と觀ぜざるべか

らず。而して苦の原因は情慾に在り、情慾の原因は「我」の一念に執著するに在り。故に吾人は「我」の一念を脱却して、無我無心の境界に達せざるべからず。これ人生究竟の樂地にして、涅槃即ちこれなり。

孔子の教は、身を修め、家を齊へ、國を治め、天下を平かにするに在り。而して身を修むる基は孝に在り。故に孝は百行の本なり。君臣の義、父子の親、夫婦の別、長幼の序、朋友の信、皆これに本づく。人は生まれながらにして、美德を天に稟くれども、後天の氣質によりて、これを完うすること能はざるもの多し。教育の要、こゝに於てかあり。すでに教育を受けて、身すでに修まらば、家自ら齊ふべく、家齊はば、國自ら治まるべく、國治まらば、天下自ら太平なるを得べし。故に孔子の教は、一身の修養に始まり、治國平天下に終るものと見るを得べし。

後天の氣質

徳
不
孤
有
下

知徳合一

ソクラテースの教はいはゆる知徳合一説なり。思へらく「眞正の知識は即ち道德なり。故に行ふと知るとはもと一體のみ。知つて而して行はざると、行うて而して知らざるとは、ともに知識・道德の眞正なるものに非ず。眞理を確信し、その實行を以て最上の義務となさば、正義おのづからその中に在り。正義は靈魂の満足なり。而して靈魂は肉體と異にして、不朽不滅なるものなり。故に人の正義を行ふ、現世の利害は決して顧慮すべきに非ず。道德は富貴の爲に存せず。然れども、富貴は道德の中に在り。」と。

キリストの教は愛の教なりと稱せらる。いはゆる山上の垂訓は三年傳道の極意を包括するを以て、左にその大略を擧げん。いはく「心の貧しきものは福なるかな、天國はその人の有なればなり。悲むものは福なるかな、その人は慰めらるべければなり。」

垂訓

幸福のありは、
心貧しきものありは、
悲むものは福なるかな、
その人は慰めらるべければなり。
一〇三

飢る渴く如く義を慕ふものは福なるかな、その人は飽くことを得べければなり。 憐むものは福なるかな、その人は憐を得べければなり。 心の清きものは福なる



山上の垂訓

偽善者の行に倣ふこと勿れ。 人は神と財とに兼ね事ふること能はず。 隠れたるを鑑み給ふ神は、顯に報

かな、その人は神を見るべければなり。 惡に敵することなかれ。 人若し汝の右の頬を打たば左の頬をもめぐらしてこれに向けよ。 汝の隣人を慈しみて、汝の敵を愛せよ。 人に見せんがために、義をその前に行ふこと勿れ。 右の手の爲すところを左の手に知らしむること勿れ。 汝は、

神に... 山上の垂訓... 耶蘇一代の説教中、山上の垂訓は最も有名なもの、一つで、獨逸の畫家ベガスの筆である。

人を是非すること勿れ。 人の目にある塵を見ながら、何ぞ己が目にある梁木を見ざる。 汝等求めよ、然らば與へられん。 尋ね

よ然らば遇はん。 叩け然らば啓かれん。 窄き門より入れ。 沈淪に至る路は濶く、その門は大きく、これより入るものは多し。 嗚呼いかに生命に至る路は窄く、その門は小さく、これを見出すものの少きぞや。 凡そこの訓を聽きて行ふものは、磐の上に家建てたる智者の如く、聽けども行はざるものは、沙上に屋を架せる愚人の如し」と。 キリスト教の精髓は、後世の人いかなる色彩を加ふとも、畢竟この山上の垂訓を出でず。

かくの如きは四聖の傳記及び教義の大要なり。 嗚呼、四聖逝いてすでに幾千年ぞ。 而してこの教の今なほ凛々として生氣あるを見よ。 世界累代の幾億兆の民衆は、この教に憑りてその道念を養ひ、その安慰を求む。 四聖の如きは實に人類の永遠の

救済者なりと謂ふべし。その遺徳の高大なること何を以てかこれに比せんや。
(樗牛全集)

遺徳の家

(澤庵和尚)

道は説く人はあれども之を知る人は鮮し。之を知る人は是あり、これを行ふ人は鮮し。説くことを得ずとも、之を知るは説くに勝れり。之を知ることを得ざれども、まづ之を行ふは之を知るに勝れり。説くは之を知らんがため、知るは之を行ふがためなれば、之を説きて知らざらんは説かざるが如し。之を知りて行はざるは知らざるが如し。

大類伸

東京市の人、
明治十七年生、
歴史学者、文
學博士、東北
帝國大學教授。

一六 歴史と自然と人

大類伸

私は歴史を學んで居る一人である。机に向つて書物のペー
ジをめくつたり、又書物を閉ぢ、ペンを置いて、靜に思を何百年、何
千年の昔に馳せる時、私の頭は歴史で充滿して居る。その時、私
には歴史が人生唯一の權威者であるかの如く考へられる。時
の大きいなる流は、古今東西一切のものを呑込み去つて、偉大なる
人間の思想も、事業も、總べては時の流を飾る漣に過ぎないとも
思はれる。恰も三千年の昔、聰明な希臘の人々がオリンブスの
神々の絶大な威力の前に拜跪した如くに、我等も亦歴史の前に
絶對的に拜跪せねばならぬのであらうか。

歴史あつて以來人類が進歩のために拂つた代價は、善にあれ、
惡にあれ、いづれにしてもそれは莫大なるものである。人類文明

オリンブス
希臘の山、希
臘神話に諸神
の棲居せる山
としてある。

の進歩のためと云ふ美名の下に、人間は莫大の犠牲を拂はねばならなかつた。それは實に數千年來の事實であつた。かくして歴史は立派な暴君であつた。然り暴君となり得るだけの堂堂たる權威者であつた。恰もその睫毛が微動しただけでも、オリンプスの靈峰搖いで紫電閃



ト ラ ア

き天地震動すと謠はれた、かの大神ゼウスの如くに、併し一たび書齋を出でて野外に歩を運ぶ時私の頭から歴史の影は漸く薄く消え去つて、自然が私の王國を占領し始めたかのやうに感ぜられる。仰いでかの碧空を眺めた時、草原に休んで萌出る緑の色に見入つた時、その澄切つた快き色彩と、生立つ希望と力とに溢れたその光

ゼウス
希臘神話に諸神の主宰者としてある。

とを認めずには居られない。その色、その光、それは残念ながら歴史のどのページにも求められないものである。それは嬰兒の頬に溢れた豊かさ、と心地よさとが、到底額に皺の波を寄せた年輩の人に求められない如くに。

歴史は時の流ではあるが、そこには人間の手が働いて居る。人間の努力と業績とを除けば、歴史は極めて寂しいものになる。併し今、眼の前に展開された自然には人間の力の跡はない。固よりそこには拓かれた田畑もあり、伐られた林もあらう。しかもそれは自然を飾る綾とはならうが、自然の權威を傷つける迄には至らな



ルトートスリア

莫大の犠牲を拂はねばならなかつた。

プラトーン
希臘の哲學者
(西曆紀元前
四二七—三四七)
アリストートル

希臘の哲學者
(西曆紀元前
三三四—二五〇)
ソロモン
イスラエルの
王(西曆紀元
前九三〇—九一三)

い。人間は自然に對してそれ程に弱いのである。田舎道に沿うて流れる小川は、如何にもさゝやかなものではあるが、能くそれに見入つた時、史上に英名を轟かした偉人の事業も、この小川に較べて全く無意味なやうにさへ思はれる。或は足駄の齒に蹴飛ばされる路端の小石ですらも、プラトーンやアリストートル以上の哲學を語つて居るやうだ。げにソロモンの榮華も野に咲く一莖の白百合の花にさへ及ばない。

想ふに歴史の領分は、書物や書齋の裡に限られるのではあるまいか。人間の集團生活から生れた法律は、侵すべからざる神聖を具へて居るとは言ふものの、自然の大なる道の前には風前の燈に等しい心細さを感じざるを得ない如く、歴史の暴君も自然の前には跪かねばなるまいと思はれる。歴史は我等に回想を教へる。そこに幾多の思慮もあり、考察判断もある。併し我

等に創造の力を與へるものは、實に自然を措いて他にはないのではなからうか。

歴史に倦きた時、歴史に満足を得られぬ時、杖を曳いて一步野外に出れば、新しい生命と力とが其處に漲つて居るやうに思はれる。否、必ずしも野外に散策せずとも、書齋の窓を開いて蒼々たる大空を仰ぐだけでも宜しい。その時、目に見えない大きな手に攔まれて、大地を引摺られて行くやうな思から、忽ち自由の天地を自在に飛廻る境涯に放たれたやうに感ぜられる。一たび蒼茫として限ない大空を仰げば、「玉堂金馬何處にか在る。雲山石室高うして嵯峨たり。」の感が起るのは、古人のみには限らず、我等とても同様である。古來偉大なる宗教家が屢、俗界を離れて自己の修養に努めたのも、一は彼等が新しい生命と力とを自然の懷に求めた結果であらう。野に叫ぶ人の聲が偉大な響

玉堂金馬何處

漢書
玉堂金馬何處
其の意は
玉堂金馬何處
其の意は

野に叫ぶ人
その聲が
偉大な響

を我等の耳に傳へるのも、或は自然の力がその人を通じて我等に傳はつて來る爲ではなからうか。自然の姿に偉大な生命を感得することは、即ち人間がそこに



ダンテ

神を認めたことではあるまいか。或は神と云ふ代りに大なる道と言つても宜しい。神の世界は純一なる世界である、絶對の國である。そこには永遠のみあつて、生死もなければ流轉もない。無論、複雑の諸相もなければ、隨つて歴史もない。ダンテの神曲には天上界を以て清淨の光明界として居る。しかも如何なる形もそこには玲瓏透徹水晶の如くにして何等の陰影をも止めない。之に反して、

ダンテ
伊太利の詩聖
西暦(二六五—
三二)

相
シヤ
ハ
ク
一
大
臣

相
對
の
境
涯

人間の世には光があれば必ず闇が伴ふ、形があれば又必ず影がなければならぬ。絶對の境涯でない人間界には、寧ろ影あることに依つて、闇あることに依つて、光の輝を一層明るくするやうに思はれる。そこには總てが反照に依つて、對比に依つて現されて來る。生と死、善と惡、大と小、長と短などいづれもそれで、その生命は言ふまでもなく複雑の相でなければならぬ。さればこそ歴史がそこに生れて來る。即ち華々しさはあるけれども眩しい世である。絶對純一の永遠の神の國に對して、常に相對矛盾を免れない。眩しい焦燥の氣分に満ちた、しかも無常生滅の郷土である。固より我等は人間と生れて、自ら人間たることを誇として居る。けれども自然の姿に接しては、その裏に純一な生命を認め得たやうに感ぜられる。さうしてそれに依つて無限の悦を贏

ち得たやうに感ずる。その時こそ、我等は神の力に觸れたのであるまいか、大道を悟り得たのではあるまいか。少くともその瞬間、我等は歴史を忘れて了ふ、生滅の念は消え去つて了ふ。時の變遷も、發展の限なき連続も、極めて小さなものとなるのである。古代の人はかゝる絶対純一の感を信仰の對象に於て求めることが出來た。さればこそ其の拜跪した神々の諸像は、現代人には到底企及することの出來ない程の崇高さと單純の偉大さを發揮したものであつた。

一七 歴史と自然と人 二

大類 伸

東洋文明の理想は、超人間的の力に跪くことにあるやうに思はれる。帝王政治の意義もそこから生れて來ると思ふ。併し一たび轉じて、西洋文明を顧みれば、そこには人間が總てを征服

東洋文明の
精神は、
西洋文明の
注目を
引く

超人間

せずんば止まない傾向が著しく目立つ。或人は「文化とは人間が自然を征服することだ。」と言つたが、果してさうとすれば、西洋文明こそは眞の文明であるやうにも考へられる。今こゝに私は東西文明の優劣を論ずるのではない。併し自然と人間とを對立させて考へる時、兩者の關係が東西の文明に於て餘程その位置に差違あることを、大體に於て認めなければならぬ。少くとも西洋文明三千年の發展史を顧みれば、そこに人間の力が著しく高調されて居るのに氣付くのである。

併しながら、ともかく、西洋文明の力に觸れた後、我等は自ら人間であることに非常に興味を持ち、それを誇と感ずるやうになつて來る。固よりこの感じは、必ずしも西洋文明のみのたまものとは限らない。深く自己を省察すれば、等しく得らるべき感じではあるけれども、西洋文明が特にその點に強い力、或は寧ろ

鮮明な色彩を有して居るため、それから受ける感じが頗る強いのである。かゝる魅力ある文明が近代の日本の物質上精神上少からぬ感動と動搖とを與へたことは言ふまでもなからう。

茲に至つて我等は大自然の前にのみ拜跪しては居られない。

嗚呼、人間の偉大さ。赤兒が全身の力を籠めて泣く聲にも、小學校の子供が運動會の競走に一心不亂に駆ける姿にも、小さい努力ながらも、其處には人間としての力が十分に發揮されて居るのである。藝術家の創作、學者の研究、乃至實業家の經營、政治家の經綸にも、等しく人間の價値を高調せざるを得ない。

こゝまで考へた後に、野外の散策から轉じて、人間の波が渦巻く都會の裏に這入ると、周圍の光景は私に又新しい感を起させて來る。靜な小川の囁きよりも、路傍の草の色や小石の形よりも、工場の薄暗い塵埃だらけの部室の内て裸體になつて活動す

人
の
心
を
寫
す

ミレー
佛國の畫家、
(西曆一八四一
年五月)

る労働者の姿に、一層深い意義が認められるやうだ。所謂美しい自然よりも、醜い彼等の姿の方が一層複雑な美を現してゐるのではあるまいか。ミレーのあの靜な黄昏の祈禱の繪を見て、一面の畑と遠方の森とに充渡つた大自然の靜けさよりも、其の間に立つた農民の姿に深い意義を認めずには居られない。從來小さいと思つた物も、醜いと思つたものも、茲に漸く偉大なものとなり、美しいものとなつて來る。そこで我等は人間と生れた以上は、自ら人間たることを誇として、此の一生を立派な人間として暮すのが最も有意義であるのだ。我等は斯くして肩身廣く世界に闊歩することが出來よう。茲に至つて、歴史の權威も自然の威力も全く忘れられて了ふ。過去に煩はされず、周圍に束縛されず、正に天馬空を馳すの意氣込で、思ふが儘に進んで行き得るやうに思はれる。此の時誰人か人間の力に感謝し

天馬空を馳す

天馬空を馳す

随喜

信仰
難境を流す

有頂天

中
有頂天は
有頂天は

人間

③ 人間は

生る窮極

聖人
精神の力

東亞文明

有頂天
精神の力

ないものがあらう。併し人間に随喜しつゝ、有頂天になつて進み行かうとすれば私を引止める或物があるやうに思はれる。それは決して悪魔の囁ではない、恐らく神の聲であらう。それは人間に何物かを命令し指示するものである。

思ふに、西洋の文明は生きることの價値を人間に教へた。さうして其の價値を無に歸せしめない爲に、不斷の奮闘と努力とを人間に慫慂した。東洋の文明は我等の生の窮極を具體的に示した。人間の努力に對して越え難い限界を劃した。生きるが爲には、此の制限を破らざる範圍に於て活動せねばならぬ。斯くの如くにして、我等は東西兩文明から兩様の教訓を受けた。但し其の一が全然正しくして、他が全然誤であるのではない。恐らく人生の姿が異なつた二方面に於て觀察されたに過ぎない。

神の力

imposepul
の神

いと思ふ。自力の誇と不斷の努力とは必要であるが、又同時に人間を一貫する大きな運命の力も無視する事は出来まい。そこに人間の努力に一の限界が置かれる事となる。さうして又自然が人間に對して大いなる威力を揮ふ事が可能となる。是に於てか、一たび自然を棄てて、人間にのみ没頭しようとした私も、再び仰いで蒼々たる大空に見入らねばならず、更に再び森のたゞずまひにも、一輪の花にも、路傍の小石にも、至大の意義を感じて來るのである。

人間の力の絶對でないことを考へると、自然の威力に注意を拂ふやうになるが、それと同時に、時に對する人間の關係も亦認められて來る。人間の必死の努力に依つても解決されなかつた問題が、時の経過につれて自然に解決される場合は少くない。固より其の場合にも人間の力が働いて居ないのではない。嚮

に人間の努力があつたればこそ、それが或年月を経た後に解決されたので、たゞ時の経過のみが解決したのではない。併し如何に人間の努力が大なればとて、時の要素がその間に加はつて來なければ、解決は求められなかつたのである。是に於てか人生に對して歴史は重大となつて來る。

人事の發展・推移の上に環境の力を重視するものは、即ち歴史を重んずるものである。人事の説明をその當事者たる箇人に求むるよりも、其者をして此の如き事件を生まれむるに至つた環境に求むるの風は、史的研究の一特色である。さうして其の環境は同時代の自然社會などに擬せられるばかりでなく、過去の長い歴史の上にも求められる。此の場合、歴史の長い發展の連続は抗ひ難い強い運命の掟のやうに過、現、未の三世を一貫して居る。人間はたゞ其の鐵則に縛られた傀儡に過ぎないかの

傀儡
鐵則

觀がある。

勿論歴史は人間の生んだ生活現象の連續に過ぎないけれども、其等を時の経過に關聯させて考へて見ると、そこに人間の手で左右することの出來ない強い發展の連續があるやうだ。さうして時の流の中に於てのみ、人間の努力は有形無形の或物として示されるのである。先般の世界大戰が五年の歳月を経て彼の如き結果に終つたのも、窮極は時が戦局を解決したのではなからうか。固より開戦の當初から、戦局の推移に對しては双方ともに異常な努力を費した。併し彼の如き結果に終るべき事は誰人が豫想し得たであらう。要するに人事の終局は、時のみ之を知つて居るのではなからうか。時の力を認める者は歴史の權威を認める者である。私は人間と共に自然を、而して自然と共に歴史を、人間生活の要素として認めたいのである。

阿部次郎

山形縣の人、
明治十六年生、
文學博士、東
北帝國大學教
授。

一八 讀書の意義

阿部 次郎

世の中には、極めて平凡で陳腐な問題で、而も時々振返つて之を考へ直して置かなければならない性質のものがある。讀書の意義といふやうなことも世人の多數にとつては、恐らくこの類の問題の一つである。讀書は誰でもすることであるが、大多數の人はその意義と利弊とを考へてゐない。併し文化の進歩に伴つて、讀書慾が急速に増加するにつれ、又讀書の態度が眞劍の度を加へるにつれて、この問題をはつきり考へて置く必要は益、加はつて来る。

讀書は體驗を豫想する。自ら眞劍に生活し、眞劍に思索してゐる人にとつてのみ讀書は効果がある。讀書は吾々の思索と體驗とを補ふことは出来るが、之に代ることは出来ない。讀書

思索

二 讀書―休験

一 陳腐、古、向親
平凡 陳腐な方、向
題―考へる必要あり
利益、敬、信

の意義を考へる時、吾々は第一にこの事を記憶して置かなければならない。

若し人が一冊の書でも之を本當に理解しようと思ふならば、唯之に嚙り付いたり、之と睨めつくらをしたりしてゐるべきではない。假令その人が之を讀みかへし、又讀みかへして、一生その書を手から離さないにしても、若しその書の根本問題を自己の問題とすることを知らず、その書の背景になつてゐる人生の體驗を自ら體驗することを知らず、又著者の思索の努力を自己の中に繰返すことを知らないならば、唯小僧のお經を誦む時のやうに、その書を誦誦するのみで、その人の生活はこれによつて豊富にも力強くも高くもならないであらう。寧ろ無用の記憶は彼の頭腦を硬くして、讀書は平生の馬鹿を一層馬鹿にするに過ぎないであらう。讀書の意義を考へるものは、先づその價値

三 讀書

内容
目次
序

の限界を考へなければならぬ。吾々にとつて最上の意義を持つてゐるのは生活であつて、決して讀書ではない。此の間の關係を轉倒して、讀書に無條件の價值を置くのは、寧ろ讀書からその正當な價值を奪ふ所以に過ぎないのである。

この事は、理化の書にも、家政の書にも、料理の書にも齊しく適用される。自然現象に對する觀察と實驗、家庭の實際生活に於ける苦心と活用、臺所に於ける調理と食卓に於ける玩味、かういふやうなことを始終念頭に置きながら、書物に書いてあることを確めたり、批評したり、訂正したり、運用したりしないならば、讀書は唯暇潰しの道樂になつて了つて、その知識はいつまでも本當に自分のものとなることがないであらう。就中、自分の生活と體驗とに照して、根柢から之を吟味する心掛の特に必要なのは、哲學や文藝に關する書である。かう云ふ種類の文獻の中に

生活の意義
讀書の意義

自然現象に對する觀察と實驗

（考）

文獻

機微

内面的體驗

内省的體驗

内省

取扱はれてゐるのは、無形の眞理か、人心の機微かである。この場合には、吾々は理化や料理の書の場合のやうに、之を實驗に徵すべき有形な物を持つてゐない。時代の推移や人間の心理は、社會現象の考察や他人の喜怒哀樂の表情の觀察に徴して、書物に書いてあることの眞偽を判斷することが出来るのは、勿論であるが、この場合、その根據になつてゐる社會現象の意味、他人の表情の意味は、結局自分自身の内面的體驗を基礎としなければ、解釋の出来ない筈のものである。随つて吾々は、唯深く自分の内面を省みることによつて、書かれてあることの眞偽を判定するより外はないのである。平生自ら體驗を深める努力もせず、自ら思索し、自ら内省する習慣をも作つて置かない者は、書を讀んでも本當の意味を理解することが出来ず、唯徒に之を記憶するか、若しくは盲目的に之を信仰するかに過ぎないであらう。

壅塞

併し十分に理解されぬ記憶の集積と、腹の底から得心の行かぬ盲目的な信仰とは、吾々の生の流動を妨げる石塊のやうなものである。之を持つことが多ければ多い程、吾々の生活は却つて之がために壅塞されるのである。

吾々の生活の發展の最初の地盤となり、吾々の思索の第一の出発点となるものは何であるか。それは吾々自身の體驗である。吾々自身の體驗の外には何もものもあることを得ない。吾々の最初の體驗は固より完全なものではないが、その中に隠れてゐるものを明るみにひき出し、その中に潜んでゐる矛盾と戦を重ね、その中に具はつてゐる内面的傾向を次第に押進めることによつて、吾々の生活は始めて發展し、吾々の思索は始めて眞理に接近する。若し吾々が、吾々の生活に關する眞理の標準を、例へば物理學に於けるが如く、自己以外に固定した尺度に求め

懷疑

るならば、吾々はいつまでたつてもそんなものを發見することが出来ないであらう。吾々は永遠にたゞ與へられたものを盲信するか、若しくは永遠に懷疑の淵に沈んでゐなければならぬであらう。輕信と懷疑とは雙生兒である。無きものを有ると考へるのは輕信である。眞理を求めるのに最初からそれが無いときまつてゐる方面を捜し廻つて、永久に無いと云つて騒ぎ立てるのは懷疑である。幻の上にその思想の根柢を築かうとしてゐる點に於ては、兩者共に同様である。生活に於ても、思索に於ても、假初にも堅實な歩を始めようとするならば、吾々は自分の體驗を信じて之を學び知らなければならぬ。讀書の價値も亦この信念の上に立つて、始めて發揮されるのである。

この信念を基礎としない時、讀書は吾々にどのやうな弊害を

半可通

與へるであらうか。第一にそれは善惡・美醜・正邪に對する純朴な本能を紊して、之を混亂させ、之を痲痺させる。全然文字を知らぬ田夫野人が、半可通の讀書子よりも人情の美醜を解し、善惡正邪に對して彼等一流の判斷を持つてゐるのは、彼等が兎に角讀書によつて迷はされない本能を持續してゐるからである。第二に體驗の根柢を缺いてゐる讀書は、吾々の思考力を薄弱にする。吾々は雑多な意見を聞きかぢることによつて、自分自身の判斷が無い人間にされて了ふ。さうして第三に、吾々は前に云つたやうな種々の理由によつて、結局吾々の生活そのものの統一を奪はれ、生活そのものの力を失ふ様な恐しい破目に陥る。吾々の生活には踏みしめるべき大地もなく、歩み出すべき出發點もないものとなつてしまふ。この點に於て、誤れる讀書によつて、今日の生活が如何に損はれてゐるか、他人事ならぬ吾々自

身の問題として、吾々は深く省みるところがなければならぬ。吾々は無學な人を嘲る前に、先づ多少の學問によつて、却つて自分自身が馬鹿になつてゐるやうなことがないかと云ふことを考へて見る必要がある。生活の狭いことは決して喜ぶべきことではないが、狭くても自分の生活を持つてゐる者は、凡そ自分の生活を持つてゐない者よりも遙に優つてゐる。

併し、粗野から産れたものよりも、教養ある敏感から生れたものの方がよいことは云ふまでもない。無知は吾々の生活を狭くし、吾々の思想を偏らしめ、吾々と他人との交通を困難なものにする。吾々が、最高の度まで、吾々の中に潜んでゐる力を發揮しようとするならば、他人の體驗を通して、自分の局限された一生の中に觸れ得ないやうな體驗をも味はひ、他人の思索によつて自分の思想を豊富にし、かくて一人の生涯の中に、千萬人の生

涯を攝取することを心掛けなければならない。決して自分自身の中にのみ閉籠るべきではない。茲に於て讀書の意義は甚だ重大となる。書を讀むと讀まぬとは第一義に於て人間の價値を左右するものではないが、それは深く人間の價値と關係して、その向上を大いに助ける。正しい道さへ踏外さないならば、書物を讀めば讀むほどよいものである。さうして讀まなければ讀まないほど悪いものである。

唯讀書の意義は、吾々の體驗を基礎としてのみ成立つものであるとすれば、どんな良書も、此方の體驗が足りないかぎり十分に理解することが出来ないのは止むを得ない。特に偉人がその一生の體驗と思索とを籠めたやうな大作になると、それは吾々の體驗と思索とが大きくなればなるほど、何處までも益、大きく見えるであらう。幾度讀返しても常に新しい味はひを吾々

に味ははせるであらう。この意味に於て、吾々が本當に良書を理解しようと思ふならば、吾々は先づ自分自身の生活を大きくしなければならぬ。吾々が全力を盡して考へたり、味はつたりしても、とても理解し得ないやうな書に遭遇したならば、吾々は暫くその書を離れて、直接の人生に歸つて行くがよい。さうして其處で得たものを携へて、適當の時期を見計つて再び書物に歸るがよい。その時吾々が直接の人生から携へて來たものは、その書物を理解する爲に大いに裨益する事があるであらう。自己の成熟を待たずに無闇に、之にかちり付くのは極めて愚策である。自然科學の知識の根原が自然にあるやうに、人間智の根原は凡べて直接の人生にある事を忘れてはならない。書を讀むとは心を讀むのである。自己の心を讀む事を知らぬものが、どうして他人の心を讀む事が出來よう。(人格主義)

一九知と愛

西田幾多郎

西田幾多郎
石川縣の人、
明治三年生、
哲學者、文學
博士、京都帝
國大學教授。

知と愛とは普通には全然相異なつた精神作用であると考へられて居る。併し余は此の二つの精神作用は、決して別種のものではなく、本來同一の精神作用であると考へる。然らば如何なる精神作用であるか。一言にていへば、主客合一の作用である。我が物に一致する作用である。何故に知は主客合一であるか。我々が物の真相を知るといふのは、自己の妄想臆斷、即ち所謂主觀的のものを消磨し盡して、物の真相に一致した時、即ち純客觀に一致した時、始めてこれを能くするのである。例へば明月の薄黒い處のあるのは、兎が餅を搗いて居るのであるとか、地震は地下の大鯰が動くのであるとかいふのは主觀的妄想である。然るに、我々は天文、地質の學に於て、全然かゝる主觀的妄

想を捨て、純客觀的なる自然法則に従うて考究し、爰に始めて此等の現象の真相に到達することが出来るのである。我々は客觀的になればなるだけ、益、能く物の真相を知ることが出来る。數千年來の學問進歩の歴史は、我々人間が主觀を棄てて客觀に従ひきつた道筋を示したものである。次に何故に愛は主客合一であるか。我々が物を愛するといふのは、自己を捨てて他に一致するの謂である。自他合一、其の間一點の隙間なくして、始めて眞の愛情が起るのである。我々が花を愛するのは、自分が花と一致するのである。月を愛するのは、月と一致するのである。親が子となり、子が親となり、此處に始めて親子の愛情が起るのである。親が子となるが故に、子の一利一害は己の利害のやうに感ぜられ、子が親となるが故に、親の一喜一憂は己の一喜一憂の如くに感ぜられるのである。我々が自己の私を棄てて、

純客觀的即ち無私となればなる程、愛は大きくなり深くなる。親子・夫妻の愛より朋友の愛に進み、朋友の愛より人類の愛に進む。佛陀の愛は禽獸・草木にまでも及んだのである。

此の如く、知と愛とは同一の精神作用である。物を知るには之を愛せねばならず、物を愛するには之を知らねばならぬ。數學者は自己を棄てて數理を愛し、數理その者と一致するが故に、能く數理を明にすることが出来るのである。美術家は能く自然を愛し、自然に一致し、自己を自然の中に没することによつて、始めて自然の眞を看破し得るのである。又、我は我が友を知るが故に、之を愛するのである。境遇を同じうし相理解する事が愈、深ければ深い程、同情は益、濃になる譯である。併し、愛は知の結果、知は愛の結果といふやうに、此の兩作用を分けて考へては、未だ知と愛との眞相を得たものではない。知は愛、愛は知であ

る。例へば我々が自己の好む所に熱中する時は、殆ど無意識である。自己を忘れて唯自己以上の不可思議力が獨り堂々として働いて居る。此の時が主もなく、客もなく、眞の主客合一である。此の時が知即ち愛、愛即ち知である。數理の妙に心を奪はれ、寢食を忘れて之に耽る時、我は數理を知ると共に之を愛しつゝあるのである。又我々が他人の喜憂に對して、全く自他の區別がなく、他人の感ずる所を直に自己に感じ、共に笑ひ共に泣く、此の時我は他人を愛し、又之を知りつゝあるのである。愛は他人の感情を直覺するのである。池に陥らんとする幼兒を救ふに當つては、かはいゝといふ考すら起る餘裕もない。

普通には、愛は感情であつて、純粹なる知識と區別されねばならぬといふ。併し、事實上の精神現象には、純知識といふものもなければ、純感情といふものもない。此の如き區別は心理學者

が學問上の便宜のために作つた抽象的概念に過ぎない。學理の研究が一種の感情によつて維持されねばならぬやうに、他を愛するには一種の直覺が基とならねばならぬ。余の考を以てすると、普通の知とは非人格的對象の知識である。之に反して、愛とは人格的對象の知識である。たとひ對象が非人格的であつても、之を人格的として見た時の知識である。兩者の差は精神作用その者にあるのではなく、寧ろ對象の種類によるといつてもよろしい。而して古來幾多の學者哲人の云つたやうに、宇宙實在の本體は人格的のものであるとすると、愛は實在の本體を捕捉する力である。物に對する最も深き知識である。分析推論の知識は物に對する表面的知識であつて、實在その者を捕捉することは出來ぬ。我々は、唯愛によつてのみ之に達するこゝとが出来る。愛は知の極點である。

以上、少しく知と愛との關係を述べた。今之を宗教上の事に當てはめて考へて見よう。主觀は自力である。客觀は他力である。我々が物を知り、物を愛するといふのは、自力を棄てて他力の信心に入る謂である。人間一生の仕事が知と愛との外に無いものとすれば、我々は日々に他力信心の上に働いて居るのである。學問も道德も皆佛陀の光明であり、宗教といふものは此の作用の極致である。學問や道德は、個々の差別的現象の上に、此の他力の光明に浴するのであるが、宗教は宇宙全體の上に於て絶対無限の佛陀その者に接するのである。「父よ、若し聖旨にかなはば、この杯を我より離し給へ。されど我が意のまゝをなすにあらざ、唯聖旨のまゝになし給へ。」とか、「念佛はまことに淨土に生るゝ種にてやはべるらん。また地獄におつべき業にてやはべるらん。總じてもて存知せざるなり。」とかいふ語が

父よ云々
新約全書馬太
傳の語。

念佛は云々
歎異鈔第二章
の語。

ヴェーダ教
婆羅門教をい
ふ。

宗教の極意である。而して、この絶対無限の佛若しくは神を知るのには、唯之を愛するによりて能くするのである。之を愛するが即ち之を知るのである。印度のヴェーダ教や、佛教の聖道門は之を知るといひ、基督教や、浄土宗は之を愛すといひ、又は之に依るといふ。

各自其の特色はないではないが、其の本質に於て同一である。神は分析や推論によつて知り得べき者ではない。實在の本質が人格的のものであるとすれば、神は最大人格的のものである。我々が神を知るのには、唯愛又は信の直覺によつて知り得るのである。故に我は神を知らず、我唯神を愛す又は信ずといふ者は、最も能く神を知つて居る者である。

(善の研究)

二〇 社會と感激

中澤 臨川

中澤臨川
名は重雄、長
野縣の人、工
學士、學者、
大正九年歿、
年四十三。

一日一刻感激がなければ、その社會は遲滯する。感激のない社會は、丁度水の死んだ沼のやうなもので、けいさ子子のわき、枯葉の腐るに任せるほかはない。生命の源から湧き出す活泉の斷えた社會ほど、惨めなものはない。いつそのこと太く短くこの世を送りたい。」といふやうな嘆きは、感激のない社會に生存する者の、自然に洩す倦怠の聲である。社會は一種の大きな自動機械で、誰をでもその因習と機械律のもとに囚へ搬ばうとする。多くの人は、この社會の壓制に馴れて、無自覺に、一瞬の自由をも知らずに、自我の面影を見る機會もなく、醉生夢死する。一人感激を欲し自由を希ふ者があつても、その人の力の餘程偉大でない限は、彼も亦終には、重い軛くわを身に負はされて、同一の運命に

終らざるを得ない。人は生命の感激に生き、人は社會の因習に死ぬ。

感激に生きる者の一刻は、いかなる富貴を以てしても代へえないほど貴いものである。藝術家や宗教家の生活が、能く之を證明してゐる。陋巷に窮死する名匠の一生を憐む者は、憐む者が愚である。人は、世間並に立派だと思はれる生活をして、他も羨み、自分も満足してゐながら、ある動機から、急に従前の生活が虚偽の塊であつたことに氣の附くことがある。昔、アレキサンダー・セヴェラスの時代に、羅馬に一人の男があつた。彼は伶俐な工匠であつた爲に、其の名譽は舉り、其の財囊は常に満ちてゐた。彼は楽しい家庭に住ひ、愉快な交際社會へも出入した。彼は、日毎満足の朝に目覺めては、楽しく忙はしく仕事を迎へた。これほど安泰な生活が、またと世にあらうか。然るに一日、或不

セヴェラス
ローマ皇帝イ
ルクス・ロアウ
レリアスのこ
と(四五—三五)
殺。

安が彼の心を襲つた。彼は急に宗教上の狂熱に捉へられた。生命の嵐が、落附拂つた羅馬の街々を吹捲つて、その姿を一變させたやうに彼には思はれた。古い帝王の都は、その一つの塵の位置をだに變へないのであつて、變つたのは唯一住民の心であつた。その日から、彼の眼に映るあらゆる事物が、新しい意味を彼に齎して、彼自身が奇蹟と法悦の中心であるかに見えた。彼は、永く囚はれてゐた皮相な社會的生活の満足から遁れて、斷えざる感激の新生命に入つたのであつた。

誰が彼を羨んだであらう。恐らく當時の人は、その後の彼の行狀を笑つたに違ひない。それほど社會的慣習と惰性とは、世間の人の心に喰入つて、彼等の感覺を鈍らせ、彼等の魂に目隠しを施してゐるのである。然し、その癖彼等は、無意識の間に何等かの感激を待ちこがれてゐる。彼等は、且つ疑ひ且つ恐れなが

ら、生命の慈雨を望んでゐる。社會的因習の牢獄は、永く彼等の耐へうる所でない。そこで、或者は感激の恵を宗教に求め、或者はこれを藝術に求め、或者はこれを直接行爲に求めようとする。求めて得ざる者の墮落は悲惨であつて、これ實に社會の日々行ひつゝある罪惡である。

生命の源に遡り、感激の泉を汲まうとするのは、人性の常である。然るに、社會が之を阻止する。社會は、廣い生命の爲の方便でなければならぬにも拘らず、生命の直接要求と社會との間には、常に何等かの間隙があり、撞著がある。感激を阻止する社會は最も悪い社會であり、共同的感激のない社會ほど住むに値しない社會はない。私は安愜な生活の百年よりも、感激の一日の貴さを想見せざるを得ない。私は、我邦の維新前後に逢遇した人達の幸福を羨む。進んでは、元龜・天正の戰國時代に生れた

撞著

元龜・天正
正親町天皇の
御代、戰國時
代の終から豊
臣秀吉の天下
一統までであ
る。

人達の運命をさへ羨望しようとする。我等の自由性は、必ずしも身體財産の安全を以て満足し得られるものではない。我等は高潮した感激に由つてのみ求め得らるゝ眞自我の自由を欲する。重ねて言ふ、感激のない社會ほど悪い社會はない。

(破壊と建設)

明治天皇御製

ならび行く人にはよしやおくるとも

たゞしき道をふみなたがへそ

おのが身はかへりみずしてともすれば

人のうへのみいふ世なりけり

二 國民精神の統一

高山樗牛

高山樗牛
名は林次郎、
山形縣の人、
文學博士、文
藝批評家、明
治三十五年、
年三十四。

獨逸に *Zeitgeist* の語あり。茲に時代精神と翻す。一時代の人文の全部を貫通して、其の活動進歩の動機となる根本思想の義なり。

一定の歳時及び方處に於ける時代精神は、必ずしも唯一ならず。否多くの場合に於ては、諸種の傾向互に交貫離合して其の歸向する所同じからざるを常とす。これ社會的範圍の廣さに随つて、おのづから萬人の思想の統一せられがたき事情あればなり。人文發達の上より見る時は、この時代精神の統一は必ずしも希望すべき事にあらず。沈滞固陋なる形式主義の打破せられたる曉には、從來の強制的統一に對する反動として、社會の人心に數多の異なりたる思想を惹き起すべく、斯くして惹き起

頤使

されたる數多の理想の追求は、將に來らんとする統一時代に到達するの準備として極めて必要なる事なり。今一例として文藝復興期の美術を擧げんに、中世紀の宗教的形式を解脱して、個人的自在を發展せんとするこの時代の精神につれ、美術も亦古代傳説及び宗教の繫縛を離れて、自家獨立の進歩に向ひぬ。中世の美術は徹頭徹尾、宗教によりて統一せられたり。建築も彫刻も繪畫も一に宗教の頤使に任じたるを以て、其の間に一致融合の存在するあり。この一致融合てふ形式的事實は甚だ嘉すべしと雖も、これあるが爲に各科美術は其の自由の發展を拘束せられ、沈滞腐爛に陥るを免れず。これ統一の利益に對する弊害の一面なり。この弊の究る所、一切の製作は教會の名に依りて立ち、美術家の名稱は多く埋滅し、其の題目及び内容は一に宗教的傳説の決する所となり、美術家の唯一の

職能は唯僅に刀鋸の技巧にありき。文藝復興期に萌發したる近世的精神は、方にこの繫縛を打破すべく起りぬ。今やよし教會と美術と全く分離するに及ばずと雖も、美術家は超然として傳説・證典の外に立ち、宗教的題目に關しても、一に自家獨立の思想によりて解釋し、古來陳套の資材に新生命を與へたり。さしも中世紀に賤まれたる天然も、今や彼等は快麗なる胸襟を披拂して其の美を包容し、荒唐不自然なる從來の美術に更に一段の寫實的分子を貼襯せり。是に於てか人體解剖遠近投射の研究漸く行はれ、光線空氣の影響は素より、色彩濃淡の完美を究めたり。人體を以て汚穢の肉塊と觀じたるの風全く地を拂ひ、優雅なる人物畫風景畫は盛んに行はれ、憂鬱なる世界は茲に一種愉快の空氣を以て充たされたり。是に於て中世紀に於ける抽象理想主義全く仆れ、自由なる自然主義は旭日中天の勢を以て當

陳套

荒唐
貼襯

代の美術界を風靡せり。建築彫刻繪畫は宗教の束縛を離れ、各自其の獨立の進路を取りて自由の發展を求め得たり。美術史上希臘のペリクレース期を外にして、他に比類無きラファエル時代の全盛は、斯の如くにして發現せられき。是を以て之を見れば、文藝復興期は美術界に於ける精神的分裂の端緒を開きたり。然れども是の如き精神的分裂は、中世の固陋なる形式主義の統一を壞り、近代美術を啓發するに於て寧ろ大いに必要なりしなり。これ分裂の弊害に對する利益の一面なり。この例に於て見るが如く、時代精神の統一必ずしも喜ぶべきにあらず。其の分裂亦必ずしも悲むべからず。要は進歩に益するの如何にあるのみ。然れども人文發達の極致は、形式上素より分裂にあらずして統一に存すべし。而してこの極致に當るべき統一は、外部の壓力を以て一時の合同を強ふる者に非ず

して、必ずや各部分の自由なる發達を包容せる内面的調和に存すべし。故に時代精神の分裂の時として喜ぶべきは、是の如き極致の統一に達するの一階段たるの場合に於てのみ。分裂其の物は毫も希望するに足らざるなり。文藝復興期に於ける美術の分裂が、中世の統一よりも喜ぶべしとなすは、この分裂が永久のものに非ずして、彫刻と繪畫と建築との三者が個々相獨立して、全内部の發達を成就したらん後、更に其の結合を再びするの時あらんを思へばなり。

翻つて我が邦の現状を觀ずれば、吾人は時代精神の分裂漸く其の主力を磨滅し、今や方に其の統一の機に迫りつゝあるを見る。統一の弊や、則ち沈滯腐爛、分裂の害や、即ち扞格齟齬、其の弊たり害たるに到りては即ち一なり。吾が邦の今日は方にこの扞格齟齬の害を被りつゝあるにあらざるか。請ふ吾人をして

扞格齟齬

少しく是を陳べしめよ。

抑、本邦國民が徳川氏の司配の下に三百年の太平を樂みしや、所謂時代の精神は、江戸覇府の權力を代表せる一種の封建的形式主義によりて、兎も角も其の統一を保ちたり。政治、宗教、文學、美術等一切の文物は、この形式主義の圈套に拘禁せられ、互に其の否塞をかこちながら、兎も角も調和一致せりき。然れども維新の革新と共に、社會の活動の大頭腦、大把柄たる封建制度の顛覆せらるゝや、多年形式主義の壓制に困みし人心は、茲に激烈なる反動を起して、個人自由の發展を主張し、奔放騰逸、左支右吾、一時は其の停る所を知らざるの勢ありき。一方には福澤氏の所謂楠權論の如き争あり。他方には中江氏の民約論の譯書の都鄙に歡迎せらるゝあり。箕作氏の勸善訓蒙若しくは西村氏の智氏家訓の如き、個人的倫理主義は孝經論語に薰陶せられたる

圈套
否塞
把柄

奔放騰逸
左支右吾
福澤氏
福澤諭吉
中江氏
中江篤介
箕作氏
箕作麟祥
西村氏
西村茂樹

汎濫

從來の人には如何に異様の觀ありしぞ。眞政大意立憲政體略の如き政治書は、百個條の徳川憲法を見慣れたる眼に如何に奇怪に映ぜしぞ。功利主義、民約主義の西洋思想が急進者流の間に汎濫せし時に當りて、他方には國學、神道の再興あり。平田流の所謂皇學は、幕府の下に忍びたる久屈の餘勢を振起して一部の人心を風靡せり。觀來れば、紛然雜然其の歸向する所を知らず。保守と進歩と、外國と内國と、政治、宗教、文學の上に到る處に衝突軋轢せり。今日より見れば、かゝる思想の分裂は一見甚だ奇怪なりと雖も、當時國民思想の不定なるや、是の如き異なる物を包容して、毫も其の弊害を自覺せざりしなり。

剖判

この渾沌たる状態は、明治十年以後に到りて漸く剖判の氣運に向ひたり。維新この方引續きたる改革の精神も漸く靜穩となり、無謀なる急進と頑迷なる保守とは臙げながらも漸く自他の長短を覺識し、民約論的急進派も彼我國情の差別を覺りて自ら猛省し、皇學的守舊派も漸く世界の氣勢に鑑みて其の反動の氣焰を收め、茲に共に眼を放ちて自國の世界に對する位置を考察し、以て國家將來の方針を打算し來らんと企てぬ。徳富氏の將來の日本、志賀氏の南洋時事一類の書が、一時洛陽の紙價を貴からしめしは、所詮これ氣運の高潮に乗じたるを以てなり。

徳富氏
徳富猪一郎。
志賀氏
志賀重昂。
洛陽の紙價を
貴からしむ

倭合苟容

顧ふに維新の改革は鎖國の覆面を轉落し、國民をして自國以外に世界あることを知らしめたりき。喩へば猶多年暗室に拘禁せられたる人の、一朝白日の下に放たれたるが如くなり。一時外物に眩惑して自ら爲す所を知らず、手足の觸るゝ所情意の催す所に隨つて、倭合苟容これ事とせしは、寧ろ自然の勢のみ。これ明治十年以前の國民が、殆ど無意識に盲動せし所以なり。然れども其の以後に於ける國民思想の經過を依傍すれば、暗移

依傍

默從の間おのづから一理の貫通するあり。照應收繳以て其の根本的動機を成しつゝあるを見る。何ぞや。國民的自覺の發達これなり。而して吾人は是の國民的自覺の發達は、時代精神の統一に向つて著々其の歩を進めつゝあるの事實を認む。

抑、其の國民的たると個人的たるとを問はず、なべての自覺は三個の階段を経由して發達するを常とす。その初は純客觀的にして、中ごろは純主觀的となり、終には主客兩觀の比量に本づける眞正の自覺に到著す。蓋し自覺の概念は第一自他の差別を豫想す。自己たるを自覺するには先づ自己ならざる他物の認識を須要とす。これ素より論無きなり。而して自己存在の眞意義は、自己と俱存せる一切の實在物と自己との關係を知了する上に存す。これ亦當に然るべきなり。唯この自覺の眞境地に達し、自他の公平なる比較を遂げ得る前には、或は主觀の一

面に偏依し、或は客觀の他面を過重す。これ振子の中正を得んが爲には、左右の擺動を免れざると一般、亦自然の數なりと謂ふべし。

今我が邦にありては、維新の改革は則ち國民的意識を覺醒せる曉鐘なり。吾人が一個の國民としての生活は、實にこの時を以て始めりと謂ふも敢へて不可無きなり。唯創めて國民的意識に目覺めたるものが、頭を擧げて當眼先づ西洋諸國の燦然たる文物に眩惑したるを以て、他を擧げて己を卑うし、偏に外邦の事物を移植して我が土壤を飾表せんことに務む。これ國民的自覺の發達上、所謂純客觀の階段にして、極端なる歐化主義の行はれたる時代なり。之を宗教的意識の發達に比すれば、太古素朴の民族が天地の崇大に接し、自ら抑畏して自然現象を神として拜するが如し。然れども是の如き極端なる歐化主義を實際

に行はんとするに臨み、其の民情國性と相調和せず、往々柄鑿相容れざるものあるを経験するに及びてや、茲に初めて各國人文の特性に想到し、彼と我ともと獨立獨歩の發達を爲すべきものなりと斷定し、翻つて自尊排他の精神を振起するに到る。これ明治十年前後に於て皇學の勃興に伴へる保守論の精神なりとす。これ國民的自覺の發達上純主觀の階段に屬す。これ猶自然宗教に反對して、所謂主觀的宗教が萬有に遍在せる神は、亦吾人の精神中にも現るべきを信じ、隨つて眞正の宗教は神を身外に拜するにあらずして、心内に觀ずるにあることを認むると相似たり。この純客觀と純主觀との二個の傾向は、實際上必ずしも截然相繼承せず、時に隨つて盛衰起伏するを常とす。然れども維新以來國民思想の變遷が、其の消長と提挈左右したること、は争ふべからざるなり。殊に近來兩者の主張漸く極端を遠ざ

かりて中正に近づき、先の楠權論と皇學論とは、中ごろ歐化主義と國粹主義とに移り、今や形を變じて世界主義と國家主義との對峙を觀るに到れり。是等の名稱は主として倫理上に關せりと雖も、百般の文物多少同一の影響を被らざるは無し。

吾人は以上の觀察によりて、最近三十年間に於ける國民的自覺の發達が、時代精神の統一に向つて著々其の歩を進めつゝあるを確認す。試みに今の世界主義を以て往日の歐化主義に比せよ。若しくは現時の國家主義を以て疇昔の國粹主義と較べよ。其の説く所の正偏優劣は素より日を同じうして論じ得べからざるものあり。これ畢竟國民が多年の經驗に指導せられ、漸く自他の間に公平なる商量を遂げ得る所の、吾人の所謂眞正なる國民的自覺に接近しつゝあることを示すものに非ずや。而して是の眞正なる國民的自覺を代表せるものは、所謂世界主

義の極端に走らず、所謂國家主義の固陋に陥らず、國性・民情の特質及び其の發達の理想を自覺して、世界人文の我に及ぼす勢力を商量し、其の生存及び進歩に必要な條件を以て、中正なる國家主義に歸する所の日本主義即ちこれのみ。吾人は時代精神の統一を以て日本主義の天職なりと信じ、且この統一が目下の急務なるを認む。

先にも言ひし如く、時代精神の分裂其の物は決して喜ぶべきことに非ず。唯々更に完全なる統一に達せんが爲の準備として其の用を見るのみ。吾人は思ふ、維新の改革と共に四分五裂したる國民思想は、爾來三十年間の獨立の發達によりて、既に其の分裂の結果を改め了りたるには非ざるか。而して今や方に其の統一せらるべき時期に到達したるには非ざるか。國民的自覺の發達に連れたる時代の氣勢は、暗移默從の間におのづか

幫助
蘊釀

らこの統一の氣運を形成せり。然れども已にこの大勢を自覺したる吾人は、其の自由意志の活動によりて、この氣運の進行を幫助するの責なきか。況や當に統一せらるべき時代精神の依然として分離せるが爲に、幾多弊害の蘊釀せらるゝの事實を認むるに於てをや。

吾人と反對の意見を有する一派の學者あり。おもへらく人生の多趣なる之を一主義に捕へんこと難し。故に經世家は成るべく寛容の精神を以て、反對の見解を等しく思想の大海に游泳せしむるを要すと。この派の論者又説を爲して曰く、今の世に於て日本主義若しくは國家主義を以て國民の精神を拘束するは、維新の改革によりて端緒を開かれたる啓蒙時代の精神を半途にして遮斷するものなり。若かず福澤流の極端なる歐化主義をして、更に其の自由の發達を遂げしめんにはと。吾人遂

に其の意を解する能はず。

人生は多趣多面多岐なる、まことに論者の説のごとし。しかも然るが故に思想の統一を否定するの理由何處にかある。吾人を以て之を見れば、人生愈多趣にして統一の必要愈加る。人生を説明する方法は虚山の八面によりて人々見る所を異にす。

吾人は是等の説明のいづれをも否定せざるなり。たゞ其の實行の主義に至りては、則ち一ありて二無し。論者のごときは畢竟説明と實行とを混同し而して二者の概念各別種の範疇に屬するを覺らざるの弊に坐す。或は言はん一主義を活如たらしむるは反對の主義なり。其の反對の存するは他方の苦痛とする所なれども、其の苦痛は却つてこれをして腐朽枯死せしめざる所以に非ずやと。これむしろ笑ふべきなり。試みに問はん、健全なる體軀は何の苦痛ありてしかく健全なりや。彼の外

部の刺撃によりて其の生存を繼承するものは、未だ自動自覺の境地に達せざる自然物のみ。滯水腐敗の例を以て明瞭なる自覺を有する國家若しくは個人に比擬せんとす、甚だ幼稚の見と謂ふべきなり。若し夫れ今の我が邦には時代精神の統一尙早しと謂ふが如きは、吾人を以て之を見れば、所詮時勢を見るの明無きなり。

見ずや論者の所謂啓蒙時代の精神は、已に其の極點まで發展せられ、國民は今や方に其の過度の弊に苦みつゝあるを。士風の廢頽節義の衰微を效したるものは、昔日の楠權論的功利主義に非ずや。國家の存立の意義をも忘れ、我が國本を危殆に導くをも測らず、徒らに歐米の文明に眩惑して玉石の甄別もなく、自ら我を劣弱なりとして他國の下風に立つに甘んじ、古來の美風良俗をも破壊して顧みず、一意歐風の模倣にのみこれ勉めて、禍

根の發達は尙且足らずとするか。言ふ勿れ、これ其の弊のみと、然り弊ならん、而も其の必然の弊なるを如何せんや。今や兵士を勵ます聲は名譽に非ずして義務なり、報酬なり。これ豈古の武士道ならんや。夫の天下の人をして拜金宗の門徒たらしめしものは、神道か大和魂か、將た歐化主義か。吾人は現今人情の澆季、風俗の廢頹を以て、主としてこの歐化主義に本づける拜金宗の勢力に歸せんと欲するなり。其の弊是の如くにして論者は尙且つ歐化主義の勢力を足らずとするか。

人事は偶然にして成らず、社會の發達は吾人の力行に待つもの多し。今の時は時代精神の統一を要するの時にあらずや。吾人が自然の氣運に先だちてこの必要を認むるは、畢竟國民的自覺の發達に職由す。この機に乗じ、嶄々然として天下の公義を喚起し、是の紛れたる思想の分裂に一振攝を加ふるもの、豈吾

人の義務にあらずや。政治や宗教や文學や、國家の人文に對してもと一體たり。須らく一大精神を以て是を統一し、萬派飛流注いで一壑にある底の大觀を成さざるべからず。凡て大事業を成就して典型を後世に遺すの時代は、上下百方を通じ一國猶一人の如く、一線以て萬條を貫き、部勒法あり、大將數十萬の兵を將ゐて呼應牽聯一步も亂れざるが如くなるべし。山奔海立の歴史的大勳功は是の如くにして初めて成し得べし。而して今の日本に於てこの國民的精神の大頭腦、大把柄たらんものは、吾人遂に是を日本主義に待たざるべからざるなり。

(櫻牛全集)

佐々醒雪

名は政一、京都市の人、文學者、前東京高等師範學校教授、大正六年歿、年四十六

無用の長物

三三 明治文學

佐々醒雪

維新の偉業正に成りて、開國の國は一たび定まるや、世間は西洋の物質的文明の輸入に急にして、和漢の學術、技藝を顧みるに遑あらざりき。況や美術、文藝の如きは全く無用の長物とせられて、幾多の國寶は破棄せられ、無数の古典は廢紙となりぬ。此の間にあつて纔に微光を存せしものは、獨り新聞紙なりき。

新聞紙の刊行は、これまた西洋に學びしものにして、當初は専ら政治論の機關たり、實用功利の論に非ざれば、以て時代思潮に追隨するに足らずとなしたりき。されど、普通教育の制度漸く國內に普くして、文學の知識が中流以下の社會に擴張せらるゝと共に新聞紙の經營者も、亦此等の讀者に對して其の娛樂とな

架空の脚色

佳人之奇遇

柴四郎作

雪中梅

末廣鐵腸作

經國美談

矢野龍溪作

眞諦

るべき文藝の作物を供給せざるべからざるを知りぬ。かくて幕末以降久しく失意の地にありし戯作者が、所謂續き物と稱する合卷の小説を紙上に掲げ初めしは、蓋し明治文學の萌芽なり。從來筆を政治論にのみ執りたりし人々も、此の種の文藝の人心に影響することの速なるを認めて、或は英佛の政治小説を翻譯し、或は新に架空の脚色を立てて、自家の主張を具體的に説明せんことを企てたり。佳人之奇遇、雪中梅、經國美談等は當時最も喧傳せられしものにして、慷慨激越の調時に、青年者流を感奮興起せしむるものなきにあらざりしかど、その豪放粗大の文は未だ人情の機微に入らず、眞に文學の眞諦を得たるものといふに足らざりき。

さもあれ、明治は既に十七八年を経たり。西洋の學術も技藝も稍咀嚼せられたり。世の先覺者はかの徒に物質の皮相にの

硯友社
尾崎紅葉を中
心とする小説
家の一團。
旗幟を樹つ

み腐心するの愚なるを悟りぬ。文藝美術の評價も日に漸く高からんとせり。この勢に乗じて、坪内逍遙等が文學論の出づるあり、硯友社一派の新に旗幟を樹つるあり、在來の戯作者系の人もこれに呼應して立てり。こゝに謂はゆる才筆家にもあらず、政論家にもあらず、熱誠なる態度を以て直に人生を描破せんとする者は、將に踵を接して出でんとせるなり。

思ふに新文藝勃興は、半ば西洋文藝によりて啓發せられたり。されども他の一半は我が國の古文學に淵源せるものなることを忘るべからず。蓋し維新以來萌し來れる西洋文明謳歌主義は、茲に其の極に達して、その反動たる國粹保存論は盛に唱導せられ、國語教育の獎勵、古文學の研究が隆昌を極めしは、あたかもこの頃なりき。されば新文藝の先達は、啻に西洋の文學のみならず、我が國の古文學に回顧し、或は中古の文學に私淑するあり、

私淑

洛陽の紙價を
貴からしむ

尾崎紅葉

名は徳太郎、
東京市の人、
小説家、明治
三十六年歿、
年三十七。

幸田露伴

名は成行、東
京市の人、慶
應三年生、文
學者、文學博
士。

道勁

或は元祿文學に模倣するあり。我が文壇の泰斗として新篇出づる毎に洛陽の紙價を貴からしめし尾崎紅葉と幸田露伴とは、ともに西鶴を學びてその文體を創めしものなりき。

紅葉が艶麗の致は才人の情緒を寫すに長じ、露伴が道勁の調は巧に男兒の意氣を描きぬ。されど、その題材は稍、單調なりき。良、久しうして世間はその反復に倦みぬ。乃ち變化を求めて、或は探偵小説、冒險小説、俠客小説等の複雑なる脚色に喝采し、或は慘澹たる事件を敘したる所謂觀念小説、悲痛なる苦悶を抒べたる所謂心理小説を歓迎し、或は神怪不思議なる妖怪談、或は淫靡不道德なる戀愛談と、幾度か流行は變遷しつゝ、その取材は日に日に人生の暗黒面に向つて進み去らんとせり。その間或は光明小説といひ、家庭小説と號する道德的傾向ある作物の行はれしものなきに非ずと雖も、皆膚淺陳套、未だ人心の要求をみたし、

膚淺陳套

人生に理想を興ふるものにあらざりき。この時に方りて、東洋の一小島國は日清日露の大役を経て、俄然として一等國の伴に伍せり。戦勝に酔ひし豪華の餘弊と、避け難き財政上の壓迫とは、我が國民が生活難の聲として青年の耳朶に響きぬ。顧みれば嘗ては文藝の形式をのみ評論したりし批評家は、漸く人生の研究に轉進し來りて、或は高山樗牛が美的生活論となり、或は綱島梁川が見神説となり、或は自然主義といひ、無理想無解決と呼び、在來の一切の教權を放下すべしとさへ説く者あるに至りぬ。既に生活難の聲に慄ける青年は徒に多岐に惑ひて唯煩悶するあるのみ。而して所謂自然派の小説は、益々人生の暗黒面を誇張して、好みてかの悶々して焦燥し、狂奔し、疲憊困頓、躑々踏々たる敗殘の青年を描きつゝ、以て人生の實相を盡したりとなせり。煩悶せる者が暫くこゝに同情者を得

綱島梁川
名は榮一郎、
岡山縣の人、
倫理學者、明
治四十一年歿、
年三十五、明
治三十七年見
神論を著す。

蒼虬
成田氏、金澤
の俳人、(二三
〇—二三〇)
梅室
櫻井氏、金澤
の俳人、(二四三
—二五三)
落合直文
仙臺市の人、

たるが如く感ぜしは、蓋し一時の迷想のみ。今や世間は漸く混沌たる思想界を出でて更に高く、更に深き人生の眞意義を捉へんとして、倫理に、哲學に、宗教に、文藝に、秩序ある討究を重ねんとせり。思ふに、我が小説界が崇高偉大なる理想に逢著して、更に向上の一路を發見すべきは甚だ久しからざらんとするなり。上來、主として小説の變遷を敘したり。最近の文壇に於て最も注目すべきはこの種の文藝なればなり。さもあれ、上古以來、常に流行し來りし抒情・叙景の小詩形も亦甚だ衰へたるには非ず。歌道には桂園の流を汲む者多く、俳道には蒼虬梅室の門派のみ獨り盛にして、和歌俳句といへば、専ら活社會と交渉なき閑人・隱者の間に行はれしもの、明治初年の大勢なりき。かの國粹保存論・國文學の研究等盛なりし時に至りて、落合直文等とその門

國文學者、明治三十六年歿、年四十三。
 正岡子規 名は常規、松山市の人、俳人、明治三十五年歿、年三十六。
 夏目漱石 名は金之助、東京市の人、文學者、東京朝日新聞社員、大正五年歿、年五十。

外山博士 名は正一、静岡の人、文學博士、教育家、東京帝國大學名譽教授、明治三十三年歿、年五十三。
 土井晚翠 名は林吉、仙臺市の人、明治四年生、第二高等學校教授。

福澤雪池 福澤諭吉の號、大分縣の人、明治三十四年歿、年六十八。
 福地櫻痴 名は源一郎、長崎市の人、脚本作者、明治三十九年歿、年六十六。
 成島柳北 名は弘、新聞記者、明治十七年歿、年四十八。
 三宅雪嶺 名は雄次郎、金澤市の人、萬延元年生、政論家、文學博士。
 森鷗外 名は林太郎、醫學博士、陸軍文藝監、大正十一年歿、年六十三。
 大町桂月 名は芳衛、高知縣の人、文章家、大正十四年歿、年五十七。

下生との手によりて、歌道はまづ青年社會に入り來りぬ。かくて偏に風雅を生命とせる月花の天地を小なりとして、活社會の人生を歌はんとする傾向を生ぜり。俳道には正岡子規出づるあり、天保の俗調を排して清新なる天明調を復活せしめ、更に進みて淡々たる寫實の妙趣を鼓吹し、唯俳句のみならず、寫生文と稱する小品文の流行を促しぬ。この派より出でて筆を小説に著けたるものに夏目漱石等あり。

この他明治の新文藝としては別に新體詩あり。當初は故外山博士等が新體詩抄の調なりしが、その詞藻の稍乾燥なるに嫌焉たる者は、或は中古語を以て西歐の詩趣を傳へんとするあり、或は漢語を用ひて五七の單調を破らんとするあり。中頃島崎藤村が溫雅優美の調、土井晚翠が縱横跌宕の風、最も青年の間に喜ばれたり。今や新詩の格調日に新なりと雖も、或は險怪、或は

蕪雜、未だ雄渾偉大にして、眞に國民の詩歌と稱するに足るものあらざるに似たり。

更に純文藝の範圍を出でて、専ら一代の文章の模範となりしものを求むるに、かの漢文直譯風の文章が流行したりし日に於ても、既に福澤雪池、福地櫻痴、成島柳北等の平易なる文字あり。降つては三宅雪嶺、坪内逍遙、森鷗外、高山樗牛、大町桂月等あり。その文各特色あり、長短ありと雖も、皆縱横自在にして言はんとする所盡さざるはなし。現代の所謂普通文は、純文藝の著作よりも、寧ろ此等の人々の筆致に負ふ所多きに似たり。あはれ明治の時代は、あらゆる方面に於て、げに偉大なる時代にてありけり。この偉大なる事業を繼承し、更に大いにその精神を發揮せしめんものは、實に大正の時代ならざるべからず。大正文學の前途も亦多望なりと謂ふべし。

附 録

十訓抄抄

一 人の君となれるものは

或人いはく、人の君となれるものは、拙きものなりとも嫌ふべからず。文にいはく、「山は小さき壤を譲らず。此の故に高きことをなす。海は細き流を厭はず。此の故に深きことをなす。」といへり。また明王の人を捨て給はぬこと、車を造る工の材を餘さざるにたとふ。曲れるをも短きをも用ふる所なり。又、人の食物を嫌ふ事あれば其の身必ず瘠す。」ともいへり。總じて大人は賤しきを嫌ふまじと見えたり。凡そいとほしければと

十訓抄

三卷、我國に於ける教訓書の嚆矢、建長四年に成るも其著者は、橋成季とし、菅原爲長とし、或は六波羅二藤左衛門入道の作なりともいふ。

山は小さき壤を云々

史記の李斯傳

に太山不讓

土壤故能成

其大。河海不

擇細流故能

就其深。

明王の人を云

唐の太宗の帝

範に明王之使

人如巧匠之

制木。

人の食物を云

孝經の註に人

皆食則體瘠

云

突一 小過を赦して

論語の子路篇

に仲弓爲季

氏宰問政。

子曰先有司

敎小過舉

賢才。

倭人朝にあれ

ば

孝經の註に數

人在朝賢者

不進。

讒諛の甚だし

き

前漢書の鄒陽

傳に夫以孔

墨之辯不能

自免于讒諛。

後

つは

後

つは

後

つは

二 はかなく打語らはむ友なりとも

薰蕕器を異にす

顏淵曰、薰蕕不同器而藏。(孔子家語)

四人の翁

南山の四皓ともいふ。東園公・綺里季・夏黄公・角里先生。秦の人々。

七賢

嵇康・阮籍・山濤・向秀・劉伶・王戎・阮咸。何れも晋の人。

はかなくうち語らはむ友なりとも、よくその人を擇ぶべし。薰蕕器を異にすべし。」となり。花のもとに春ばかりをちぎり、月の前に一夜を限る友までも情あるたぐひは忘れがたく思ひ出でらるゝものなり。すべて友を語らふには隔つる心なきを徳とす。ゆめく心悪しからむ人には伴ふべからず。芝澗にすみし四人の翁竹林にこもりし七賢の類、さこそ思はしき友なりけめ。

三 萬の事を思ひ忍ばむは

萬の事を思ひ忍ばむは優れたる徳なるべし。人の心の中に諸のあしき事をのみ思ふ。これを忍ばざるは浅ましかるべし。人の身の上にさまざまの苦あり、これを忍ばざるは世に立ちめぐるべからず。中にも年若きともがらは、飢を忍びて道を學び、寒さを忍びて君に仕へつゝ、家を起し身を立つるはかりごとを

すべきなれば、何事につけても、かたぐ物に堪へ忍ぶべきなり。

四 世の中のかはり行くさま

世の中のかはり行くさま、昔よりは次第に衰へもて行くにつけつゝ、道々の才藝も亦父祖には及び難き習なれば、藍よりも青からむ事はまことに稀なりといへども、形の如くなりとも箕裘の業をつがざらむ、口惜しかりぬべし。

年々隨筆抄

一月

月は水のほとり殊によるし。いと大きな川の、のどやかに流るゝ、あなたの岸にまどおして打笑ひなどしたる、唐人の登りけむ南の樓思ひ出でられて、誰ならむとゆかしきに、千里に明なりと詠ずるにやあらむ、ほのく聞ゆるいとをかし。

年々隨筆抄

箕裘
鐵

年々隨筆

石原正明著。石原正明、尾張の人、歌人、文政四年(三)歿、年六十二。

唐人の

昌揚子江のほりの南樓にて、友と月を賞した故事。

南樓の月見亭と云ふ所、日見亭と云ふ所。

月滿前山風不動、更遊所、南樓。

中あゝいゝかかりかか、ゆめく心悪しからむ

月滿前山風不動、更遊所、南樓。

雪影をいづくもくをかし。たゞ海のみすさまじげなり。それ
も湊江の蘆すこしばかり折れ残りたるひまに泊舟二つ三つ篷
いと白う見ゆるはをかし。市の中は何事も目とまることなけ
れど、たゞ雪の朝こそめづらしうをかしけれ。すべていづくも
雪はけしきことに、處かはりたる心地してめづらしうをかし。
日のさしのぼる程みな起出て、往來さかしままで道あしうなり
ぬべし。いとあぢきなし。「とく掃き集めよ。取捨てよ。」など
いひさわぐこそ悲しけれ。

二 雪

年々隨筆抄

雪影をいづくもくをかし。たゞ海のみすさまじげなり。それ
も湊江の蘆すこしばかり折れ残りたるひまに泊舟二つ三つ篷
いと白う見ゆるはをかし。市の中は何事も目とまることなけ
れど、たゞ雪の朝こそめづらしうをかしけれ。すべていづくも
雪はけしきことに、處かはりたる心地してめづらしうをかし。
日のさしのぼる程みな起出て、往來さかしままで道あしうなり
ぬべし。いとあぢきなし。「とく掃き集めよ。取捨てよ。」など
いひさわぐこそ悲しけれ。

三 ゆふべやまさりたらむ

ゆふべやまさりたらむ。村雨なごりなく晴れ、風いと涼しう
て山の端の雲いと白うわざとならずとこころぐに懸れるに、い
ざよふ月の今出づべきにやあらむにほひうつりて見ゆる。あ
らうまがふ、やまも見えぬ。

四 櫻

したやまさりたらむ。峰の松原濃きみどりなるに茜の色燃ゆ
るやうにて田のなからばかりさし出でたる。

散るぞめでたきと詠みしもことわりなり。櫻のさかりはた
だ二日三日ばかり、あまりあへなき心地はすれど、又來む春はと
心いられして待たるゝも、久しからぬ故ぞかし。唐桐といふも
の葉のさま涼しげに、花の色いとめでたけれど、夏の半より秋過
ぐるまで、たゞ同じさまに咲きたるに飽きはてて、とく枯れよか
しとさへぞ思はるゝや。

五 菊

唐國にては菊は黄なるを愛づめり。詩どもにも黄菊黄花な
どぞ聞ゆる。皇國にはおきまどはせると霜によるへしより始
めて、白きをむねと言ひならはしたり。實に手を盡したる種々

年々隨筆抄

おきまどはせ
心あてに折ら
ばや折らむ初
霜の、おきま
どはせる白菊
の花。凡河内
躬恒(古今集)

散るぞめでた
き
残なく散るぞ
めでたき櫻花
ありて世の中
は、人のうけれ
ば、讀人不知。
(古今集)

あはれ
えし

檀園文集抄 中島弘定 肥後守

一 閑中春雨といふを

花ざかりは更なり、さらでも柳など青やかにうち煙りうらう
 らと照りたる日は蕨土筆などいかならむと、野山のさまのみゆ
 かしく思ひやられて、庵の中には籠り居難きを、人さへゆくりな
 く訪ひ來つゝ、近きわたりまでいざななど、そのかすめり。
 雨の降る日は、さることも思ひ絶えて、人はた音づれねば、文机に
 のみよりゐたる、なかくにをかしうなむ。萱ふける軒は雨の
 音靜かにて、池水のあやこまかなるに、いと深う霞める梢より、翅
 しをれたる鳥どもの、そこはかとなく飛びわたるなど、いといた
 うをかし。暮れぬれば、まして、いとしめやかにて、見る書さへ今
 ひとときは心しみぬ。風少し吹き出でて、燈臺の火のまた、きた

ゆかし、ふらふら

あやみ様様
しるし

るに、何とも知らぬ花の香のほのかにうちかをりたるなどもを
かし。

二 燕

いとうらゝかなる日思ふどちうちつれゆく大路に、つばくら
 めのこなたかなた飛びかひて、ふと袖の下を過ぎたる、手にも捕
 へつべくていとをかし。雨のなごりのなほかわかぬ方などに
 下りゐて、ひぢを含みつゝ、童部の走りくるに驚き立ちて、遠く翔
 りゆくもをかし。梁に巣くひていつの程にかあまたの雛おほ
 したるが、飛びくる親を待ちて、口のかざり開きつゝ、鳴きさわぎ
 たるさまは、いみじうこそあはれなれ。

三 蚊遣火

晝のほどの暑けさは、水の上さへむとくにて、いと耐へ難かり
 しを、やうく日影もかたぶきて、木の間よりそよぎ出づる風の

どまりと遣

つゝ、そら

ゆらゆらと流

あやみ様様

あやみ様様

あやみ様様

あやみ様様

あやみ様様

あやみ様様

あやみ様様

わさやリ...
け...
あ...
あ...
あ...

檀園文集抄

あ...
あ...
あ...
あ...
あ...

いと涼しきに、ゆあみなどして立ち出づれば、月の影さへほのめ
きて、晝の苦しさも、かつぐわすられぬ。や、遠くゆくほど道
の傍なるしづが伏屋より、烟のいとしげく立ち上るは、蚊遣ふす
ぶるにやと思ふに、大きな火桶に、何にかあらむ青やかなる木
の葉をいと多くさし入れて、こなたかなたあふぎちらすはいと
あつかはしく、見る目もいぶせて、急ぎ歩みすぎて見れば、やう
やう薄らぎゆくけぶりの、杉の梢にたなびきたる、霞おぼえてを
かしきに、かはほりさへ三つ二つ飛びかひたる、繪にも書かまほ
しき景色になむ。

四 山路 菊

木々の紅葉むらく、染めわたして、尾花が袖も人待ち顔にう
ち招く山道のいとおもしろきに、女郎花蘭などのやうくうち
枯れゆく中より、今咲き初めたる菊の露もとを、に靡きいでた
らうらやうに、尾花が人待ち顔に、

この花開きて
不_二是花中偏
愛_一菊。此花開
後更無_一花。
(和漢朗詠集)

る、物よりことに目に立ちて、いとなつかしう覺ゆ。「この花開き
て後。」などうちずしつ、さかしき岩根を傳ひ登るほど、水音さ
へさやかにて、やうく山深くなるま、に、谷川の流、岩のはさま
など、異草も交らていと多く咲き亂れたる、濃き薄きさまざま、色
をつくして、いとかうばしく、波にぬる、枝さしへもあはれに
なつかしきは、まことに仙人の住家に來たる心地なむせらる。

五 冬

月

思ふどちまどあして、うづみ火かきおこし、心へだてなく物語
するに、いつしかさゆる夜のけはひも、忘られて、窓の戸おしあく
れば、宵の浮雲なごりなくはれて、雪少し降りたる庭に、月のさや
かに照りたるが、いはむ方なくおもしろきを、かくてのみやはあ
るべき、徒に寝て明すらむあたりをも驚かしてむ。」と、やがてう

檀園文集抄

徒に寝て云々

かくばかりを
しと思ふ夜な
徒に寝て明す
らむ人さへぞ
うき。凡河内
躬恒(古今集)

ちつれつゝあくがれ出づ。

人の行きかひも絶えたる大路の凍りわたれるをふみならず
足音、我ながらいとをかしく覺ゆ。「かゝる月夜をしも、すさまじ
といひけむ昔の人こそ心得ね。」などいひしるひつゝ、やゝ遠く
あくがるゝに、風のいとさむく、身にしみて堪へがたければ、興盡
きて反る。」といへる故事もあなるものをとて、各々たち歸るに、
「夏ならましかば、尙いづこまでかは、あくがれなまし。」と思ふも、
いとをかしくなむ。

六 埋

火

「いと寒きに火など急ぎおこして、炭もて渡るもいとつきん
し。」と、少納言の筆すさびに物せられたるげにさることにて、冬
は只これのみぞ、まらうどのあるじまうけにもなりぬめり。雪
降り積みたる日、かねてちぎりしをとふに思ひしごとくに、南面

すさまじと云
すさまじきも
のにして、見
る人もなき月
の寒けくすめ
る二十日あま
りの空こそ心
細きものなれ。
(徒然草)
興盡きて反る
云々
吾本乘興而
來、興盡而反
何必見安道
耶。晋書、王
徽之傳、安道
は戴逵の字で
ある。
少納言の筆す
さび
火などいそぎ
おこして、炭
もてわたるも
いとつきん
し。(清少納言
の枕草紙)

清くはらひて簾高く捲きあげたり。大きやかなる火桶のよき
ほどにうづめる火に、やがてさし向ひたる心地いみじううれし
く、いたり深き主人の心も思ひ知られぬ。かくて何くれの物語
するほど、尙炭をとて取り出でたる、手づからさしそふるもをか
しきに、大きやかなる齒固など取り出して、やがてこれにて焼き
てこそは。」といふに、雪のさむけさもかつゝ、忘れられてなむ。

七 夕

遠山寺の入相の鐘、ねぐらに歸る夕鳥も、いつしか聲しづまり
て、向へる文巻もやうく見えずなりゆくに、心ゆくわたりはい
とくちをしきものから、暫しうちおきて、端の方に出づれば、暮れ
残る梢どものほのかなる山の端に、僅にあらはれたる三日月の
影こそいとをかしけれ。青鷺とかやいへる鳥の、あやしき聲に

なきゆくが、何となくものさびしげなるを、來むといひつる友は、
た暮れすぐしてやと思ふも心もとなきに、ともし火かゝげたる
こそまづうれしけれ。

八 驛

治れる世は、驛路のゆきかひも賑は、しく、人宿す家はた建て
續けて草引き結ぶ思ひもなきものから、さすがにうちとけてし
も寝られぬは、旅路の習なるべし。曉の鐘はいづこも同じ響に
て、いととく立ち出づる旅籠馬のこゑ、枕上に聞えて心地よ
げなるに、今日は天氣もよかんなり。何がしの浦の眺めいかに
をかしからまし。かしこの御社にもこたびこそは、などいひ
つゝ、さゝやく音のほのかに聞ゆるは、あなたに寝たる旅人なる
べし。家なる人々も起き出でて、朝食のことなどとかくまかな
ひありく程、やうく、物さわがしくなりて、物擔ひゆく男どもの

失序
ついで
ついで

俚諺うたふなど忙はしげに聞ゆ。とばかりありて、門のもとに
引き寄せつゝ、馬まゐりて候。」といふは、吾が乗るべきにやと思
ふもいとをかし。

九 漁村

海人の住家ばかりあはれなるものはなし。いとたよりなき
海邊の風もたまらぬ松蔭などに、唯かりそめに造りたる藁屋ど
ものさま、波うちよせなば、やがて流れもうせぬべう、いとはかな
げに見ゆるを、繪に書きすさびたるなどは、なかく、にをかしき
ものから、さて住みなば何心地かせましと思ひやるだに心細し。

一〇 岸頭待舟

いとよき折かなとて急ぎくるに、岸さし放ちたるこそ、いみじ
うくちをしけれ。尙暫しく、今一人乗せてよ。」といふく、走

りくるもあるを、聞かぬ顔して漕ぎゆく後手は、いと憎きものか
 ら、さのみ漕ぎ返したらむには、え堪ふまじくやと思はるゝを、あ
 なにくの船人や。徒に人を走らせて。」と、腹あしげにいひたる
 こそ、心なくは見ゆれ。かたへの石に尻かけて見やれば、蘆間遠
 くさし分けゆくを、かなたの岸にも待遠なるけしきにたゞずみ
 たる人あり。水上よりさし下す筏のさまいと静かなるに、中洲
 の渡には小さき舟繋ぎて、四手とかいふ網さしおろして、とかく
 するなどいとをかしく、一日もかくて見まほしう覺ゆ。後れた
 る人々つぎ／＼來あひて立ち待つ程、やう／＼漕ぎもて來たる
 こそうれしけれ。

一一 夜

學

寺々の初夜の鐘のひゞきもをさまりて、皆人もねたるにいと
 うれしう、ともし火あかくしなして、文机にうち向ひたる、いみじ

う心すみて、晝見たりしあたりの、何心なくて過ぎにしも思ひ知
 られて、ふかき心ばへあるくだり／＼もおのづから解き得らる
 かし。かゝげつくしてもなほねぶたさも知らず、油さしそへつ
 つ見もてゆくに、遠き世の人もたゞさし向ひ語らふ心地す。冊
 子つくりて、をかしきふし／＼、あるはふと思ひ得たることなど
 をば墨おしすりつゝ、書きつけなどするもをかし。鳥の聲は、夜
 深きにやと思ふに、いとく明けはなれたる、しばしとてうちね
 ぶる夢のうちも、あだしごとならむやは。

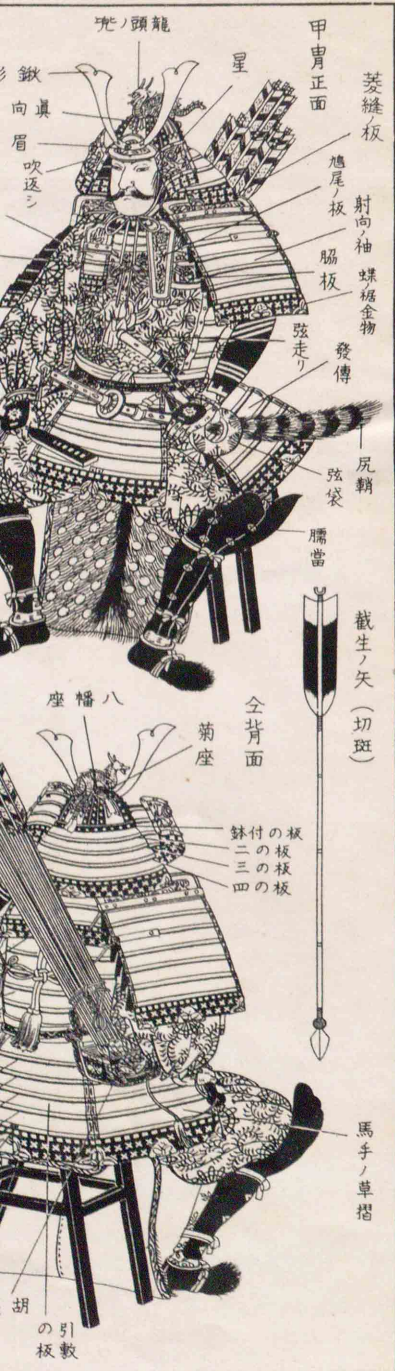
新日本讀本 修正版 卷九 終

略字表

左の字體を本位として用ひること。
(括弧内の小字は字典體)

勸(勸) 權(權) 淮(淮) 歡(歡) 觀(觀)
 沢(沢) 沢(沢) 沢(沢) 沢(沢) 沢(沢)
 変(變) 恋(戀) 蛮(蠻) 灣(灣)
 莖(莖) 徑(徑) 經(經) 輕(輕)
 併(併) 塀(塀) 瓶(瓶) 餅(餅) 研(研)
 齊(齊) 齋(齋) 濟(濟) 劑(劑)
 殘(殘) 淺(淺) 賤(賤) 錢(錢)
 勞(勞) 營(營) 榮(榮) 學(學) 覺(覺)

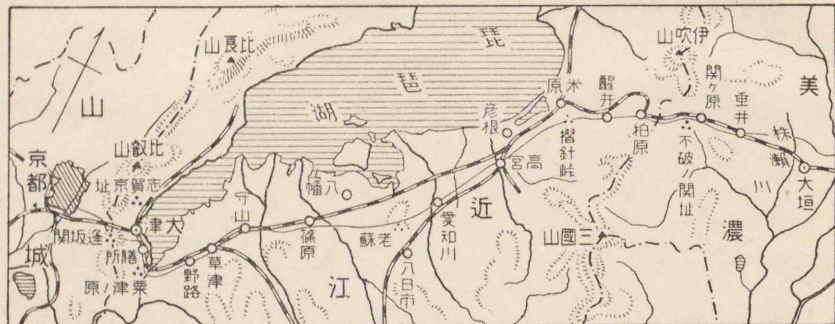
舉(舉) 譽(譽) 斷(斷) 繼(繼)
 齒(齒) 齡(齡) 濕(濕) 頭(頭)
 窓(窓) 窓(窓) 屬(屬) 屬(屬)
 為(爲) 偽(僞) 帶(帶) 帶(帶)
 參(參) 慘(慘) 兩(兩) 兩(兩)
 発(發) 廢(廢) 胤(胤) 胤(胤)
 乱(亂) 辭(辭) 潜(潛) 潜(潛)
 走(走) 徒(徒) 位(從) 位(從)
 惱(惱) 腦(腦) 処(處) 処(處)
 担(擔) 胆(膽) 耒(來) 耒(來)
 寿(壽) 鑄(鑄) 数(數) 数(數)



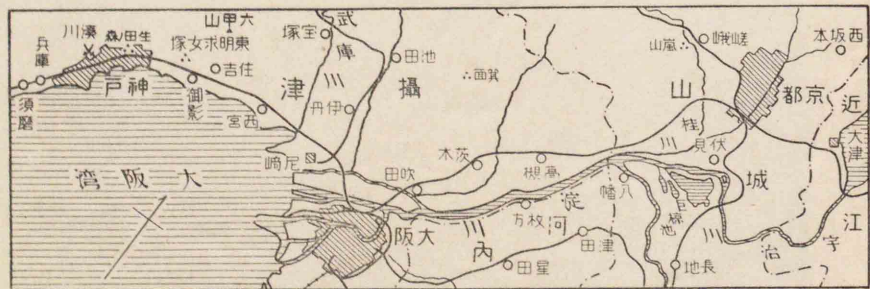
条(條)様(樣)
 炉(爐)儀(儀)
 献(獻)画(畫)

帰(歸)气(氣)
 略字表 終





照參(旅の路東)課四第



照參(家高郎太田山小)課九第

(修正新日 第九卷 參考圖)



編
者

吉
澤
義

則

京都市外修學院

文部省檢定濟

昭和三年十二月三日 中學國語教科用

大正十四年十月十日印刷
 大正十五年一月三日訂正再版印刷
 大正十四年十月十三日發行
 大正十五年一月五日訂正再版發行
 昭和三年七月二十日訂正三版印刷
 昭和三年七月二十三日訂正三版發行
 昭和三年十一月一日訂正四版印刷
 昭和三年十一月五日訂正四版發行

新日本讀本 修正版	
定價	昭和六年臨時定價
卷一—四	金四拾五錢
卷五—十	金四拾參錢
	金七拾壹錢
	金六拾八錢

發兌

東京市神田區表神保町二
 大阪市東區博勞町五丁目

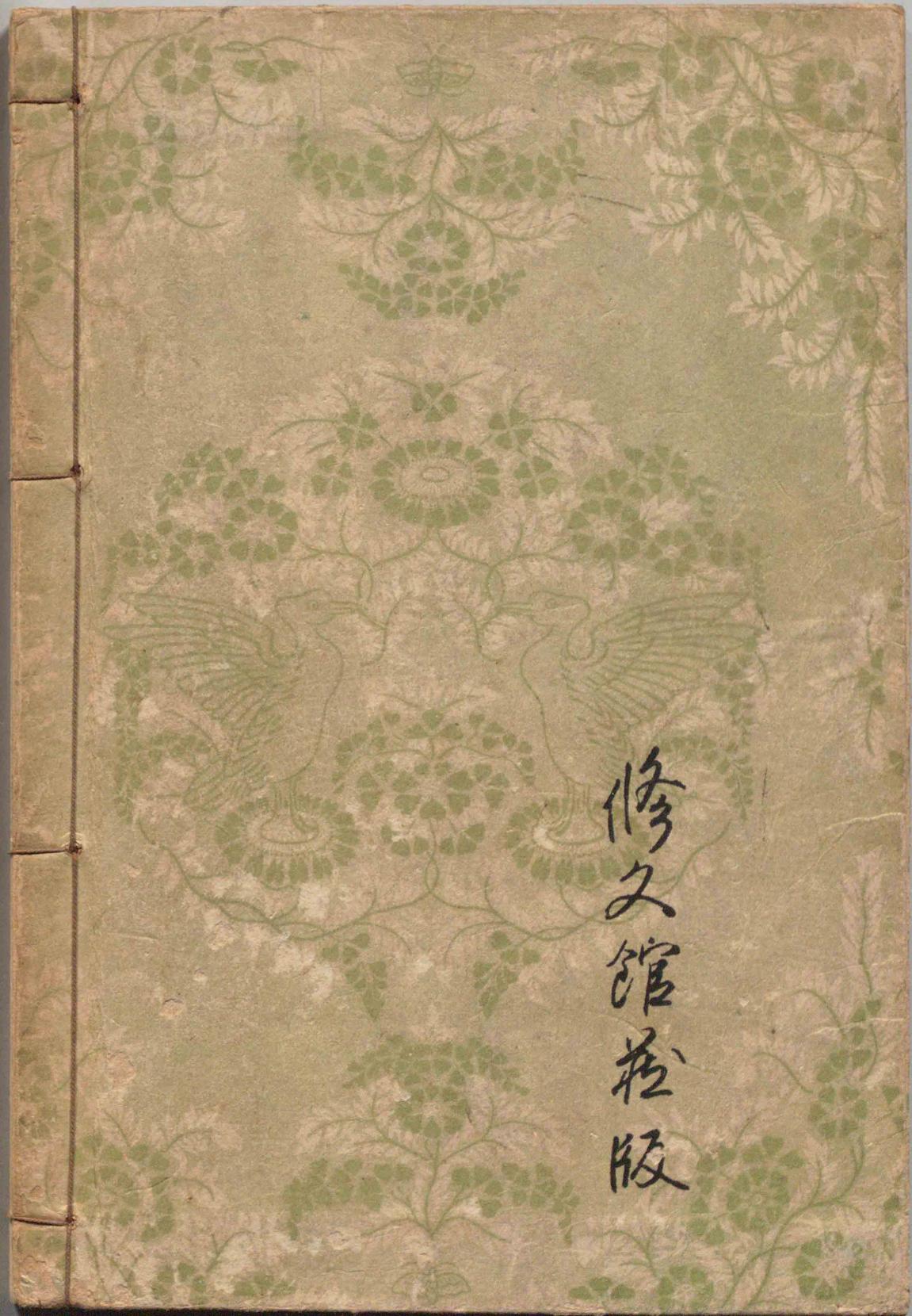
修

振替口座東京二六四四番
 振替口座大阪四七一番
 文館書店

發行所
 東京市神田區表神保町二
 鈴木政雄

發行所
 大阪市東區博勞町五丁目
 鈴木常松

印刷所
 大阪市西區阿波羅中通二丁目
 余部留吉



修文館藏版